

---

# もう一人の実力者

ロボット

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

もう一人の実力者

### 【Nコード】

N8182W

### 【作者名】

ロボット

### 【あらすじ】

名探偵コナンの世界にオリジナルキャラクターを放り込んだ短編集です。

カップリングは基本的に新蘭、平和、快青ですが、オリキャラと灰原が恋人になります。

以上の事に不快感を感じる方は閲覧をご遠慮下さい。  
初投稿なので駄文な上、クセの強い物ですがお楽しみ頂けたら幸いです。

## 本当の自分を失った者どうし

ここは米花町。

夕方と呼べる時間帯になったおかげで、突き刺すような日差しは多少なりを潜めていた。

そんな中、元気に話し合いながら歩いてくる少年少女の五人組。正確に言えば、元気が良いのは少年二人と少女一人の三人である。後の二人は、そんな三人の少し後ろを見守るような、呆れた様な表情をして付いて行く。

彼らは帝丹小学校、一年B組に在籍している少年探偵団だ。

メンバーは、小嶋元太、円谷光彦、吉田歩美、江戸川コナン、そして灰原哀である。

小学校からの帰りだったのだが、今日は少し遠回りしていた。

そこは通行人が多い道で、先程から人とぶつかってばかりだ。

「ったく、なんでわざわざ遠回りして帰らなくちゃなんねーんだよ。」

「

思わず口からそんな愚痴がこぼれてしまう。

コナンとしてはさっさと帰って推理小説を早く読みたいのだ。

前に行く三人とは距離が離れていた為聞かれなかったようだが、隣を歩いている哀には聞こえてしまったようだ。

「あら、たまにはいいじゃない？ どうせ帰っても血生臭い小説を読むぐらいしかないんでしょうから。」

嘲笑に近い様な笑みを浮かべながら皮肉を込めて哀が言って来た。

凶星を刺されてしまったが、このまま負けるのは納得がいかないという反撃に出るコナン。

「へへー…、毎日地下室に籠ってるような奴には言われたくねーよな。」

しかし、それは完全に墓穴を掘るものであり、

「そうね、私も研究なんかやめてシヨッピングにでも行こうかしら

？その分、誰かさんは元の体に戻るのが遅くなるでしょうけどね。」  
表情一つ変えずに言い返される。

「…オメー、それは反…。」

ジト目で文句を言おうとした時、一人の男と擦れ違う事でコナンのセリフは途切れてしまう。

コナンは驚きに目を見開き、すぐに後ろを振り返るが擦れ違った男はもう人混みに紛れて見えなくなっていた。

（今のは、まさかアイツか……？）

「どうしたのよ？いきなり。」

コナンの反応を不審に思った哀が尋ねるが、何でも無いという答えしか返って来なかった。

数日後。

今日は金曜日。授業も全て終わり、子供達は明日からのお休みを如何過ごすかで賑わっている。

少年探偵団の面々も例に漏れず、下校時になっても話が途切れる事は無かった。

「それでよー、明日は結局どうすんだ？」

なかなか、話が決まらない事に少しばかり苛立った様に元太が周りに尋ねる。

「そうですね…。皆で博士の家に行くってのは如何でしょうか？」

光彦が皆が楽しめそうな妥当案を出した。これにすかさず元太は賛成する。

「うん。歩美もそれが良いと思う！」

歩美も賛成のようだ。

「よし、じゃあ明日は博士ん家で…。」

「だめよ。たまには博士にも、お休みさせなきゃいけないんだから。」

「今まで会話に参加していなかった哀が待ったをかける。」

「それと私、用事があるから明日はパス。」

さらに、別の所で遊ぼうという話になるのを読んで先手を打っておく。

「えー！？じゃあコナン君は何処で遊びたい？」

博士の家がダメなのと哀が不参加に、二重の不満を漏らしながらも歩美はコナンに意見を求める。

「ワリィな。俺も明日は用があるんだ。日曜なら空いてるからさ。」

「ええー！！？」

しかし、コナンの返答によって三重の不満になってしまった。

「なんだよ！付き合いワリィぞ！」

「そうですね！折角皆で集まろうとしたんですから！」

元太と光彦も揃えて不満を口にした。

コナンは本当に申し訳なさそうに謝っている。

その誠意が通じたのか

「分かったけど、日曜は絶対約束だからな！コナンも灰原もちゃんと参加しろよな！」

と多少強引ではあるが休日の過ごし方が決まった時、突然後方から悲鳴があがった。

「ひったくりよー！！誰か捕まえてー！！！」

声が出た方を向いてみると、一人の男が女性物のカバンを持ってこちらに走ってきていた。

（ひったくりだって？運が悪かったな、この麻醉銃で直にとっ捕まえてやるぜ！）

コナンは静かに男に向かって麻醉銃を構えるが

（くそっ！人が多すぎて奴に照準が合わせられねー！ましてやサッカーボールを蹴る訳にもいかねーし！）

どうやって捕まえるか決めあぐねている間に、ひったくり犯はコナン達の前を通り過ぎた。

元太達は突然の事に対応しきれていない。

「待て、逃がさねえぞ！」

みすみす自分の前で犯行を許すわけにはいかないと、走って追いかけるが、大人と子供では速さが全く違う。どんどんと距離は離れていく一方である。

（追いつけねー！何か方法はねーのか？）

コナンが辺りを見回していると突然横を突風が吹きぬけた。

その突風は、あっという間に犯人に追いつき腕を掴んで逃走を阻止する。

突風と思ったのは一人の男だった。それは数日前コナンが目を見開き振り返った人物でもあった。

男の風貌は高校生ぐらいだろうか、少年と言っても問題ない様に見える。

「ちょっと待ちなよ。あの人、困ってるじゃないか。」

少年は右腕で犯人の左腕を掴んでいる。

これが警察等の経験者ならば、すぐにでも関節を極めて犯人を無力化するのだろうが、この少年は全くもって次の行動に出る気配が無い。

「うるせえ！ガキが調子に乗ってんじゃねえ！」

犯人もその事に気付いたのか、カバンを持った右手で少年の顔を殴ろうとした。殴り倒した後に再び逃走を開始しようと考えたのだが、犯人の拳は少年には当たらなかった。加えて少年は攻撃を回避すると同時に、犯人の鳩尾に左の拳を打ち込んでいた。

これには堪らず犯人は気を失ってしまう。しかし、攻撃した少年自身も良く分かっていないようだった。

やがてやって来た警官によって犯人は連行され、少年は被害者の女性から深々と感謝されて、小さな事件は終結した。

探偵団は今回の事件を解決した少年を囲み、興奮冷めやらぬ状態で次々と称賛していた。当然のごとくコナンと哀を除いてだが。

「すっげーよな！あつという間に追いついちまってよ！」

「ええ、そして一発で仕留めてしまうんですから！」

「まるでヒーローみたーい！」

少年は照れているのか少し頬を染めながら対応に困っていた。

「僕は特別すごい事はしてないよ。体が勝手に反応した感じだったから。」

その光景を黙って見ていたコナンは、そのまま目の前の少年を観察していく。

（この男はやっぱりアイツなのか？いや、アイツだとしたら犯人に追いついた時に無力化させるのを忘れるなんて失態は絶対に無い筈だ。それ以前に口調が全然違うし、如何なってやがんだ？）

考えても答えが出てこないと踏んだコナンは少年に質問してみる事にした。

「ねえ、お兄さん。お兄さんの名前は何て言うの？僕は江戸川コナンって言うんだ。」

少年はコナンの方を向き、屈んで目線を合わせながら答えた。

「僕の名前は三井隼人。よろしくコナン君。」

コナンに続いて探偵団の全員も自己紹介をしていく。それを聞きながら、コナンは一つ確認がとれた。

（やっぱり…。けど分かんねえ、以前の三井とは雰囲気全然違う。もう少し聞いてみっか。）

「隼人兄ちゃんは今まで何してたの？だってこんなにすごい人が居たのに全然知らなかったもん。」

しっかりと子供の演技をしながら、純粋な疑問だと相手に思わせる様に質問する。

しかし、質問された隼人は困っているようだった。

「ごめんね、コナン君。僕にも分らないんだ。僕には記憶が無いから…。」

「おまえ、記憶が無いのかよ？」

「記憶喪失ってやつですね。」

「なんか、かわいそー。」

隼人の答えに対して次々と同情の声が上がる。

（記憶喪失か……。なるほど、やっと分かったぜ。）

「ねえ、さっきから何を考えてるのよ？彼の事が随分と気になってるみたいだけど？」

いつの間にか哀がコナンのすぐ隣に来ており、そっと耳打ちした。

「ワリィ、後で話すから待っていてくれよ。」

とだけ答えて、コナンはすぐに会話を終了させてしまう。

「隼人兄ちゃん、ちよつと……。」「

コナンは隼人を呼び内緒話をするようにひそひそと話しかける。

話を聞いていた隼人も、ひそひそと了承の返事をした。

「ねえ、コナン君。二人で何の話をしてるのー？」

「俺達には言えねえ話なのか？」

「あつ、また抜け駆けですね？」

そんな二人のやり取りが気になるらしく探偵団の三人からは次々と不満が漏れる。

「んなんじゃねーよ。記憶喪失を直す良い医者を知ってたから、教えてやっただけだ。」

しかし、コナンの返答だけでは信じられない面々は隼人に視線を送る。

その視線に対し隼人は、コナンはウソを吐いて無いと答えたのであった。

その後、時間も遅くなるからと、その場で解散した探偵団。

解散した後、コナンは哀と二人で歩いていた。

やがて哀が、ジト目でコナンを睨みながら気になっている事を尋ねる。

「ねえ、『記憶喪失を直す良い医者』って博士の事を指してるんじゃないでしょうね？」

「えっ、あ、いや…その…。」



両手を体の前で振りながら何か話そうとするが、言葉が出てこないコナン。

そんな様子を見て哀は、大きな溜息を吐いて呆れながら言った。

「…やっぱりね。それにしても、見ず知らずの人の記憶を取り戻してあげようなんて、本当にお人好しね？でも、こういうのはちゃんと専門医に…。」

「そんなんじゃないよ。」

「え？」

しかし哀のセリフはコナンによって遮られてしまった。

哀が真意を測ろうと見つめて来るが構わずに続ける。

「見ず知らずの人なんかじゃねーよ。アイツと俺は知り合いだからな。」

その言葉に哀は目を少し見開く。

「正確に言えば、本当の三井隼人と工藤新一が知り合いつて訳さ。」

「なるほど？それで記憶を取り戻してあげたいって言うのね？随分と友達思いなのね。」

哀は表情を元に戻して皮肉を込めて言ってみるが、それに対してコナンは苦笑しながら答えた。

「それも有るかもしれねーが、我慢ならなかったって言うのが本音だろうな。」

「我慢？」

「ああ、アイツとは中学の時に知り合ったんだけど、その時に俺はアイツに対して負けを認めた事が有ったんだよ。だから、自分を負かした人間があんな風になっているのが、見てられねえんだと思う。」

話しているコナンの目はどこか遠くを見つめていて、まるで他人の話をしているようだった。

「ふーん。…それで？記憶を戻す方法に目途は付いてるの？」

一通り話を聞き終えた哀が尋ねるが、コナンはそれが意外だったらしい。

「あれ？反対なんじゃねーの？」

「あら、あなたが負けを認めるほどの人物なんて、興味深いじゃない？」

「あ、そ。…方法は明日までに考えてみるさ。」

話している間にちょうど分かれ道に着いたので明日の日程を確認しあった後にそれぞれ自宅へと向かって行った。

翌日

午前十時頃、阿笠邸の門前に隼人は立っていた。

昨日コナンと、ひそひそと話した約束を守るためである。

そつと、インターホンを押すと暫くして中からコナンが出て来た。

「あ、隼人兄ちゃんいらっしやい。上がって上がって。」

コナンは隼人の腕を掴んで中へと引っ張っていく。

そしてソファーに座らせて、自分はその正面に腰かけた。

家主の博士は傍に立って真剣な表情で行く末を見守っている。

やがて哀がキッチンから人数分のコーヒーを持って来て、配り終えたのを確認してから隼人は話を切り出した。

「それでコナン君。僕に用事って何かな？」

その問いにコナンは、コーヒーを一口啜ってから答えた。

「あのね、ちょっと隼人兄ちゃんに聞きたい事が有ってね。」

「聞きたい事？」

「うん、隼人兄ちゃんは工藤新一って人、知ってる？」

聞いていた隼人の表情が僅かに翳る。

「工藤：新一……？分らない……初めて聞いた筈なのに、知っている気がする……」

「工藤新一って人は隼人兄ちゃんの事、良く知ってたよ。親友でもあり、ライバルでもあるってね。今度会ったら中学の時の約束を果

たすってさ。」

「中学……？約束……？」

コナンの言葉を聞いていると隼人の脳裏に、ある光景がフラッシュバックしてきた。

『俺は工藤新一。君は？』

『オメーには負けたよ。でも……。』

「うう、頭が……痛い。」

フラッシュバックが起こる度に、頭が割れそうな激痛に襲われる。その痛みに必死に堪えようと隼人は頭を抱えて蹲ってしまう。

「隼人兄ちゃん……いや、三井！何もかも忘れちゃったのかよ？」

「うう、ううう……」

「オメーと再開した時には、必ず俺の方が上だと分からせてやるって約束したじゃねーか……！」

もはやコナンも子供の演技をするのを忘れ、隼人の目の前に詰め寄っていた。

「ちょっと、工藤君！それ以上刺激するのは危険よ！」

隼人の様子が尋常でないことに不安を感じた哀が止めに入るが。

「黙ってろ……！！」

コナンの一喝でそれさえ許してもらえない。

「おい、いつも堂々としていて、誇り高かったオメーは何処に行っちゃったんだよ……！！？目を覚ませよ！三井……！！」

コナンは隼人の胸倉を掴んで、懇願するように叫んだ。

暫くの静寂が辺りを満たした。それはほんの数秒だったのだが、数分にも感じられる物だった。

「……うるせえな。」

そんな静寂を破ったのはここに居る誰の声でも無かった。いや、正確には声自体は聞いた事が有ったが、聞いた事が無い口調だった為に誰か判別出来なかったのだ。

皆の視線は声を発したであろう人物に集中していた。

そこには、いまだに頭を抱えたままの隼人が居た。

「大声出してんじゃねえ。」

ゆっくりと顔を上げて行く隼人、その表情は今までと一転して不敵な笑みで満たされていた。

「おい。俺と工藤しか知らねえ事を何故知ってる？ 加えて工藤みてえな話し方。お前何者だ？」

隼人は自分の胸倉を掴んでいるコナンを鋭く睨みつけた。その目は『一切の誤魔化しは通用しない』と語っている。

表情、口調、そして纏っている空気の全てがガラリと変わってしまった。本当に先程までの隼人と同一人物なのかと博士と哀は戸惑ってしまう。

「ああ、それはな…。」

この中で唯一、本来の隼人を知っているコナンは動揺する事無く、胸倉を掴んでいる手を放して今まで自分に起こって来た事を詳しく丁寧に説明した。

「って訳なんだよ。どうだ信じてくれるか？」

「信じてやるぜ。取引を見るのに夢中になって、あわよくば殺されかけたなんて、そんなバカは工藤ぐらいなもんだからな。」

説明を聞き終えた隼人は笑いを堪える様にクツクツと喉を鳴らしてはいたが、しっかりと信じてくれたようだ。

「うるせーよ。それよりオメー記憶は完全に戻ったのか？」

「ああ、すっかりとな。記憶喪失だった時のも覚えてるぜ。しかし、俺があんな口調で話していたなんて思い返してみると、ダメだ、気持ち悪い。」

ほんの数分前の自分が脳裏に浮かんだらしく、隼人は肩を竦めてしまう。

「お、おい、新一。如何なんじゃ？ 上手く行ったのか？」

ここにきて、今までずっと静観していた博士が漸く声を発した。事態に着いて行けず、いつ聞こうかとずっと思っていたようだ。それは哀も同じらしい。

「ああ、上手く行ったよ。記憶は戻ったってさ。」

「そりゃ、良かったわい。一時はどうなるかと思ったぞ。新一も随分と興奮しておったし、哀君も不安そうじゃったし。」

「ハハッ。あ、そうだ。改めてお互い自己紹介しとくか。まず、こいつが俺の中学の時の知り合い、三井隼人だ。」

最初に、博士や哀に対して隼人を紹介する。『こいつ』の部分を若干強調して。

「よろしく。今回は随分と世話になっちまった、本当に感謝している。」

隼人は紹介を受けた後に深々と頭を下げた。

「いやいや、記憶が戻ったようだなによりじゃわい。」

博士は、そんな事は気にしなくても良いと微笑んで答える。

「で、白衣を着て…。」

「いや、紹介してもらう必要はねえぜ。」

コナンが続いて博士の紹介をしようとするのを隼人は遮った。

「白衣を着ているのが阿笠博士。確か、発明家…だったよな？ んで…。」

一旦言葉を切り、体の向きを哀に向ける。表情は鋭さを増し、目は全てを見通す様だ。

「こっちの女性が灰原哀。工藤と同じ毒薬を飲み、体が縮んでしまった人物。そして、工藤をあてにここに来たってところか？…案外黒の組織側に居たんじゃねえのか？」

隼人を除く全員が目を見開き、驚愕した。正に、開いた口が塞がらないという状態だ。

コナン達は驚きのあまり声が出てこない。そんな様子を見て隼人は一つ溜息を吐いた。

「…なんだ。当たっちゃったのか？」

「オ、オメー。どうやってそれを…。」

コナンがやっとの事で漸く声を出した。

「当然驚いてるのは哀さんの事だろ？ 少し推理してみたんだ。いや、

確証は一つもねえから妄想か。まず、立ち振る舞いが子供っぽくなかった。また、工藤の正体を知っている。工藤の奴が只の子供に正体を明かすなんてバカは流石にしねえ筈だからな。以上の二つから灰原哀は普通の子供では無い、工藤と同じ理由で体が縮んだ人間じゃないかと思った。ここまでは良いか？」

辺りを見回すと皆真剣に聴いており、隼人の問いには声を発さずに頷いて返事をした。

「んじゃあ続きだ。工藤が飲んだ毒薬で体が縮むのは非常に稀らしい。そんな体験をした二人が偶然出会うなんて事はある得ねえ。となると、どちらかが意図的に接触した事になる。工藤は体が縮んでしまった人間の情報なんて知る訳ねえから、哀さんから接触して来たと思ったんだ。組織側じゃねえかってのは半分冗談だったんだが、その毒薬をどうやって服用したのかと、意図的に接触した訳だから工藤が幼児化したのを知っていた事が引っかけだった。その二つともクリアできるのが組織側って訳だ。他にもFBIなんかも頭に浮かんだが、今まで表沙汰に一度もなっってねえ程の組織が毒薬を飲ませて死亡確認をしねえのが複数ある可能性は低いからな。俺の思いついた経緯は以上だ。」

驚きの表情のまま一同は聞き入っていた。隼人は妄想と言っていたが、その説明にはちゃんと筋が立っている。

（ん？待てよ？となると哀さんは自ら毒薬を飲んだのか？組織の人間に始末する為に飲まされたんなら、それこそ死亡確認を忘れねえ筈だ。自分で飲んだ理由は何だ？自殺か？だが予想に反して死ねず、幼児化しちゃった。その事実を持てあまして、自分と同じ境遇になった工藤をあてに組織を抜け出したって所か…。）

自分で説明している間に新しい事に気付いた隼人は思考を深めていき、ある程度の結論が出た所で未だ一口も手を付けてなかったコーヒーを飲んだ。

「まったく、相変わらぬの推理力だな？オメー。」

コナンはその様子を見ながら、半ば呆れた様な感想を呟く。しかし

内心では昔と変わらず頭が切れる事にホッとしていた。

「ちよっと工藤君。彼、一体何者なのよ？」

哀がそっと耳打ちしてきた。

「何者って、知り合いだぜ？」

「そうじゃなくて、あの推理力は異常よ？」

「ああ、だから負けを認めた事が有るって言ったろ？」

「それは聞いてたけど、まさかこれ程なんて……。想像以上ね。」

「ま、心配するなよ。良い奴なのは間違いないからさ。」

安心させるようにポンと肩を叩く。

「おい、いいか……？」

コーヒーを飲み終えた隼人が何か聞きたいらしくコナンの方へと顔を向ける。

「俺の話は完璧じゃなかったんだろ？ 抜けてる部分を教えてくれても良いんじゃないのか？」

その問いに目を細め、挑発するように笑みを浮かべて答えるコナン。

「紹介は要らねーんじゃないのか？ まあ、仕方ねーか……。」

「待って、私の事だから私から話すわ。」

哀は隼人の推理で抜けていた部分を丁寧に埋めていく。

隼人は所々で質問を交えながら、真剣に聴いていた。

「なるほど、随分と辛い生活をしてたみてえだな……。さて、工藤……。」

今度はコナンに対して鋭い視線を向ける。

「そろそろ聞かせて貰おうか？ 俺の記憶を戻した本当の目的を？」

一瞬目を見張ったコナンであったが、一つ溜息を吐き答えた。

「やっぱ気付いてたか。」

「当然だろ？ お前の事だ。俺が記憶を取り戻したら彼女の素性に感づくのを読んでたんだろ？」

ちらっと目線を哀の方に向けた後、すぐにコナンへと向け直す。

「ああ、実はオメーに灰原を守るのを手伝って貰おうと思ってな。」  
肩を竦めて本心を話すコナン。自分が認めた人間ならば、協力して

貰うのに心強い事この上ないだろう。

「断る。面倒そうだしな。」

しかし隼人はあっさりと断った。

「はあ！？ここまで聞いというて断んのかよ？」

この返事に納得いかないコナンは隼人に詰め寄る。

そして、お互いにしか聞こえない様に声を潜めて会話を始めた。

「バカかお前は。お前は俺の事を知っているから何ともねえだろうが、彼女にしてみたら初対面の得体の知れない男だぞ。そんな奴、信用出来る訳ねえだろうが。彼女とは何も相談してねえんだろ？」

「そりゃそうだが…。アイツ、自分から守ってくれなんて絶対言わねーからさ。」

その後も幾つか口論をしていたが、やがて隼人が大きな溜息を吐き。  
「分かった…。平日をお前、休日俺で良いんだな？ったく、一つ貸しだぜ？」

諦めたように頭を垂れて了承の返事をした。

「ちよっと待って！勝手に決めないでちょうだい！私は守ってなんて言っていないわよ！？」

哀が二人のやり取りに納得出来ないと声を上げる。確かに、当事者が蚊帳の外で話が勝手に進んでは反感を覚えるのも無理は無いだろう。

「まあまあ、哀君。新一も君を思っの事じゃろうから。」  
博士が宥めようとするが。

「余計なお世話よ。私、地下室に行ってるから。」  
そう言っって階段を下りて行ってしまふ。

「…可愛くねー奴。」

「お前に責任が有ると思うんだが？」

「しよーがねーだろ、こうでもしなきゃ…。」

「わかった、わかった。まあ、俺も借りを返さなきゃならねえし。  
…さて、んじゃそろそろ行って来るか。」

ソファから立ちあがり玄関へと向かって行く隼人。



「行くって何処に？」

「俺が記憶を失った場所。なんならお前も来るか？」

「此処だ…。」

コナンと隼人は、火事でも有ったのか真黒に焦げた大きな建物の前に居た。

「俺が記憶を失ってる間に火事でも有ったのか？あの時は、こうなっ  
てなかったからな。」

誰に対して聞いた訳でも無く、建物を見上げて呟く隼人。

一方のコナンは何か気になった事が有るらしく、顎に手をあてて考  
え事をしている。

「なあ、三井。オメー、どんな奴にやられたか分かるか？」

「あ？いや、情けねえが背後からだったから姿は見てねえ。だが、  
声からして男だと思うぜ。」

「声を聞いたのか！？何て言ってた！？」

「確か…『あの女が居なくなったりしなければ…』とか何とかだっ  
たぜ？」

「それと、オメーがやられた時にこの建物は何とも無かったんだな  
！？」

「ああ、今日見て驚いたんだからな。で、何か分かったのか？」

隼人もコナンの考えてる事が気になって来たらしく尋ねてみるが。

「いや、まだはっきりとは判らねえ。とりあえず、博士の家に戻ろ  
うぜ。」

答えは出さず、もと来た道を引き返して行った。

（こいつは、もしかするともしかするぜ。）

二人が博士の家に戻ると、哀と博士がリビングでコーヒーを飲んで

いた。

どうやら上手く博士が哀を説得できたようだ。

「おお、戻って来たか。どうじゃった、何か手掛かりは見つかったのかの？」

博士が二人の姿を認めると、ソファから立ちあがり二人に近づきながら尋ねて来た。

哀は新しく来た二人の分のコーヒーを入れる為キッチンへと向かった。

「いや、現場に加害者の証拠となりそうな物は何も無かった。ただ、ちょっと気になる事が有ってな。」

コナンはそう言いながらソファに腰かける。

「多分、灰原にも関係してくると思うから、ちょっと待ってくれ。」その言葉に了承して博士と隼人も哀が戻ってくるのを待った。暫くしてコーヒーが入ったカップ二つを持って哀が戻って来た。

哀がカップを配り終えたのを確認してから博士が話を促した。

「それで、新一。気になっている事とはなんじゃ？」

「ああ、その前に灰原。オメーが関係してた薬品工場が炎上したのは、オメーが組織を抜け出した後すぐか？」

コナンは質問と言うよりも確認と言える事を哀に尋ねた。

「ええ、そうよ。奴らは私が消えたのに気付いたら、情報漏洩を防ぐのと私の逃げ道を塞ぐ為、直に私が関わった工場を全て炎上させたわ。でもそれがどうしたの？ 奴らのやり方ならあなただって分かってるでしょ？」

「実は、三井が記憶を失った場所がその工場だったんだよ。」

「「「えっ!？」」」

コナンの思いもよらない答えに一同は揃って息をのむ。

「更に、犯行時にはまだ工場は炎上する前だったらしい。その上、犯人だと思われる男が言っていたセリフが『あの女が居なくなったりしなければ』だ。」

「そ、それじゃあ…。」

「そう、灰原が組織から脱走した事によって、業を煮やした構成員が犯人だと思うぜ。」

自信有りという笑みを浮かべてコナンが結論を出した。

「なるほど、これでいよいよ俺もその組織さんと無関係ではねえって事か。」

隼人は動揺する事無く、むしろ不敵な笑みさえ浮かべていた。

「……やっぱり、いけなかったのかしら？」

話の途中から俯いてしまっていた哀の口からポツリと紡がれた言葉は、辺りをしんと静まらせた。皆神妙な面持ちで哀を見つめる。

「組織を抜け出すなんて、しちゃいけなかったのかしら……。私が抜け出したりしなければ、三井君が記憶を失う事も無かったでしょうし……。」

哀の瞳は悲しみに染まり、今にも泣いてしまいそうだった。

「いつもそう、私の所為で誰かが不幸になる……。お姉ちゃんだってそう、私の所為で殺されて……。私なんか……。」

「やめとけ。」

コナンや博士がいい加減何か言おうとした時、哀の言葉を遮ったのは意外にも隼人だった。

俯く哀の右肩に手をポンと置く。

哀は驚いて隼人を見上げている。

「あまり自分を悪く言うもんじゃねえぜ？」

「え？」

「少なくとも俺はお前を恨んだりしてねえ。そりゃ、お前が直接俺を鉄パイプか何かでブン殴ったってんなら多少文句は有るだろうが、そうじゃねえんだったら恨みなんてねえよ。むしろ、今日記憶を戻す場所を提供してくれた事に感謝してるんだ。」

「私は別に何も……。」

「それに、全部を自分の責任にするなんて、お前がとても優しい証拠だからな。だから、細けえ事は気にしねえで同じ舞台に上がった共演者としてよろしくやって行こうぜ？」

諭す様な隼人の言葉の一つ一つが哀の心を暖かくしていった。コナンが隼人を信頼している理由も何となく伝わったようだ。

次第に感情も落ち着き、哀は普段通りの表情に戻った。

「フツツそうね、簡単に記憶を失ってしまう人なんて頼りないけど、これからよろしくね。」

哀は微笑しながらしっかりと皮肉を込めて答えた後、全員のコーヒーを入れ直してくると言ってキッチンへ向かって行った。

「いやあ、すまないのう、隼人君。哀君を元気付けてくれて。」  
博士が満面の笑みで礼を述べる。

哀の事を実の娘の様に思っている博士は、彼女の俯いた姿を見ていないのだろう。

「にしても、オメーが灰原を励ますなんてねえ？」

「おい、随分な物良いじゃねえか？『休日だけでも頼む』って言ったのはお前だぜ？」

「ワリイワリイ、そんなつもりで言ったんじゃないよ。でも、これで俺だけじゃなく博士も安心できるな。」

暫く雑談をしていると哀がキッチンから戻って来た。

全員の下にカップが回り、それぞれ一口飲んでホッと気を安らげたのだが。

「あら？飲まないの？」

一人だけコーヒーに手を付けようとしないう隼人に気づき、哀は尋ねてみた。

「いや、飲むぜ。」

しかし、言葉とは裏腹に一向に飲もうとしない事を不審に思う。

「そういえば、さっきも殆んど飲んで無かったし。もしかして、コーヒーが苦手なのかしら？」

「いや、そんな事は、ない。」

答える隼人はだらだらと冷や汗を流し、目線が泳いでいる。

（ああ、そう言えばコイツ…。）

コナンは、ふとある事を思い出して笑いを堪えているようだった。

「ねえ、貴方まさか、私が入れたコーヒーだから飲めない何て事は無いでしょうね？」

隼人の態度と答えが出ない事に少しイライラして、哀はジト目で睨みながら声のトーンを落として問い詰める。

「そ、そんな事は絶対ねえっ！」

ここに来て初めて慌てふためく隼人。その様子にコナンはどうとう笑いを堪え切れなくなってしまった。

「ハハハハッ。灰原、気にすんなよ。コイツ猫舌なんだ。」

「お、おい工藤！ テメエ、笑ってんじゃねえぞ！」

恥ずかしさで頬を赤くして叫ぶ。そんな状態で凄まれても全く迫力は無いのだが。

「猫舌？」

拍子抜けして一瞬ポカンとした哀だったが、やがてクスクスと笑いを漏らした。

「お、おい哀さんまで笑う事無えだろ、酷えぞ！」

若干気落ちして文句を言うが。

「あら、ごめんなさい。意外と可愛い所もあるのね？」

哀の言葉によって完全に赤面する事になってしまい、せめてもの抵抗としてソップを向いた。

この行動が隼人以外の面々を大笑いさせたのは言うまでもないだろう。

## 本当の自分を失った者どうし（後書き）

初めまして。

ここまで駄文にお付き合い頂きありがとうございます。

コナン達に匹敵する能力を持った人間をオリジナルキャラクターとして放り込んでみましたが如何だったでしょうか？

今のところストックは幾つか有るのですが、なにぶん執筆速度が亀に失礼なほど遅いので気長に待つて頂けたら幸いです。  
それでは、本当にありがとうございます。

## 蘭とのデート？

「あれ？三井じゃねーか。何やってんだこんな所で？」

平日の午後。学校からの帰り道、他の皆とは既に別れた後、もうそろそろ居候している探偵事務所に着くかという所で見知った人物をコナンは発見した。

「なんだ工藤か、今帰りか？」

後ろから声を掛けられた隼人は振り向いて、声を掛けて来た人物が誰かを特定した。

「ああ。で、何やってんだよオメーは？」

コナンは『なんだ』と言われたのが気に障り若干睨むようにして再び尋ねる。

「睨むなよ。只の日課の散歩だ。」

首を竦めて答える隼人だが、顔は笑っている。

「日課って、オメー毎日此処を歩いてんのか？」

「それじゃ散歩にならねえだろ。目的地も無ければ決まったルートもねえ。俗に言う『風の向くまま気の向くまま』ってやつだな。」

「ハハ…。オメーらしいや。」

等と話している内に二人は探偵事務所に到着する。

「仕方ねーから、寄ってくか？茶ぐらい出すぜ？」

「そうだな…。それも悪くねえな。」

そう言って二人揃って、二階の事務所を目指して階段を上っていく。コナンは子供を演じないで話せるのが、有りがたかった。

もっとも、本人が気付いて無いだけで新一のころから何も演じずに話せる相手は少なかったのだが。

工藤新一は大人顔負けの推理を展開する頭脳を持ち合わせているが、それが仇になる事もある。例えば交友関係だ。新一本人に自覚は無いが、どうしても会話は相手側に合わせてしまう。これに新一は苦痛を感じておらず、相手側も違和感を感じていないので一見問題は

無いように見える。しかし、お互いを理解しあった『親友』には絶対になれない。せいぜい『話が合う友人』止まりであろう。

新一が全力で全てをぶつけ合える友人は今のところ二人。

一人は同じく高校生探偵の服部平次。お互いに協力を惜しまず、信頼しあっている正に『親友』と呼べる存在だ。

そしてもう一人が三井隼人。口では文句を言いながらも、互いに信頼している『悪友』と言った方がこちらは良いかもしれない。

「ただいまー。あれ？おじさんは？」

コナンが事務所のドアを開けて中へと入っていく。

事務所内には蘭しか居なかった。

「おかえりコナン君。お父さんなら仕事で出掛けてるわ。あれ、後ろの人は…。」

笑顔で出迎えた蘭はコナンの後ろに居る人物を見て驚く。

「三井君じゃない！？久しぶり、今まで見かけなかったけど何処か行ってたの？」

「久しぶりだな蘭さん。少しアメリカに留学してたんでな。」

挨拶をする蘭と隼人。その光景をコナンは呆氣にとられたように見ている。

そして隼人の服を引っ張りしゃがませ、こそこそと話し始めた。

「オメー、蘭と初対面じゃ無かったのか？」

「いや、中三の時に会ってるぜ。」

「俺は聞いてねーぞ？」

「お前に教える必要はねえだろ。」

そんな二人を見ていた蘭は、ふと一つの疑問が浮かんだので聞いてみる事にした。

「ねえ、そう言えば三井君とコナン君って知り合いだったの？」

蘭の言葉で動きを止める二人。コナンに至っては一瞬『しまった』という顔をしてしまう。

「え、えーとね…。その……。」



言い訳が思い浮かばず言い淀むコナンを見かねて、仕方無く隼人は適当に誤魔化すことにした。

「ああ、実は久しぶりに日本に帰って来たから、工藤にでも挨拶しとくかと思って家に行ってみたんだが留守だったみてえで。出直そうかとした所で隣の家からこのボウズが出てきてな。それで仲良くなったんだ。」

「へえ、そうだったんだ。あれ？でも三井君学校は？」

「行ってねえぜ。高校はもうアメリカで卒業してんから。」

「「ええ！？」」

コナンと蘭は揃えて目を見開き隼人を注視した。

「中学を卒業した後にアメリカに渡ってな。一年間は向こうの高校に通ってたんだが、担任から卒業試験を受けてみねえかって言われたから興味本位で受けてみたんだ。したら、合格。晴れて卒業って訳だ。」

事もなげに説明する隼人。本人にとっては、こちらは誤魔化す必要も無いどうでもいい事の様だ。

「す、すごいね。それじゃあ、今は何やってるの？」

「まだ日本に帰って来たばかりだからな。落ち着くまではのんびりする事にしてる。」

蘭と隼人が楽しそうに会話しているのを面白くなくコナンは見ている。

コナンにしてみれば、自分の知らない所で二人が知り合っていただけでも面白くないのだから当然と言えば当然だ。

「あっそうだ！三井君、今度の日曜日空いてる？ちょっと付き合っで欲しいんだけど…。」

「ん？ああ、空いてるぜ？」

隼人は答えた後、コナンをチラッと見てみた。物凄い形相でこちらを睨んでいる。

それに溜息を吐くも、気にしない事にし、時間等を蘭と決めていく。

「それじゃあ、今日はこれで帰る。日曜日にな。」

話が決まった事で隼人は帰る事にした。これ以上蘭と話をしていると後でコナンに何を言われるか分かった物ではないからだ。

「え、もう帰っちゃうの？ 今お茶を出すのに。」

「いや、少し立ち寄っただけだからな。」

「そう。ごめんね、久しぶりに会ったのにいきなりお願いしちゃって。」

「気にすんな。決めたのは俺なんだ。じゃあな。」

そう言って隼人はドアを開けて階段を下りて行った。

その後ろを遊びに行つて来ると言つてコナンが追いかけた。

「おい、三井。オメー一体どういうつもりだ？」

やがて追いついたコナンが声のトーンを幾分か落として尋ねる。

「お前な、露骨に睨んでんじゃねえ。妬いてんのか？」

隼人の返答にコナンは少し頬が赤くなる。

「バ、バーロー！ そんなんじゃねえ。只、休日博士と灰原を守つて貰わなきゃならねーって言つてんだよ。」

「じゃあ、その日は任せる。」

「任せるって、勝手なこと言つてんじゃねーよ。」

「安心しろ。他人の女に手を出すほど腐っちゃいねえからよ。」

「だ、だから、そんなんじゃねーって言つてんだろ！ って待てよ三井！」

コナンは赤くなりながらも否定するが、隼人は聞かずにさっさと歩いて行ってしまった。

日曜日。

隼人は蘭との約束を守る為、待ち合わせ場所に向かっていた。

（さてと、わざわざ俺を誘つたって事は…。やっぱそういう事だろうな。）

待ち合わせ場所が見えて来たのだが、そこには既に蘭が居た。

「よう。時間には間に合ったと思うが、待たせたか？」

隼人が声を掛けた事で蘭が振り向く。

「あ、三井君。気にしないで、そんなに変わらないから。」

笑顔で手を振って答える蘭。実際は早く着き過ぎて、十五分程待っていたのだが。

「で？まだ用件を聞いて無かったよな？俺を誘った。」

此処に来る途中で考えていた事を隼人は聞いてみた。ある程度の予測は立っている。

「うん、実はね。コナン君にプレゼントをあげようと思ってね。私、男の子の欲しがる物ってあんまり分からないから、三井君なら分かるかなって。」

「やっぱり思った通りだったか…。」

「え？気付いてたの？」

「なんとなく。だが俺も、あのボウズの好きな物なんて分からねえぞ？」

（まあ、蘭さんからのプレゼントだったら何だって良いだろう…。）

「そうなんだ？それじゃ、色々と見てまわろっか？」

それから二人は商店街やデパートの中を散策した。だが、いまいちピンと来るものが見つからないまま時間だけが過ぎていく。

「見つからないね：コナン君が喜びそうなの。」

疲れも見え始めたのか蘭の元氣も無くなってきていた。

「悪いな。力になれなくて。」

「あ、ごめんね。そんなつもりで言ったんじゃない。」

隼人が肩を落としたのに対して謝罪した蘭の目に、一着の服が飛び込んできた。

「あ、ねえ、見て見て。この服すっごく可愛いよ。きっとコナン君が着たら似合うと思うな。」

先ほどまでがウソのように明るくなったのだが、蘭が選んだのは男

が進んで買う様な服では決してなかった。

「おいおい、男に『可愛い』ってのは褒め言葉じゃないんだぜ？」  
苦笑しながら答えた隼人だったが、ふと閃く。

「おい、見つかったぜ？アイツの喜びそうな物が。」

自信有りげな笑みを浮かべて、蘭に呼びかけた。

「本当？」

蘭は隼人の表情を見て目を輝かせた。余程の自信が有るのだろう。

隼人と蘭がやって来たのは、スポーツショップだった。

店内にはありとあらゆるスポーツ用品が陳列されていた。

「三井君？サッカーボールならコナン君もう持ってるよ？」

蘭が首を傾げて尋ねる。

「いや、ボールじゃねえ。買うのはこれだ。」

そう答えた隼人の目線の先に有ったのはユニフォームだった。

「これならアイツも喜ぶだろう。」

「え、でも、ユニフォームとか欲しがると、もっと大人になつてからなんじゃ？」

「物を欲しがるとに大人も子供も関係ねえ。欲しいと思ったものが欲しい。そうだろ？」

「：そうだね。私、ずっと子供向けの物ばかり探してた。三井君が居なかったらユニフォームなんて思い浮かばなかったよ。本当にありがとう。」

蘭は満面の笑みを浮かべて礼を言った後、早速レジへと商品を持っていく。当然、コナンが好きな東京スピリッツのユニフォームだ。レジで会計を済ませ、プレゼント用に綺麗な包装紙でラッピングもして貰う。

それを大事に両腕で抱えて、二人揃って店を出た。

「さて、歩きまわって疲れたら？ジュース一本位なら奢ってやるから、そこで待ってな。」

返事を待たずに隼人は歩き出した。

「そんな、いいよ。ちゃんと自分で買うから…。」

「気まぐれな俺からの施しだ。そうそう有るもんじゃねえから、受け取っとけ。」

有無を言わずに隼人は歩いて行ってしまう。

蘭は仕方なくその場で待つことにした。

隼人が歩いて行ってから二分ほど経った頃。なにやら前方が騒がしい。

「引ったくりよー！ー！！誰か捕まえてー！ー！！」

女性の悲鳴が響き渡る。蘭は声のした方に掛け出した。

「呆気ねえな。こいつは頂くぜ？」

蘭の前方に如何見ても女性物のカバンを持った男が見えて来た。

「人から物を盗むなんて最低よ！今すぐ返しなさい！」

言うが早いか蘭は男に向かって後ろ回し蹴りを繰り出していた。

「ん？ちょ、おい！ぐあっ！！！」

振り向いた男が何か言おうとした所に蘭の蹴りが頭部に炸裂した。

男は吹っ飛ばされて、地面を転がっていく。

「さあ、早く返しなさい！」

蘭は仁王立ちで男に詰め寄った。

「…おい。俺何か気に障る事したか…？」

「何かって…。」

倒れていた男がゆっくりと起き上がる。

その姿を見た蘭は驚きに目を見開いてしまう。

「み、三井君！？え、どうして！？」

驚きのあまり蘭は混乱状態に陥ってしまう。それを氣遣って隼人は地面に座りながら一つ一つゆっくり説明することにした。

「ひったくり犯は、あっち。」

隼人の指差す方向に二人掛かりで押さえつけられている男が居た。

「で、これは俺が犯人から取り返したものだ。」

言いながら右手で女性物のカバンを持ち上げる。

「以上、解ったか？」

頭を押さえながら隼人は立ち上がるが、まだクラクラしているようで二、三步たたらを踏んでいる。

「ご、御免なさい!!」

蘭が深々と頭を下げて謝ると、隼人は笑って許した。

そこへカバンの持ち主が現れ、何度もお礼を言いながらカバンを受け取って去って行った。

（にしても、また引ったくりか？この町も中々ヤベエよな。）

犯罪件数の多さに隼人はそんな感想を持ってしまう。

「しかし困ったな…。」

一件落着としたところでポツリと隼人が呟く。

「大丈夫？歩ける？」

それに対して蘭は心配げな表情を浮かべて尋ねた。自分の蹴りの所為で怪我でもさせてしまったのではと思って。

「いや、買って来たのが炭酸物だったからな。こりゃ暫く飲めねえぜ？」

しかし蘭の心配は見当違いだった。隼人は二本の缶ジュースを蘭に見せ、肩を竦める。

「じゃあねえ、別のを買ってくるか。」

そして再び飲み物を買う為に歩き出した。奢ると言った以上、ちゃんとした物を渡したい。

「あ、待って、今度は私も一緒に行くよ。」

蘭はそう言って隼人の隣に駆け寄った。

その後は自販機で買った飲み物を、近くに有った公園のベンチに座ってゆっくり飲み、それから解散となった。

この時、飲み物のお金をお互いに出すと譲らずに一悶着あった。

隼人は奢ると言った約束を守る為に。

蘭は蹴ってしまったお詫びと、今日付き合ってくれたお礼に。

暫く平行線が続くかと思われたが、蘭が電信柱を殴った事であっさりとは話は決まったのであった。

「ったく、あのヤロー。蘭に何かしたら只じゃおかねえ…。」

阿笠邸のリビングでコナンは小説を読んでいるのだが、殆んど読み進んではない。

ずっと、隼人と蘭が一緒に出かけたのが気になってしまっているのである。

ぶつぶつと文句を言い続けているコナンに哀は大きな溜息を吐いた。

「そんなに気になるんだったら、ついて行けば良かったじゃない？」

「バーロー、別に気にしてねーよ。」

不機嫌極まりない状態で答えるコナンに、哀は再び溜息を吐いた。

今阿笠邸にはコナンと哀しか居ない。博士は『痩せる為に散歩でもしてきなさい。』と、哀に追い出されてしまったのだ。

延々と文句を言い続ける人と二人きりの状態というのは、流石に気が滅入ってしまう。

（自分で追い出しといて何だけど、博士早く戻って来ないかしら。）

哀が博士に助けを求め始めた頃、玄関のチャイムが鳴った。

読んでいた雑誌を置いて、哀は玄関へと向かう。一瞬博士かとも思ったが、それならチャイムを鳴らしたりはしないだろう。

チェーンロックを付けたまま、そつとドアを開けるとそこには隼人が立っていた。

「よう。」

隼人は哀の姿を確認すると、笑って短く挨拶して来た。

見知った顔だった為、哀はチェーンロックを外して中へと招き入れる。

そして、二人揃ってリビングに入ると不機嫌なコナンが出迎えた。

「オメー蘭に手え出したりしてねーだろうな？」

開口一番に隼人を追及する。

「なんだ、お前まさかずっと気にしてたのか？言ったら、他人の女に手を出すほど腐っちゃいねえって。それに俺は被害者だ。」

「はあ？どういう意味だよ？」

「実はな……。」

隼人は今日起こった事を説明した。蘭が買ったのがコナンへのプレゼントだというのは、上手く隠して。

「ハハハハッ。犯人に間違えられて蹴られるなんて、オメー、バカだな。」

コナンは説明を受けて大笑いしてしまう。哀もクスクスと笑いを堪えられないようだ。

（この野郎！『あっちの服』にしといてやりや良かった。）

笑われてる事に顔を顰めて、隼人は舌打ちした。隼人の考えてる『あっちの服』とは、蘭が選んだ『男が進んで買わない服』の事だ。

「それじゃあ、三井が来た事だし俺は帰るよ。じゃあな。」

今までと打って変わって、ご機嫌になったコナンがリビングを出ようとした時、隼人が声を掛ける。

「ああ、そうだ。工藤、一つ貸しだからな？」

「貸し？借りじゃねえのか？」

首を傾げて問い返したが隼人は何も答えなかった。コナンも深くは考えず、そのまま探偵事務所に戻って行った。

その後コナンは、事務所内に入るなり満面の笑みを浮かべた蘭からプレゼントのユニフォームを受け取り、それを選んだ経緯を聞いて、やっと先ほどの隼人の言葉の意味を理解したのだった。



## 蘭とのデート？（後書き）

はい、二話目でした。

ここまで読んで頂きありがとうございます。

今回は蘭が登場しました。

難しいですね。蘭の話の方。

新一や園子に対するみたいに碎けてなく、かと言って敬語を使うほど余所余所しくないという微妙な線に苦戦しました。

引ったくりについては、作中の隼人と同じように皆様も『またかよ』と思ったと思いますが、許して下さい。ハァー、レパートリーが乏しい…。

それでは、お付き合いありがとうございました。

## 少女誘拐事件（前書き）

流血表現がありますのでご注意ください。

## 少女誘拐事件

隼人が記憶を取り戻してから暫く経った頃。

此処、阿笠邸に隼人がやってくるのも随分と慣れてきていた。

隼人は博士の助手として通っている事に世間上はなっているが、実際は博士の発明品を見て楽しんでいる状態だ。

博士も自分の作品を見て楽しんでくれる隼人がやってくるお陰で、研究により一層力が入っているようだった。

「毎回毎回、良く飽きないわね。博士の作品は下らない物が多いっていうのに。」

「ああ、確かに実用性はねえが、子供を楽しませる物だとは思っぜ。」

「それを見て喜んでいる誰かさんも子供ってことね。」

「相変わらず言ってくれるねえ。子供らしさが欲しいなら分けてやるぜ?」

「遠慮しておくわ。どうせ似合わないでしょうから。」

「ああ、俺もそう思う。」

「…何か言った?」

「…いや、何も…。」

何気ない会話もこうして普通に出来る様になるほどに、哀も隼人と打ち解けていた。

哀は隼人の事を、初対面の時は記憶喪失状態だったので頼りない人だと思っていたが、記憶を取り戻した本来の姿が自分の想像以上に頭が切れる男だった事に驚いた。

それが少し恐ろしくて当初は警戒していたのだが、初対面でいきなり慰めてきたりと、隼人の内面に触れる事で徐々に警戒も解けていった。

そして隼人を観察していて気付いた事だが、確かに気まぐれで、天邪鬼で、自分勝手だが、困っている人は放っておけないお人好しだ

った。

加えて、普段はとても子供っぽい。いつも博士の作品を見ては本当に楽しそうに目を輝かせている。

「ホント、良く分からない人ね。」

誰にも聞かれない様に哀はポツリと呟いた。

平日の午後、学校を終えて元気よく帰宅する小学生。

「じゃあ、今日は前から約束してた通り、公園で遊ぼうぜ！」

元太は早く遊びたくて歩くのも早足になっている。

「ええ、一度家に荷物を置いてから公園に集合しましょう。」

「何して遊ぼうか？かくれんぼもサッカーも出来るし、探検に出るのも良いよね？」

光彦、歩美も楽しみでしようがないという様子だ。

「ほら、あんまりはしゃいでいると、遊ぶ前に疲れちゃうわよ。」

浮足立っている三人に優しく忠告する哀。

今回は断る理由が無い為コナンと哀も参加する事になっている。

「じゃあ、俺はちよつと用事が有るから此处で別れるな。先に遊んでくれよ。直に行くからよ。」

コナンは交差点で普段の帰り道とは違う方向に向かう。

「うん、じゃあ後でねコナン君。」

「ああ。」

歩美の言葉に快く返事をしてコナンは走って行った。

「それにしても、コナン君の用事って何なんでしょう？」

コナンが去った後の会話の内容はコナンの用事についてだった。

「何か美味しい物でも食ってくるんじゃないのか？」

「それは無いと思います。元太君じゃないんですから。」

「元太君は食べ物のことばかりなんだから。でも、歩美も気にな

るなあ。」

「もしかしたらよう、抜け駆けじゃねえのか？」

「あり得ますね。抜け駆けはコナン君の得意技ですから。」

元太、光彦、歩美の三人は自分達の推理で盛り上がっている。

「気にする事無いわ。どうせ、血生臭い推理小説でも買いに行ったんでしょから。」

哀が意見を述べた事によってコナンへの疑いは晴れたが、やっぱり後で直接聞いてみよう結論づいてこの話題は終わった。

その後も別の話題で盛り上がり、四人は楽しく歩いていた。

その後ろを怪しげな人影が見ているとも知らずに。

歩美達と別れて哀は自宅へと一人で歩いていた。

（そういえば、あの子たちと別れた後、一人でこの道を歩くのは少ないわね。いつも隣には工藤君が居たし。）

ばんやりと考え事をしながら歩いていたが。

「!？」

突如背後から鋭い気配を感じて、急いで振り返る。

しかし、そこには誰もおらず、辺りを見回しても人影は全く無かった。

「気のせいだったのかしら…。」

フツと気を緩めた瞬間、背後から抱きかかえられ薬品を染み込ませた布で鼻と口を塞がれてしまう。

薬品の影響で意識が段々と沈んでいき、視界が歪んでくる。

数分後、其処に灰原哀の姿は無かった。

ここは毛利探偵事務所。

コナンは探偵団の面々と別れた後、本屋に向かった。

待ちに待ったシリーズの最新号を買う為である。

完全に哀の予想通りだったようだ。

意気揚々と欲しい物を手に入れて、小五郎の部屋で早速読み始めていた。

「いけね、もう三十分も経ってるじゃねーか。前書きだけ読んどこうと思ってたんだが、つい本編まで読んじまってたぜ。早く行かねーとアイツ等うるせーからな、急がねーと。」

ふと時計を見て思っていたよりも時間が進んでいる事に驚き、慌てて支度を始めた。と言っても、本を仕舞うだけなのだが。

さっさと支度を終えて事務所の階段を降りると、そこへ元太と光彦がこっちに走ってくるのが見えた。

コナンは初め自分が遅くなった事で文句を言われる物と思っていたが、到着した二人の様子がおかしいので理由を聞いてみた。

「え？歩美と灰原がまだ来ない？」

光彦達の説明によると、集合場所の公園でいくら待っても二人が来ないらしい。

もしかしたらコナンを迎えに行ってるのかもしれないと考え、此処に来たという。

「それで、探偵バツチに連絡はしてみたのか？」

「はい、ですが二人とも全く繋がらなくて…。」

「…二人とも通じないってのは妙だな？」

「もしかして何か有ったんじゃないかねえのかよ!？」

「落ちつけよ。とりあえず、オメー等はもう一度公園に行って待っててみてくれ。本当に遅くなっただけかも知れねえからな。俺は博士に電話で聞いてみる。」

元太と光彦は短く了承すると、公園に向かって走って行った。

二人に落ち着くように言ったコナンであったが、内心は焦りに満ちていた。

(まさか組織の奴らに正体がバレちゃった何て事は……。)  
頭を振り思考を中断させ、携帯で博士の家に連絡をいれる。

長く感じる数回のコール後、博士が受話器を取り電話が繋がった。

「博士、灰原はそこにいるのか!？」

コナンは名乗る事もせず、ただ要件だけを伝える。

博士は声で誰からの電話か分かったようだが、突然の事に驚いていた。

『どうしたんじゃ新一。そんなに慌てて。』

「いいから、灰原はいるのか!？」

『い、いや、哀君ならまだ帰ってきておらんよ。君達と一緒に居るんじゃないのか?』

「いや、灰原とは随分前に別れたんだ。それに、今日は歩美達と集まる約束もしていたから寄り道する事もねー筈だ。」

『そ、それじゃあ一体……。』

電話から聞こえる博士の声が、不安で幾分か震えている。

「とりあえず、何か分かかったらまた連絡するよ。」

そう言って一旦電話を切ったコナンは、現状で解っている事から推理を始めた。

（灰原の方は何か有ったと見て間違いない。だが、歩美の方は何なんだ?まさか二人一緒に…。いや、元太達の話だと二人は道で別れて別々の方向に進んだから同一犯の可能性は低い。くそっ、どうなってるんだ!?)

コナンが思案に暮れている時、ズボンのポケットに入れておいた探偵バッヂが受信の音を発する。

「俺だ、誰からだ?」

『……………。』

バッヂを手にとって呼びかけてみるが応答が無い。

「おい、どうした!？」

『…………上手く…………ぞ。』

「!？」

再度呼びかけてみた後、バッヂから探偵団の誰でも無い声がかすかに聞こえて来た。

コナンはポリウムを最大にして耳を澄まして続きを聞くのに集中する。

『…どうだ、坂田。良い獲物は手に入ったのか？こっちは上物だ。誘拐し甲斐があった。』

バッチからは一人の男の声が聞こえて来た。どうやら携帯か何かで誰かと連絡を取っているようだ。

（誘拐？やっぱり事件に巻き込まれたのか。コイツは恐らく犯人の声だな？コードネームを使ってねえって事は組織の奴らじゃねえが、犯人は複数居るみてえだな。）

バッチから聞こえてくる情報を基に推理を組み立てていく。

『なんだ、お前の攫ったガキと俺の攫ったガキは途中まで一緒に帰ってたのか。』

（何！？一緒に帰っていたと言ったら探偵団のメンバーしかいねえ。って事は灰原と歩美は別々の場所で同じ犯人グループに攫われちゃったのか！しかも、話からして監禁しているのも別々の場所みてーだ。）

『お前の場所は杯戸町一丁目だったな？…ああ…ああ、それなら終わり次第俺の所に来い。米花町三丁目だ。茶髪の気の強そうなガキが待ってるぜ？』

一通りの手がかりを手に入れたコナンは、こちらからの音を相手に伝えない様にする為、バッチのスイッチを切った。

漸く哀と歩美が待ち合わせ場所に来ない理由は分かったのだが、事態は一刻を争うようだ。

（どうする？監禁場所はバッチの発信機を頼りにすれば直に分かるが、犯人達が頻繁に連絡を取り合っているとしたら、二人を同時に助け出さないと危険だ。だが、頼れる人が…。服部は居ねえし…。ん？そうだ、アイツが居た！）

頭に、ある人物が思い浮かんで表情がパッと晴れる。

携帯で直にその人物に電話を掛け、協力を要請する事にした。

『ああ、こちらファルコンサービス。』



携帯から、掛けた相手の気だるそうな声が聞こえてくる。それにコナンは脱力しそうになった。

「おい三井、ふざけてる場合じゃねえ！灰原達が誘拐された！」

そう、コナンが連絡を取ったのは隼人だった。

コナンは通話しながら探偵事務所の中へと向かう。

『：何だと？』

誘拐という単語を聞き、隼人の声のトーンが下がった。

事件の一部始終を伝えながらコナンは事務所内で米花町の周辺地図を探す。

説明を聞き終えた隼人は溜息を一つ吐いた。

『で？場所は特定出来てんのか？ちなみに俺は米花町の四丁目に居るぜ。』

「ちよっと待ってろ。今地図で…。」

コナンは机に広げた地図と犯人が漏らした情報、そして眼鏡に映る発信機の反応を照らし合わせて場所を特定する。

そしてニヤリと笑みをこぼした。

「良いぞ、一つは米花町三丁目の廃ビルだ。オメーの方が近えから、そっちに行ってくれ。そこに灰原が居る筈だ。俺はもう片方の歩美が居る方に向かうからよ。」

『わかった、わかった。一つ貸しだからな？』

その言葉を最後に電話は切れた。

「つたく、あんにやろう。」

通話を終えた携帯を閉じながら悪態をつくが、自分から頼ってしまった以上文句も言えない。

「ねえ、コナン君。誰と電話してたの？」

突然話しかけられてコナンはビクツと驚いた。

声のした方を向くと今までの一部始終を見ていただろう蘭が首を傾げている。

実は事務所内にはコナンの他に、蘭と小五郎が居たのだ。

すっかり電話に集中してしまった為、今まで気付かなかった。

小五郎はオフィスデスクに頬杖をつき、いかにもやる気が無いといった状態でコナンを見ている。

小五郎は大丈夫だろう。問題は蘭だ。

「え、えーとね。今度博士と宝探しをすることになってね。どこに隠そうかって相談してたんだ。今から僕もちよつとそこに行つて来るね。」

コナンは精一杯の子供のふりをして誤魔化す。その甲斐あつてか蘭は全く疑う事無く見送ってくれた。

事務所を出て一度三階まで上がり、博士に作って貰ったターボエンジン付きのスケボーを持ってから一階まで掛け下りる。

「さて、急がねえと。待ってろよ、歩美。」

スケボーに乗りスイッチを入れて颯爽と監禁場所に向かったのだった。

哀が意識を取り戻すと其処は何処かの廃ビルの中だった。

自分の状態を確認しようとしたが、手は柱に縛り付けられ口も声が出せない様に布で塞がれていた。幸い足は縛られてなかったので、その場に立ちあがったりする事は出来た。

そのおかげで何とか探偵バツヂのスイッチを入れる事も出来たのだ。その後、犯人と思われる男が仲間と携帯で連絡を取っているのを聞き、歩美も誘拐された事を知った。

（吉田さんも攫われてしまったのね。きっと、すごく怖いでしょうね。でも大丈夫よ。工藤君の眼鏡を使えば場所は直に分かる筈だから、もうすぐ助けが来るわ。）

哀は自分よりも歩美の心配をずっとしていた。自分とは違い本当の子供なのだから。

「さて、お嬢ちゃん。そろそろ怖くなってきたかな？」

ニヤニヤと質の悪い笑みを浮かべて犯人が問いかけて来た。

哀はその顔を睨みつけて反抗する。犯人の笑みを見ていると気持ちが悪くなってくる。

「ククッ気が強い嬢ちゃんだ。尚更楽しめそうだ。」

犯人は一層笑みを強くすると何処かへと歩いて行った。

哀は自分の失態を後悔した。仮にも組織に身を置いていたのだ。護身術もそれなりに教え込まれたし、拳銃だって扱える。そんな自分がいくら子供の姿とは言え、こうやって攫われてしまっているのだから。

（危機感が薄らいでいるのかしらね…。）

そう結論付けて自嘲的に笑った。

「さあ、お嬢ちゃん。お楽しみの時間だよ。」

やがて犯人が戻って来た。その右手にはナイフが握られている。

流石の哀もナイフを見た瞬間は顔が引きつった。

しかし、直に普段通りの表情を演じて犯人を睨みつける。

「小さな女の子の服をナイフで切りつけて、怯えた顔を見ながら少しずつ服を剥いでいく…。ククッ最高だ…。」

気味の悪い笑みを浮かべてゆっくりと哀に近づいて行く犯人。その目は狂気に満ちている。

（こ、この人。初めからお金が目的じゃ無かったのね。）

体中から冷や汗が流れていくのを哀は感じた。犯人が金では無く、誘拐した少女に危害を加える事を目的としているならば、無事じゃ済まないだろう。

更に犯人が哀に近づいた時。

「そこまでにしときな。」

その場に犯人以外の声が響き渡った。

哀と犯人は同時に声がした方を振り返ると、そこにはいつも通りの不敵な笑みを浮かべ、だが目はかつて無いほど鋭い三井隼人が居た。その姿を捉えた哀は目を見開いた。

（どうして彼が此処に！？）

思わぬタイミングで現われた第三者に犯人も動揺を隠せない。

「な、なんだお前は!？」

自分の動揺を悟られまいと大声を出して威嚇するが。

「うるせえな。大声出すんじゃない。」

隼人はさらりと流してしまふ。

「な、何しに来たんだ!？」

尚も大声を出して犯人は威嚇を続ける。

「下らねえ事聞くんじゃねえ。その女性を助け出しに来たに決ま  
ってんだろ。そして、テメエは俺が直々に叩き潰してやる。」

隼人はそう答えると同時に一層視線を鋭くして犯人を威圧する。

やがて犯人は暑くも無いのに体中から汗を流し、肩で息をしていた。  
その様子を見た隼人は一歩、犯人へと近づいた。対して犯人は無意  
識に一歩後ずさる。

それに構わず二歩三步と歩を進める隼人。同じように後ずさる犯人。  
隼人と犯人の立ち位置が哀を挟んでいる為、犯人はどんどんと哀か  
ら遠ざかって行った。

「う、うわああああ!!」

最初の位置からちょうど十歩になるかどうかという所で、威圧に耐  
えきれなくなった犯人がナイフを振り上げながら隼人に突っ込んで  
きた。

隼人は驚く事も無く、ナイフを振り下ろされるより早くその腕を掴  
み、ナイフを叩き落とした。地面に落ちたナイフを蹴飛ばし犯人に  
拾えない様にする。

その後は鳩尾に一撃を入れて犯人を気絶させた。

「やれやれ、少女にしか強気でいられないなんてな。情けねえ。」  
犯人をその場に捨て置き、哀の手を縛っている縄と口を塞いでいる  
布を解く。

「もう大丈夫だぜ。怪我は無いか？」

「貴方、どうして？」

哀はいまだに信じられないといった表情だ。

「どうしてって、お前を助ける約束をしちまっただろ？」

半ば呆れたように隼人は答えた。

「そうね。でも、貴方に助けられるなんてね。」

哀はそんな隼人を見てフツと微笑する。散々文句を言ってたのに、こうして助けに来てくれたのが嬉しい。

「俺じゃ不服だったか？」

「そんな事はないわ。じゃあ、工藤君は吉田さんを助けに行ったのね？」

「ああ、アイツの事だからもう終わってると思うぜ。」

「そうね。きつと……！危ない！」

哀の声に反応して隼人は後ろを振り向こうとした瞬間に後頭部を鉄パイプで殴られてしまった。

隼人はその場にうつ伏せの状態で倒れる。なんと犯人は三人いたのだ。

倒れた隼人に容赦なく何度も鉄パイプで体中を叩きつける犯人の仲間。

「出しゃばりやがって、俺達の楽しみを奪うからだ！」

何度も何度も叩きつけられた隼人はピクリとも動かなくなった。

「ここでぶっ殺してやる！」

とどめと言わんばかりに男は鉄パイプを振り上げる。

「やめて……！」

そこへ哀が決死の叫びで隼人と男の間に割って入った。

「へへ、自分から殴られに来るなんて、手間が省けたぜ。」

男は喜んで一気に鉄パイプを振り下ろす。哀は目をつぶって来る衝撃に備えた。

ガッ

鉄パイプがぶつかった音が哀の耳に聞こえたが、いくら待っても痛みも衝撃もやって来ない。

不思議に思いゆっくり目をあけると、そこには後ろから哀を抱き込むようにしている隼人がいた。鉄パイプは哀の頭上で隼人の右腕に

よって受け止められている。

「傷つけさせる訳にはいかないんでな…。」

ゆっくりと立ち上がり、哀を自分の背後に庇う。

頭からは血が流れ落ち顔を赤く染め、右腕は先ほど鉄パイプを受け止めた際に痛めてしまったようだ。

もはや立っているだけでも精一杯のようでフラフラと足元が覚束ない。

「こ、この野郎！」

男が再び鉄パイプを振り上げ、隼人めがけて振り下ろす。

だがしかし、それよりも速く隼人の渾身の左ストレートが男の顔面を捉えた。

男は後方に吹っ飛び、地面を転がり仰向けの態勢で止まる。

殴った側の隼人も反動で体中が悲鳴を上げ、顔を苦痛に歪めている。

「三井君！無茶よ！貴方自分の状態が分かってるの！？」

「大丈夫だ…。俺を信じろ…。」

哀が必死に止めようとするが、『大丈夫』のいってん張りで全く考えを改めようとはしない。

「如何してそこまでするの！？工藤君に頼まれたから！？」

「お前は頭は良いが、イマイチ解って無えみてえだな…？この俺が誰かに頼まれただけで動くと思ってるのか…？俺が決めたんだ。

俺がお前を助けたいとな…。」

「え……？」

やがて男が殴られた個所を抑えながら起き上がるが、この時男は自分の近くにキラリと光る物を見つけた。それを拾い立ちあがると、すぐさま隼人に突っ込んでいく。

「この死に損ないがああ！！」

男が拾ったものは、隼人が最初に倒した犯人の持っていたナイフだ。ナイフを前に突き出した状態で隼人めがけて一直線に突っ込んでくる。

ドスッ

フラフラの隼人は男の突進をかわす事が出来ず、左の脇腹にナイフが深々と刺さってしまう。

「三井君!!」

哀が悲鳴のように叫んだ。もはや見るに堪えられない。

しかし隼人は痛みに呻くでもなく脇腹にナイフが刺さったまま、右膝を男の腹部に打ち込む。

そして腹を押さえて蹲る男の顎に左のアップercutが綺麗に決まった。

男は顎への強烈な一撃を受けて一度体が宙に浮いてから仰向けに地面に落ちる。意識は完全に失っていた。

それを確認した隼人は自分に刺さっているナイフを引き抜き、放り捨てた。傷口からは血液が噴き出すように流れ落ちている。

「へ、へへ：ちよつと、油断：しちまったな：。」

隼人は苦笑しながら哀に向き直る。哀には外傷一つ無い事にホッと胸を撫で下ろした。

「笑ってる場合じゃないでしょ、大怪我なのよ!？」

哀は隼人の下に駆けつけて、刺された傷口を塞ぐ為にハンカチを押しあてるが、あつという間にハンカチも哀の手も真っ赤に染まる。

「とりあえず、連絡を：入れねえとな。」

左手で携帯を取り出した隼人は、コナンへと電話を掛ける。

やがて数回のコールの後にコナンの声が聞こえて来た。

「こちら、ファルコン：サービス。」

あくまでも余裕を演じるのを隼人は貫く。

『何だ、三井か。こっちはとっくに終わったぜ。そっちはどうなんだ?』

「少し：手こずっちまったが、終わったぜ。警察には：連絡して：あんのか?」

『ああ、助けに行く途中で、博士に警察を呼ぶように伝えてある。それよりオメー大丈夫か?喋るのが辛そうに聞こえんが?』

「心配するな：。ほんの：掠り：傷：：だ：：か：：：：：：：：：：：。」

そこまで言って、とうとう限界を迎えた隼人は気を失いその場に崩れ落ちた。

『おい、どうした三井！？おい！？』

携帯からコナンの声が呼び掛けるが隼人は目を覚まさない。

「工藤君！急いで救急車を呼んで！彼、今まで喋れていたのが不思議なくらいの大怪我なのよ！」

哀は隼人が倒れると、直に隼人の持っている携帯を取りコナンへ指示を出した。

『灰原！？お前無事なのか！？』

突然話し相手が変わった事にコナンは驚くが。

「私の事は良いから、早くしなさい！応急処置は私がやっておくから！」

哀の物凄い迫力に押され、返事も早々に通話を終えた。

（お願い、助かって！）

哀は祈りながら手早く応急処置を進めていった。

（ここは…。）

隼人が目を開けると白い天井が見えた。そして薬品の匂いを感じ、最後の記憶と照らし合わせて此処が病院だと推測する。

（そうか、あの時俺、気を失っちゃったんだな。）

自分の情けなさに溜息を吐き、取りあえず体を起こそうとするが。

「イテッ」

体中、特に左の脇腹から激痛が走り、思わず声が出てしまった。

余りにも痛いので起き上がることを仕方無く諦め、仰向けの体制のまま天井を見つめる。

「あら、気がついたのね？」

自分以外の声がした事に驚く隼人だったが、病院のベッドに仰向け



で寝ている状態では声を発した人物の姿が見えない。

暫くすると哀が覗き込むように自分を見下ろす姿が見えた。

「哀、どうしてお前が…？」

自分が病院に居る事は推測できたが、此処に哀が居る訳が分からず疑問がそのまま口から洩れてしまった。

「どうしてって見舞いに決まってるでしょ？工藤君も一緒に来たんだけど、今は飲み物を買に行ってて此処には居ないわ。」

隼人の疑問に心底呆れたように哀が答えた。

「それで、あの後はどうなったんだ？」

とりあえず隼人は自分が気を失った後の事を教えて貰う事にした。やはり係わったからには最後まで知りたい。

それに対して哀は丁寧に説明する。警察によって歩美を攫った犯人も含めて誘拐犯は全員逮捕された事。隼人は救急車で病院に運ばれ緊急手術を受けた事。手術後二日間も目を覚まさなかった事。その間、少年探偵団や蘭達が見舞いに来た事などを。

「おいおい、俺は二日も寝てたのか。心配かけたか？」

説明を聞き終わると、流石の隼人も驚いた。

それと同時に迷惑を掛けた事を詫びようとしたが。

「別に。全身打撲に頭部からの流血、おまけに左腹部をナイフで刺される。こんな怪我をしてるのに笑ってた何処かの変態さんの心配なんて、するだけ時間の無駄だわ。」

哀がザックリと切り捨ててしまった。

「…おい、いくらなんでも『変態』はねえだろ？傷つくぞ。」

隼人は少しだけムツとして言い返す。

「あら。この上、心まで傷ついた貴方を観察するのも面白そうね。」しかし、言い返した事を隼人は激しく後悔した。

自分が哀に口で勝てる訳無いのだ。現に今回も完全に言い負かされたのだから。

「勘弁してくれ。観察ってお前に言われると冗談に聞こえねえ。」これ以上の痛手を受ける前に負けを宣言するのが最適だと判断した

隼人は、げんなりと答えた。

そしてふと思いついて、哀に頼みごとをする。

「あ、そうだ。悪いけどベッド起こしてくれねえか？ 情けねえ事に自分で起き上がれねえんだ。」

隼人は仰向けで寝ている為、会話がしにくいのだ。それに、哀に上から覗きこまれるように見られるのが、どうも落ち着かない。

「仕方無いわね。」

哀は溜息を吐いてベッドのリクライニングスイッチを押し、隼人の上半身が起き上がるようにしたのだが。

「イテッイテテッ！」

隼人にはそれでさえも傷口が痛んでしまうようだ。

「解った、俺が悪かったから、止める……」

もはや隼人はプライドも捨てて泣きつくように懇願している。

「煩いわね。我慢しなさい、もうすぐだから。」

だが哀はそんな隼人を一蹴し、そのままスイッチを押し続ける。やがて丁度いい角度でベッドは止まった。

ガチャ

「よお三井、目が覚めたのかって、何やってんだ？ オメー等？」

病室のドアを開けてコナンが入って来たが、目の前の光景に呆れてしまう。

そんな様子など気にせず、兎にも角にも病室に入って来た第三者に隼人は救いを求めた。

「工藤、この悪魔をなんとかし……」

しかし隼人のセリフは、ジト目で睨みながら少しだけスイッチを押す哀によって簡単に止められてしまう。

「……本当に何やってんだ？ オメー等？」

「別に。ただベッドを起こしてあげていただけだよ。それじゃ私、喉が渴いたからコーヒーでも飲んで来るわ。」

そう言うとき哀はさっさと病室を出て行ってしまった。

それを目で追い、哀が居なくなっただのを確認してからコナンが口を

開く。

「それで三井。実際の所はどうなんだ？」

コナンの言いたい事を察知した隼人は。

「ああ、ちよつと想像以上だ……。」

と、溜息交じりに答えた。

「二日間も気を失ったままだったのと、目が覚めても自分で起き上がれねえのが証拠だ。」

「そうか……、随分酷くやられたんだな。」

「心配はいらねえ。ただ、助けに行った俺が哀の負担になっちまったのがな……。」

隼人は自分の不甲斐なさが気に入らなかった。

「負担？ああ、灰原が応急処置をしてやった事か。ちゃんとアイツに礼を言っておけよ？応急処置が無かったらかなりヤバかったって医者が言ってたぜ。」

「いや、それもそうなんだが。俺が言いてえのは、俺の怪我を自分の所為だと哀が考えちまわねえかって事だ。」

コナンの言う事ももっともだったのだが、隼人はそれ以上に気がかりになっている事を告げた。

それに対してコナンは暫し沈黙した後、肯定の返事をする。

「……そうだな。アイツならそんなバカな考えしてそうだよな。現にオメーが眠ってる間は口数も少なかったしな。」

「そうか……。それにしても、全く目敏い奴だな。」

「バーロー、探偵舐めんなよ。」

「俺に頼ってきて良く言うぜ。」

やがてどちらも笑いを堪えられなくなり、しばらく声に出して笑い合った。

「テテッ、あんまり笑わせるな。傷に響くじゃねえか？」

「オメーが勝手に笑ったんじゃないか。とにかく。」

「ああ、決まりだな。」

二人はお互いを見合い、今度は声を出さずニヤリと笑った。

暫くすると哀が病室に戻って来た。

それをコナンと隼人は黙って見つめている。

見つめられてる事に気付いた哀は。

「何よ。」

と、いかにも不機嫌だという表情と声で尋ねた。

「いや、工藤から聞いたぜ。俺の応急処置をしてくれたんだってな。」

問いに答えながらニツと隼人は笑う。

「仕方無いじゃない。あの場には私しか居なかったんだから。」

哀はさらりと事もなげに言ってるが。

「ありがとよ。お前がやってくれなかったら俺は此処に居なかったかも知れねえしな。」

隼人の真っ直ぐな礼に照れたのか僅かに頬を染め視線を逸らす。

「それもかなりの確な処置だったらしいぜ。」

更にコナンが追い打ちを掛ける事によって、哀は益々赤くなっている。

「ちょ、ちょっと、私の事はどうでもいいでしょう!？」

「どうでもいい事はねえさ。俺の命の恩人なんだからな。だろ? 工藤。」

そう答えながらチラツとコナンを見る。

「ああ、そうだな。事件の被害者ってだけでも、どうでもよくねーしな。」

コナンは肯定したうえで、関係者って事を強調した。

「そうだ…。俺、まだお前の口から聞いてねえな。」

コナンの言葉で何かを思い出したように呟く隼人。

「聞いて無いって何をよ?」

「だから、助けに行っちゃったろ? それに対しての返事。」

隼人の言葉を聞いて哀の表情が急激に翳っていく。

「…そうね。ごめんなさい。私が攫われたりしなければ、貴方がこ

んな怪我をする事も無かったのよね。」

「違えな。俺が待ってるのはそんな言葉じゃねえ。」

隼人は首を横に振って否定する。

「え？」

哀には否定された理由が分からず、思わず呆けてしまう。

「三井は、オメーに謝って欲しいんじゃないんだよ。他に有るだろ？ 助けられた後、最初に言う言葉が。」

コナンが助け船を出した事によって、哀は何となく答えが分かりポツリと言ってみる。

「…ありがとう…。」

本当に囁くような音量だったのだが、隼人にはしっかりと届いたようだ。

「それだ、その言葉を待ってたんだ。やれやれ、やっとこの怪我也報われるぜ。ああ、それと一応工藤にも礼を言ってやれ。お前が攫われたって気付いたのは工藤だからな。」

「そうね。ありがとう工藤君、助かったわ。」

一度言った事で、次はすんなりと哀は礼を述べる事が出来た。

「やけに素直じゃねーか。言ったら？ 守ってやるって。」

コナンはニツと笑って答える。それを見て隼人は溜息を吐いた。

「相変わらずキザな奴だな。實際助けたのは俺だぜ？ …そう言えば、お前からまだ礼を貰ってねえな？」

「バーロー、誰がオメー何かに。」

「俺もお前に言われたら気持ち悪いだけだ。」

その後は、あーだこーだと二人だけで口論になってしまう。

そんな二人を見て哀はフツと微笑んだ。

この二日間ずっと気分が沈んでいたのがウソのように今は晴れ渡っている。

哀自身にも如何してなのかは分からなかったが。

（どうしてなのかしらね、ホント。）



## 少女誘拐事件（後書き）

三話目です。

お読みいただきありがとうございます。

今回はちょっとした事件物にしてみました。

と言っても、推理は必要に無いほどの簡単な物でしたが。

短編集と言っておきながら各話が関係してくる事もあると思います。  
その場合は前書きにてご連絡致しますのでこれからもよろしく願  
いします。

## 西の名探偵登場

土曜日の昼時、毛利探偵事務所はいつもの通り暇を持て余していた。いや、『暇を持て余している』と言ったら語弊があるだろう。

探偵の毛利小五郎はビールを飲みながら、一生懸命アイドルの沖野ヨーコを応援しているのだから。

そんな小五郎に、娘の蘭は額に青筋を立てている。

「もう、お父さん！ちゃんと仕事してよね！」

「あん？何言ってるんだあ？探偵の仕事がねえのは平和な証拠でしょよ？ねー、ヨーコちゃん？」

しかし蘭の怒りもあっさりと受け流されてしまう。

もう無理だろう。酔っ払いの相手を真面目にしても疲れるだけだ。蘭は溜息を吐いて小五郎の相手をするのをやめた。

そんな様子をコナンは眺めていた。小五郎が煩くて、小説だろうと雑誌だろうと読んでいられないのだ。

（まったく、典型的なダメな大人だよな。これ以上蘭の負担を増やさねー様に俺も気を付けねーとな。）

只でさえ、工藤新一として会う事が出来ず寂しい思いをさせておき、江戸川コナンとして衣食住の世話になっているのだから、これ以上の迷惑は掛けられないと改めて強く誓った。

しかし、コナンの誓いを吹っ飛ばす勢いで突然入口から元気な声が響く。

「よお！くど：やのうて、コ、コナン君！遊びに来たで！」

そう言って事務所に入って来たのは、色黒な西の名探偵、服部平次だった。

相変わらず『コナン』と直に言う事が出来ず、つい『工藤』と言ってしまっている。

（服部！？）

いきなりの登場でコナンのみならず、事務所内の全員が驚いた。



それもその筈、今日平次が来るなんて事は誰も聞いていないのだから。

「よおー、姉ちゃんもおっちゃんも元気やったか？」

「服部君！？如何したのいきなり？」

「大阪の探偵ボウズが何の様だ？さては、この名探偵毛利小五郎の力を借りに来たな？」

「あー、ちゃうちゃう。今日はホンマに遊びに来ただけや。」

驚きによって酔いが冷めたのか、珍しく仕事に意欲を燃やした小五郎であったが、平次は事件関係で来た訳ではないようだ。

それに小五郎は少し残念そうにして、新しい缶ビールの栓を開けて再び飲み始めた。

もう平次に興味を失くしたようで、会話に入って来る気配がまるでない。

「はっと…じゃなくて平次兄ちゃん。ちよっと。」

平次に聞きたい事が有ったコナンは手を招いた。

コナンもコナンで、平次を呼ぶ時はつい『服部』と言ってしまいそうになる。やはり、似た者同士なのだろうか。

平次がコナンの下まで行くと身を屈ませ、それからひそひそと会話を始める。

「で？何なんだよ？オメーがわざわざ来た理由はよ？」

平次が言っていた理由に納得しなかったコナンは、蘭や小五郎の前では話せない内容だろうと予想したのだが。

「せやから、遊びに来た言うてるやろ？」

平次からは同じセリフしか返ってこなかった。加えて、呆けた表情で。

「はあ！？オメーそんな事でアポ無しで来たのかよ！？」

「そんな事って、相変わらずつれない奴っちなあ。暇してる思うて折角来てやったんいうのに。」

「バーロー。こっちにはこっちの都合があんだよ。今日は元太達の相手もしなくて良いから、ノンビリ過ごそうと思ってたのによ…。」

（いや待てよ？良い機会かもしれねーな。アイツとは会わせておいた方が良いだろ。）

ふとコナンの頭に平次が来た事で済ましといた方が良い用事が浮かんだ。

一方の蘭は、ひそひそと話しあっているコナンと平次を見た後に、入口に目を向けて誰も入ってこない事に首を傾げた。

「ねえ、服部君？和葉ちゃんは？」

そう、平次の幼馴染の和葉の姿が見当たらないのだ。

「ああ、今日は連れてきてへん。俺一人や。」

質問された事で平次はコナンとの会話を終了させ、立ち上がりながら答えた。

「そうなんだ？ちょっと残念だったかな？」

「堪忍な。アイツも来たい言うてたけど、用事が有ったみたいや。姉ちゃんによろしゅうって言ってたで。」

眉尻を下げて力なく笑う蘭を見かねて平次は謝った。今回も一応和葉に連絡はしていたのだが、和葉自身に用事が有って来れなかったのだ。

「あ、別に服部君が悪いんじゃないんだから。」

謝って来た平次に蘭は手を振って制する。謝らせたかった訳ではない。

「それより、服部君お昼食べた？まだなら私達もこれからだから一緒にどう？」

「お、ええんか？実は腹ペコなんや。」

平次は嬉々として頂こうと思ったのだが。

「あ、僕と平次兄ちゃん、今から阿笠博士の家に行つて来るね？」  
突如としてコナンが平次の手を引っ張って駆け出した。

「え！？ちよつとコナン君お昼は！？」

「博士の所で食べるから大丈夫だよ。それじゃ、行ってきまーす。」  
蘭が慌てて引きとめようとしたが、あつという間にコナンは平次を連れて出入り口から姿を消したのであった。

「おい、工藤。如何言う事かちゃんと説明しい？昼飯、御馳走になる所やったのに。」

阿笠邸へと向かう道中、平次はご立腹だった。空腹時に何の説明も無しに引っ張られ食事が出来なくなったのだから仕方ないだろう。

「悪かったって。実は、オメーに会わせておきたい奴がいるんだ。」  
コナンは苦笑しながら謝り、連れ出した理由を明かした。

「会わせたい奴？」

説明を受けた平次は腹を立てるのをやめ、真面目な顔つきになる。

「ああ、俺の正体を知ってる奴だ。」

「ほお、そりゃ確かに顔会わせておく必要が有りそうやな。」

平次自身もどんな奴なのだろうと興味が沸いてきたようだ。

「せやけど、飯食ってからでも良かったんちゃうか？」

それでも、やはり昼食を食べなかったのが惜しいらしい。

「だから悪かったって。博士の家に着いたら、きっと何か食わせてくれるからよ。」

あての無い口約束をして二人は歩いて行った。

（あんまゆっくりしてっとアイツどっか行っちまうからな。）

やがて阿笠邸に辿り着き、チャイムを鳴らす事も無く堂々と中へと入っていく。

いくら親しい仲とは言え住居不法侵入にならないのだろうか。

「おーい、博士ー？」

「おお、なんじゃ。新一と平次君か。今日は如何したんじゃ？」

コナンは中に入るなり家主を探そうと声を出したが、あっさりと見つかった。

博士の後ろには哀と隼人も居るので、三人で何処かに出掛ける所だ

ったようだ。

「久しぶりやなジーさん。小っこい姉ちゃんも元気やったか？それと…。」

（コイツやな？工藤が俺に会わせたい言うてたんは。）

平次は笑顔で挨拶を進めていたが、見知らぬ男が一人いた事でピンと閃いた。

「あ？誰だ？」

一方の隼人も平次を見て首を傾げている。周りの反応を見るに親しい仲らしいが見覚えは無い。

「ああ、俺は服部平次。関西やったらちよつとは名の知れた探偵やで。」

自己紹介は平次から切り出した。平次の自己紹介の表現は自信の表れなのだろう。

「ふーん？探偵ねえ…。」

だが、隼人の反応は薄い物だった。

「何や？」

それに少し気を悪くした平次が問い掛けると、隼人は苦笑いを浮かべながら謝った。

「ああ、悪い。『探偵』ってのに良い思い出がねえんでな。俺は三井隼人だ。よろしくな。」

「おお、よろしゅうな。」

隼人が謝った事で平次の機嫌も直り、二人してニッと笑った。

「それで博士。何処に行くつもりだったんだよ？」

とりあえず此処に来た目的を達成できたコナンは尋ねてみた。このまま昼食を貰いたいと思って。

「お昼を食べに行くところだったのよ。博士が、美味しいと噂になってるお店を見つけたから皆で食べに行く事になったの。」

コナンの質問には博士で無く哀が答えた。

「ほお、それなら俺等も一緒に行ってええか？俺等もまだ飯食って無いんや。」

平次のテンションが少し上乘せされる。それほどまでに、お腹が空いていたのだろうか。

「構わんよ。食事は皆で楽しくした方が美味いからのう。」

こういった事を博士が断る訳も無く、コナンと平次も含めて五人で昼食を食べに出かけるのであった。

「ごっそさーん！」

大変満足しましたと言わんばかりに平次は満面の笑みを浮かべていた。

その一方で博士の表情が暗い。

「博士。気持ちは解るけどそんな顔すんなよ？」

「良くそんな事が言えるもんじゃな。ワシの目の前で焼肉定食を食べていたくせに。」

コナンを見る博士の目は冷たい。

博士の表情が暗い理由は、哀の厳しい食事制限の為肉料理が食べられない事に有ったのだ。

ちなみに、コナンが焼肉定食、平次がハンバーグ定食、隼人は焼魚定食、そして哀と博士が冷やし狸そばであった。

「三井君も博士に遠慮しないで好きな食べて良かったのよ？」

「遠慮なんかしてねえぜ？俺は肉より魚派だからな。」

「へえ、珍しい奴っちゃな。魚の方が好きなんて。」

「よく言われるが、好みの問題だからな。哀は何が好きなんだ？」

「そうね…。ピーナッツバターアンドジェリーのサンドイッチかしら。」

「何や？それ。」

「ああ、知ってるぜ。アメリカに居た時に食った事が有る。確か、ピーナッツバターとブルーベリージャムを挟んだ奴だったよな？」

「ええ。小さい時に食べて以来大好きになったわ。」

「話からするにメチャメチャ甘そうなんやが？」

「メチャメチャ甘かったぜ。」

「さよけ。良くそんな物が食えんなあ？」

「好みの問題なんだから別に良いでしょ？　そう言う貴方は何が好きなのよ？」

「そら、やっぱりお好み焼きやろ。美味しい店を探して大阪中をバイクで走り回った程や。」

「ふーん？」

「そう。」

「何やその態度。ムカツク奴っちゃなあ？」

「いや悪い。余りにも予想通りの答えだったんでな。」

「…まあええ。とにかく、大阪に来たら俺が美味しい店紹介したるから期待しといてや。」

コナンと博士を置いて、こちらの三人は楽しく会話を繰り広げていた。平次と隼人も随分と打ち解けているようだ。

「それじゃ、そろそろ行くかの？」

食べ終わってから一息つく事も出来たので、店を出る事にした。これ以上店内に居座っては従業員にも他の客にも迷惑になってしまうから。

「それで、オメーこれからどうするんだよ？」

店から出た後、コナンは隣を歩いている平次に声を掛けた。

「どうする言うても、別に決まってないで？　せやなあ、東京案内でもして貰おか？」

「案内つつつても行く所がねーじゃねーか？」

そうなのだ。以前に平次達が東京に来た時に観光場所となる所は案内してしまっているのだ。

「なら、一緒に散歩でもするか？」

これからの予定が決まって無いと言うので、隼人は散歩に誘ってみ

た。

「構へんけど、何処行くんや？」

「知らねえ。その時の気分次第だからな。」

「お前、随分と適当な奴やな……？」

「それもよく言われるぜ。で？行くのか？行かねえのか？」

「面白そうやないか？よっしゃ、付き合ったる。工藤も一緒に行くで？」

「はあ！？何で俺まで？」

「つれない事言うなや？ええやないか、偶にはノンビリ散歩するの  
も。」

「わーったよ。ったく、しょーがねーな。」

「博士達はどうする？」

「ワシは遠慮しておくよ。そろそろ発明品の発表会も近づいておる  
しの。」

「私もパス。貴方達みたいに暇じゃないの。」

「そうか。んじゃ、行くか。」

予定が決まった事で別れて歩き出そうとした時。

「きゃあああー！！！！」

突如として大きな悲鳴が響き渡った。

コナンと平次はすぐさま悲鳴の下へ駆けていき、残りのメンバーも  
その後を追った。

（まさか、また引ったくりじゃねえだろうな？）

走りながら隼人はそんな事を考えてしまったが、今回は違ったよう  
だ。

悲鳴が起きた場所へと到着すると、そこには男性が一人血を流して  
倒れていた。

「アカン。もう冷たなっとなる。」

そこは路地裏で周囲を建物で囲まれており視界も悪く、また通行人  
も少ない所だった為に今まで発見されなかったようだ。

「博士、直に警察を呼んでくれ。」

「解った。」

コナンの指示に従い博士は急いで電話を掛けに行った。その間に平次とコナンは遺体の状況を事細かに調べている。

「なあ哀。これってアイツ等の所為だよな？」

コナン達を遠巻きに見ながら隼人は隣に立っている哀に尋ねた。アイツ等とは勿論コナンと平次の事だ。

「ええ、多分ね。」

哀も同意見らしく溜息を吐いている。

探偵が事件を呼ぶのか、事件が探偵を呼ぶのか、どちらにしろ難儀な物だ。

やがて暫くすると目暮警部を筆頭に警察がやって来た。博士も戻り、哀の隣に立って事件の解決を待っている。

捜査が進んでいく中、コナンと平次は首を傾げていた。どうにも解けない疑問が有るようだ。

「どうした？行き詰ってるみてえじゃねえか？」

二人の様子を見かねて隼人は声を掛けた。東西の名探偵が揃って首を傾げているのだから余程の事なのだろう。

「ああ、どうも可笑しいんやこの事件。」

「三井。オメーも少し知恵貸せよ？」

「何だ？手伝って欲しいのか俺に？」

隼人が挑発的な笑みを浮かべて答えると。

「バーロー。誰がオメーなんかに。」

ついコナンは意地になって断ってしまった。

「だったら初めから聞くんじゃねえ、バーカ。」

「んだと、テメー！」

「落ち着けや工藤。三井も余り推理の邪魔せんといてや。」

コナンと隼人がケンカになってしまいうだつたのを、平次が取り持つ事で何とか回避できた。

「邪魔ねえ…。俺は三つ有るんだが、お前等は如何なんだ？」

実は遠巻きに眺めつつも、隼人はしっかりと推理していたのだ。



平次はそれに驚いて少し呆けてしまった。隼人が言っている事は恐らく疑問点の数なのだろうが、それは平次が思ってたのと全く同じ数だったのだから。

「何や、只の口が悪い適当な奴かと思とったら、頭の方は随分と切れるんやないか？」

「合格点は貰えるか？」

「ああ、文句無しや。」

「そりゃ良かった。で？いくつなんだ？」

「俺も服部もお前と同じで三つだよ。もう犯人の目星はついてるから、後はこの疑問点を解くだけなんだが……。」

「仕方ねえ、手伝ってやるか。早くしねえと散歩に行く時間が無くなっちまうからな。」

渋々ながらも隼人も捜査に協力する事にした。

三人寄れば文殊の知恵と言う様に、その後は疑問点をことごとく解き、見事に解決へと漕ぎ着けたのであった。しかし。

「西の名探偵が情けねえんじゃないか？あんな決定的な物を見逃すなんて。」

「何やと？お前かて、初歩的な見落としをしてたやないか？」

「ったく、オメー等いい加減にしろよ？余計に事件を難解にしようがって。」

「お前が一番最初にミスリードに引っ掛かったと思うんだが？」

「せや。そもそもそこで狂ったんや。」

「うっせーな。俺だってミスは有るんだよ。」

事件は解けたのだが、三人はその途中の推理の事で口論を始めている。

どうやら、三つ有った疑問点はそれぞれ違う物だったらしい。

誰が足を引っ張ったかで先程からずっとこの調子だ。

その一部始終を見ていた哀はポツリと呟いた。

「ねえ、博士。彼等って仲が良いのかしら？それとも悪いのかしら

「？」

「うーん。ワシには良い様に見えるがのう？」

哀と博士は中々解けそうに無い難問に揃って首を捻るのであった。

## 西の名探偵登場（後書き）

四話目です。

お読みいただきありがとうございます。

今回は服部の登場でした。

関西弁については間違いが多々有ると思いますが、多めに見て下さると嬉しいです。

最後の口論ですが、原作ではその様な描写はされていませんが、仲のいい友人同士なら有っても不思議じゃないだろうと思い書いてみました。

不快感を持った方がいらしたら申し訳ありません。

それでは、これからよろしくお願いします。

感想が有りましたら送って下さい。

## 大阪上陸（前書き）

タイトルで判るかと思いますが、「西の名探偵登場」の後の話になります。

## 大阪上陸

「は？何でお前が此処におんねん？」

「よお、邪魔してるぜ。」

西の名探偵、服部平次が学校を終え自宅の居間に戻ると、堂々と居座り茶を飲んでる三井隼人の姿が目に入って来た。

「平次、何時までも立っとらんと座りいや。お友達に失礼やろ？」

「あ、ああ……」

入り口の襖を開けたまま頭に疑問符を浮かべている平次を、居間内に居た静華が窘める。恐らく、今まで隼人と茶を飲みながら話をしていたのだろう。

「それで、何で大阪におんねん？」

隼人の隣に腰を下ろし、当然の疑問をぶつける。呼んだ覚えは間違いない。無く無い。

「ん？ちよっと散歩しにな。」

「散歩！？東京から大阪までわざわざ散歩しに来たっちゅうんか！？」

「うるせえな。別に良いだろ？お前だってアポ無しで東京に来てたんだから。」

「アホ！俺はちゃんとした理由が有って行ってたんや！何の目的も無く呑気に歩き回っとるお前とは違うんや！」

「コラ、平次。三井君はアンタが帰って来るのを待ってたんやで。お詫びに街でも案内したりい。」

「ぬ……。解ったわい。」

熱くなっていく平次を見事に静める静華。さすがは名探偵の母親だ。（この後は確か、和葉と買い物に行くんやっただけ……。まあ、コイツが居っても別にエエやろ。）

「じゃあない。着替えて来るさかい、ちよっと待ったとき。」

自室に向かい制服から私服へと着替えて戻って来た平次と一緒に、

隼人は大阪の街へと繰り出していった。

「それにしても、お前どうやって家まで来たんや？場所教えてへんかったやろ？」

道を歩きながら平次は疑問をぶつけた。自分の家までの経路はおろか、住所すら教えてなかったのだから。

唯一話したのは『大阪に住んでいる』ぐらいだ。

そうになると、コナンにでも聞いたのだろうかとしか予想を立てられなかった。

「ああ。だが、お前が探偵と言うのは聞いてたからな。探偵なら刑事と顔見知りの可能性が高えから、府警本部に行ったんだ。」

しかし、隼人から返って来た答えは全く想像していなかった物だった。

「おま、府警本部に乗り込んだんかいな？」

平次も何度の中に入った事が有るお馴染みの場所だが、一人探す為に入る場所では無いだろう。

「ああ。そこでお前に会いたいからお前を知っている刑事を呼んでくれと頼んでな。そしたら大滝って刑事が出てきて、事情を話したら車で送ってくれたんだ。」

「なるほど、大滝はんか…。」

平次は苦笑いを浮かべて隼人の話を聞いていた。大滝刑事と言ったら、平次と最も親しい刑事の一人だ。

「しかし驚いたぜ。まさかお前の親父さんが大阪府警本部長だったなんてな？」

「どうでもええやろ？そんな事は？とっとと行くで？」

話はそれまでと平次は歩くスピードを上げて一人で行ってしまう。父親にライバル心を持っている平次としては、父親の話は面白いのだ。

少し平次の態度が変わった事に気付いた隼人は、何か気に障る事言ったかと首を傾げたのであった。

「全く平次の奴、何時になったら来るん？毎度毎度あのアホ！」

待ち合わせ場所に到着してから二十分。待てども待てども来ない平次に、和葉はイライラしていた。

学校から帰って着替えたら此処に落ち合う約束をしていたのだが、明確な時間を決めてなかったのが失敗だったかもしれない。

「なんや和葉。もう来てたんか？」

「一体、何時まで待たせる気や！？って、誰なん？隣の人。」

待ち合わせ相手が漸く来たので怒鳴りつけたが、見知らぬ人物が居る事で勢いが無くなってしまった。

「ああ、コイツは東京で知り合うた三井や。毛利の姉ちゃんとも知り合いみたいやで。」

「へえー蘭ちゃんと…。あ、私、遠山和葉。よろしゅう三井君。」

「ああ、よろしく。」

笑顔を浮かべて和葉が自己紹介すると、隼人もニツと笑って挨拶をした。

「それで三井君は何しに大阪に来たん？明日は休日やから旅行とか？」

「いや、ちょっと散歩しに来ただけだ。」

「へ？散歩？」

「そうや。コイツ東京で散歩してる時に『大阪にでも行ってみるか』と思って、そのまま来たんやと。」

平次が呆れ果てた表情で説明をする。いくら自分がアポ無しで東京に行った事が何度も有るとは言え、散歩の延長で行った事は一度も無いのだから。

「そ、そらまた随分と遠出の散歩やな…。」

説明を受けた和葉もどうリアクションを取れば良いか困っているようだった。

「とにかく行くで？時間が無うなつてまう。」

隼人が来ていたという思わぬ事態によって予定より時間が過ぎてしまっているのに、平次は会話を切り上げてスタスタと歩きます。和葉はそれを駆け足で追いかけて、隼人はその後ろを歩いて付いて行きました。

「おい、和葉さん。少し聞きてえことが有るんだが良いか？」

最後尾を歩いていた隼人は少し前を歩いている和葉に声を掛けた。

「ん？何？」

それに応えた和葉は隼人の隣になるように歩く速さを緩める。

「服部の奴、親父さんと上手く行ってねえのか？親父さんの話になった途端、態度が変わった気がしたからな。」

隼人は先程の事を聞いてみた。家庭の事情だとしたら踏み込み過ぎかもしれないが、平次を待っている間の静香との会話を思い出しても、そんな暗い事が有るとは思えない。

和葉なら何か知ってるだろうかと思ったのだ。  
それに和葉は快く答えた。

「ああ平次な、自分のお父ちゃんにメチャメチャ、ライバル心持つとるんよ。」

「ライバル心？」

「そうや。『親父には負けん』言うてる程や。せやから平次の前で、平次のお父ちゃんの話をするのは御法度なんよ。」

「ふーん？立派な父親を持つと大変だな…。」

平次の事なら何でも聞いてくれと言わんばかりの表情で説明していた和葉であったが、最後の隼人の何処か意味深なセリフに首を傾げるのであった。

一行が向かった先は和葉が買い物をしたかった洋服店だった。



店内に入るなり和葉は喜んで次々と洋服を見回していく。一方で男子陣は他の客の邪魔にならない様に隅に揃って立っていた。

「何で女っちゅうんは、こんなに買い物が好きなんや？ 訳解らんでホンマ。」

「同感だな。とてもじゃねえが付いていけねえぜ。」

生き生きしている和葉の姿を半目で見ながら首を傾げる二人。

そんな中、平次はふと思った事を隼人に聞いてみた。

この間、隼人と初めて会った時に何となく感じたものだ。

「そう言えばお前。あのちっさい姉ちゃんに惚れてんのやろ？」

「な！？：お前それ冗談で言ってるんだろ？ 何で俺がああ目つきが悪い、性格が悪い、愛想が悪い、三拍子揃った奴に惚れなきゃなんねえんだ？ 大体、それじゃ俺がロリコンになっちまうじゃねえか。」

突然の事に隼人は一瞬驚いた顔をしたが、直に不機嫌な顔になって早口でまくし立てる。その反応を見た平次は自分の考えに確信を持った。実はただカマをかけたただだったのだ。

「照れるなや。人が饒舌になるんは、それを自慢したい時か誤魔化したい時と決まってんねんで？ それに、あの姉ちゃんの本当の歳は俺等とそう変わらへんのやから、別に可笑しいやろ？」

「だから、見た目だけじゃなくてだな：。」

「二人して何の話をしとるん？」

ドキッ

突然和葉から声を掛けられて隼人は心臓が飛び出すほど驚いた。

「何や和葉。もう買い物終わったんかい？」

「うん。最初からある程度目星付けといたから。それで何話してたん？」

「ああ、実はコイツな：。」

「おい：。テメエそれ以上言ってみろ：？ 只じゃおかねえからな：？」

和葉に説明しようとする平次に向かって殺意が籠った目で隼人は睨

みつける。明らかに声が低くなっており、他人を脅すには十分だ。

「じよ、冗談や冗談。せやから、その目やめえ。」

冷や汗を流しながら両手を体の前に出して謝る平次を取りあえず許しはしたが、ジト目を向ける事は忘れない。

「？三井君がどうしたん？」

説明が途中で途切れてしまった事に和葉は首を傾げた。

「あ、ああ、コイツが本場のお好み焼きを食ってみたい言うたからな、何処にしようかと話してたんや。ハ、ハハ……」

「それやったら、この前の店がええんとちゃう？ここからも近いし。」

適当に思いついた言い訳だったのだが和葉は疑う事無く話に乗ってくれた。

そしてやって来たお好み焼き屋。

各々の前に出来上がったお好み焼きが美味しそうに湯気を立てている。

平次と和葉は既にパクついているが隼人はお好み焼きを睨みつけたまま微動だにしない。

「あれ？三井君食べなん？冷めてまうよ？」

「ホンマや。一口も手えつけてへんやないか？」

「気にするな。嫌いな訳じゃねえから……」

平次と和葉が揃って尋ねて来たが、隼人は特に理由を述べようとはしなかった。

しかし、二人に気付かれない様に密かに冷や汗は流している。

「さよか……。あ、解った！三井君猫舌とちゃう？それでお好み焼きが冷めるのを待ってるんやろ？」

ギクッ

和葉の鋭い指摘で隼人は心臓が大きく跳ね上がった。

言った和葉も特に根拠は無く只の直感だったのだが、見事に核心を突く結果となってしまうのだ。

「アホ！何言うてんねん。コイツがそんな訳、無い…やろ？」

和葉の推理を否定しようとした平次であったが、隼人の様子を見て段々と声が尻つぼみになってしまう。

「……………」

「まさか、凶星やったんか…？」

無言のまま頷く隼人を見て、平次は一瞬呆けた後、腹を抱えて笑い出した。

「おま、猫舌って、ハハハ…。ア、アカン、笑い過ぎて、い、息がハハハ…。」

「へ、平次。笑い過ぎやで。」

「せやかて、お前だって可笑しい思うやろ？よりによってコイツが猫舌やとは。」

「そりゃ意外やとは思ってたけど…。」

「チッ、好きなだけ笑え。どうせ俺は熱い物がダメな情けねえ男だからな。」

「あー、スマンスマン。堪忍してえや。お詫びに一泊家で泊めてやるさかい。」

すっかり拗ねてしまった隼人に悪いと思って、平次は泊まる宿を提供したのだが。

「断る。これを食べたら帰る。」

隼人は即答で断ってしまった。

「何でや？明日は休日なんやから泊まってっても問題ないやろ？」

「有るんだよ。休日は博士の所に行かねえとあの小さい二人がうるせえんだ。特に探偵が。」

一応約束としては休日は自分の持ち分になっている。それを無視しようものならコナンに何を言われるか解った物じゃないのだ。

加えて、哀からも冷たい目で睨まれるのは火を見るより明らかだ。どちらかと言うと、煩いコナンよりも哀の方が恐ろしい。

「三井君も中々大変なんやね？平次も少しは見習った方がええで？」

「アホ！俺は充分忙しいんや。今日もアホな女のアホな頼みに付き合ってるんやからな。」

「アホアホ言うな！アホ！」

その後はいつもの通り痴話喧嘩が始まってしまふ。拗ねていた隼人もその様子に呆氣にとられて掛ける声が見つからなかった。

いや、声を掛けるのを諦めたと言った方が正しいだろうか。

下手に仲裁に入って痛手を食うのは御免だったからだ。

何より、面倒そうだ。

隼人はケンカしている二人を放って適温にまで冷めたお好み焼きを食べ始めたが、余りの美味しさに上機嫌になっていた。

やがて店を出る時、ケンカしていた平次と和葉には先程まで拗ねてしまっていた隼人が上機嫌になっている理由が解らず、揃って首を捻るのであった。

お好み焼き屋を出た一行は新大阪駅へと来ていた。

「今日は悪かったな。いきなり来た上、美味しいお好み焼き屋まで紹介して貰って。」

「ええって。だが事前に連絡くれれば大阪中をもっと案内出来たんやけどな。」

「また来てや。大阪名物はまだまだ仰山有るんやから。」

やがて新幹線もホームに到着し、出発の時間を待っている。

「ほな、またな。はよ乗らんと扉閉まってまうで？」

「蘭ちゃん達にもよろしゅう言っておいてや。」

「ああ、じゃあな。デートの邪魔して悪かったな。」

後ろ手に手を振りながら新幹線へと乗り込む隼人。その背に平次と和葉が何か言っているが、同時に喋っているのも何をやっているのか聞き取れない。

隼人が乗り込んだのとはほぼ同時に扉が閉まり、新幹線はゆっくりと新大阪駅を出ていった。

「あのアホ。言うだけ言って行ってしまっておったわ。」

「なんや台風みたいな人やったね。」

本当に短い滞在だった男の感想を話していると、平次の携帯が鳴りだした。

手にとって画面を見るとメールの受信を告げている。

（メール？工藤からや。なにになに：。）

受信したメールを途中まで読んで平次は。

「な、何やとお！？」

と、周りを気にせずに大声を出してしまった。

「な、何？どしたん？」

「どうもこうも有らへん。」

突然の大声に驚いた和葉が尋ねるが、それと同時に和葉の携帯も受信を知らせる。

和葉に届いたのは蘭からのメールだった。それを読んでやはり和葉も。

「ええ！？」

と、大声を出してしまうのであった。

そこにもう一度平次の携帯が鳴りだす。今度は電話のようで相手を確認すると額の青筋がピクピクと痙攣した。

『あー、服部？工藤からのメール見たと思うが、明日も世話になるみてえだ。』

「このドアホ！何で今日来るんやボケエ！！」

通話相手はたった今新幹線に乗っていった隼人からで、平次は携帯にこれでもかと怒鳴った。

流石の和葉もこの時ばかりは平次と同感だった。なんせ二人が受信

したメールの内容は『いきなりだけど、明日皆で行くからよろしく。』  
『というものだったのだから。』

## 大阪上陸（後書き）

五話目です。

お読み頂きありがとうございます。

今回は前回に引き続き服部が登場。

しかも舞台を大阪に移して和葉まで登場しました。  
もっと服部と和葉の漫才を書きたかったのですが。  
すみません、私の文才ではこれが限界でした。

大阪組が好きな方、ごめんなさい。精進します。

それでは、次回もよろしく願います。

## 哀の選択（前書き）

「少女誘拐事件」よりも後の話になります。

哀視点です。



## 哀の選択

「バーカ、そこはドリブルで切り込めば相手を掻き乱せるだろ？」  
「バーロー、逆サイドにパスを出した方がゴール前を広く使えんじやねーか。」

今日は日曜日。さっきから工藤君、まあ姿は江戸川コナンだけど、それと三井君が博士の家に来てテレビゲームをしている。それも二人で対戦している訳じゃなくて、CPU相手に熱くなってる。

「よく飽きないわよね？さっきからずっとやってるじゃない、それ。」

思わず聞いてしまった。もう二時間はやっているんじゃないかしら？  
「このゲーム中々良く出来てるぜ。プレイヤーがイマイチだけだな。」

「うるせーよ。そうだ灰原、オメーもこっちに来て一緒にやらねーか？」

二人同時に振り返って私を見てる。楽しそうに笑っている表情は本当に子供っぽいわよね。

「遠慮するわ。今は雑誌を読んでいたから。」

ウソ。本当は貴方達を見ていたいから。でも、そんな事言える訳無いじゃない。

「あ、そ。」

工藤君達は、またゲームの続きを始める。そして、それを後ろから眺める私。

工藤新一と三井隼人。私が密かに好意を向けている人達。

本当は、こういうのは一人にしないといけないんでしょうけど…。笑っちゃうわよね。以前鈴木さんの事をお尻が軽そうって言った事が有るけど、私も然程変わらない。

でも、言い訳かもしれないけど、組織の中で育った私には好意を持

てる人なんて居なかった。

平気で人を殺せる人達、人の感情なんてお構い無しの悪魔達、そんなのに好意は持てないもの。

だから、組織を抜け出した私に優しくしてくれる彼等の事が好きになっってしまうのも仕方が無い事なのよ。初めての経験なのだから。

初めは工藤君だけだった。

A P T X 4 8 6 9 の所為で幼児化してしまったから、小学校に通うようになって沢山の子供達と触れ合ったけど、流石に十歳も年下の男の子に恋したりはしない。

同じ境遇の工藤君だけが特別。

ハッキリ言って初対面は最悪だったと思う。

私は、お姉ちゃんを助けてくれなかった彼を恨んでいたし、彼も私が毒薬を作っていたと知って本気で怒っていたわね。

今は如何思ってるか分からないけど、あの時のあれは本音に違いないわ。

『人を殺す薬を作ってたやつの事なんて、どう理解しろってんだ！？』

今でも思い出すと胸が痛む言葉。自分が犯罪者だと突き付けられる。それなのに彼は私を守ってくれた。命を救われた事も一度や二度じゃないわ。

『何かあったら、俺が守ってやつからよ。』

今でも思い出すと胸が温かくなる言葉。あの時の彼の顔が目焼き付いてる。

最初は同情されてるんだと思った。

けど違った。彼と一緒に行動していくうちにそうじゃないと解ったわ。

彼は困っている人を放っておく事が出来ない。

そんな人柄に私は、どんどん惹かれていったわ。

だけど彼には、心に決めた一人の女性が居た。その女性は何処とかお姉ちゃんに似ていて、私なんかが太刀打ちできる相手じゃない。それに、APTX4869で二人の時間を奪ってしまったのは私。

そんな私が、彼を好きになるなんて許されない事だと自分に言い聞かせた。

でも好きという気持ちを無くす事は出来なかった。

理性と感情の狭間で悩み続けてた私の前に現われたのが彼、そう三井隼人。

三井君の登場は衝撃的だったわ。

いろんな意味で出鱈目な、あんな人を他に見た事が無かったから。最初は何処にでも居そうな大人しい男の子だと思ったから、工藤君がやけに気にしている理由が解らなかったわ。

だけど記憶を取り戻した本当の彼は切れ者で、その推理力、洞察力に恐怖すら感じるほどだったわ。

工藤君に頼まれて私を守るのが本当に嫌そうだったわね。

そんな彼が、自ら進んで私を助けてくれたのが理解できなかったけど、後々になってそれも解った。

彼は知人が傷つくのを決して許さない。

それが彼の信念だった。

『俺が決めたんだ。俺がお前を助けたいとな。』

あの時私の心に沁み渡った言葉。誰に頼まれたでも無く、自分の意思で決めた。

この時に不覚にも彼に好意を持ってしまった。

そしてそれから気付いたわ。彼は最初から、私を一人の女性として接してくれていた事に。

そうしたらもう彼が気になって仕方無くなっていた。

「「あああああー！ー！！！」」

二人揃っていきなり大声を出さないでくれる？ビククリするじゃない。

「：ちよつと、煩いんだけど？」

平静を装って抗議したけど、内心はドキドキしてる。

だって貴方達の事を考えてたんですもの。もし考えが口に出てしまっていたらと思うと冷静で居られる訳無いじゃない。

「このタイミングでの失点は痛えな。何やってんだお前？」

「オメーが横から口挟んで来る所為だろ？」

私の抗議が無視されたのは少し腹が立ったけど、今まで考えてた事がバレて無いのにホッとしたわ。

それにしても私は、いつまで二人の間で揺れ動くのだろうか？

解っている。早く心を決めなければならぬ事も。このままだと二人に失礼だという事も。

いっその事、今日決めてしまおうか？博士が学会で出掛けていて、私たち三人しかない状態で、彼等は私を置いて二人で盛り上がる。こんな機会は滅多に無いだろうから。

でも、私が人を選ぶなんて許されない事。だけど、もし、一度だけ許されるなら。

まずは、彼等に共通する所から考えてみようかしら。

そうね……。頭脳明晰、スポーツ万能、容姿も良いと思うわ。

後は、お人好し、意地っ張り、生意気、自分勝手。

それと二人とも本当に鈍感。

こうして挙げていくと、結構彼等って似てるのね。私が二人に対して好意を持った理由が何となく解ったわ。

でも、生意気なのは如何かと思う。

そもそも私の方が彼等より一つ年上なのよ？それなのに『お前』呼ばわりなんて、一体どうゆう考えしてるのよ！

いけないわ、落ち着くのよ。

とりあえず、共通する所はこれぐらいで良いかしら。

次は工藤君だけが持っている物ね。

真実を追求する事が挙げられるわね。

後は、キザで無鉄砲で目立ちたがり屋って所かしら。

それに対して三井君は。

自分を着飾ったりしない事ね。

それから、気まぐれで天邪鬼でいい加減。

なんか、良い所よりも悪い所の方が多い気がするけど、この際仕方無いわよね？

さて、ここからが本題よ。

私が、より好意を示している方って考えじゃ絶対に決められないからこうして違いを挙げてみたけど……。

ダメだわ。恥ずかしくなってくるだけで決められそうにない。

だって二人とも優しくて、頼りになって、守ってくれるんだもの。

…守る？

そういえば三井君は、私の事を『守る』とは一度も言わなかったわね。いつも『助ける』って言ってる…。

何が違うのかしら？

只の偶然？違うわ。意図的にその単語を避けてるようなもの。

じゃあ、一体…。

『守る』の意味は警護とか保護とか、『助ける』の意味は手伝うに近かったかしら？

あ、もしかして…。

私の意思を尊重する為に、警護とか保護とかの一方的な『守る』をしないんじゃない？

自分でも自惚れだと思うわ。でも、そう考えるのが一番しっくりくる。

もし本当にそうだとしたら、私の心は決まった。

私だって、守られてるだけなんて嫌。

隣に立って対等で居たい。

だから、私が選んだのは…。

三井隼人。

これで良かったのよ。工藤君には私が付け入る隙間なんて初めから無かったんだもの。

でも、工藤君を諦めて仕方無く三井君を選んだ訳じゃない。

天邪鬼な彼が、素直になれない私に丁度良いのよ。

その、お、お似合いかどうかは、解らないけど。

「コーヒーを淹れるけど、貴方達も飲む？」

思考を中断させて問いかけてみれば、二人とも「飲む」って即答して。

ゲームは逆転で勝ったらしく、子供みたいに喜んでいる。

そんな様子に思わず笑みが零れちゃうけど、気付かれる訳にもいかないから足早にキッチンに向かったわ。

猫舌な彼の事を考えて、ちょっと温めのホットコーヒーを淹れてあげよう。

心が決まったからか気持ちがとても軽いわ。コーヒーの良い香りが更に気持ちを落ち着かせてくれる。

三井君は私の事好きになってくれるかしら？

正直、余り女性に興味を持って無さそうなのよね。

でも、私の心はもう決まったんだもの。

例え伝わらなくても、好きという気持ちだけは大事にしよう。

伝わった方がずっと嬉しいけど。

「これからよろしくね？気まぐれな猫さん？」

## 哀の選択（後書き）

はい、六話目です。

読んで頂きありがとうございます。

今回は、いよいよ哀が隼人に対して好意を寄せる決意をするのを哀視点で書いてみました。

実はこの「哀の選択」が「もう一人の実力者」の最大の難関で有り、出発点なのです。

オリキャラと哀をくっ付ける話を書くのはすぐに決まったのですが、そうになると少なくとも哀にとってはオリキャラはコナンよりも上でなければならぬ訳でして。

あんな完璧超人に近い人間を越えるキャラってどういうのだろうかと考え、隼人の大まかな骨組みが決まって行きました。

口調は、哀と対等に成るわけですからコナンを参考にしつつ、私の好きな別漫画のキャラを意識して現状のようになりました。

そして、あくまで「名探偵コナン」の主役はコナンだということを忘れないようにして、服部とは味の違ったコナンの親友ということで出来上がりました。

完成した隼人は私もかなり気に入ってます。

長々と語ってしまいごめんなさい。

今回から、何回か短編では有りますが時間軸の繋がった話をあげると思います。

それでは、次回もよろしくお願いします。



## 新一との『約束』（前書き）

前回の後書きにて書きました通り、時間軸は繋がっています。

## 新一との『約束』

「どれ、今日はこれくらいにしておこうかの？」

阿笠邸のリビングで博士が大きく伸びをした。

「今回の発明品も面白いものになりそうだな？」

「そう言ってくれるのは隼人君だけじゃよ。新一は完全にバカにするとるし、哀君も中々厳しいからのう。」

「あら、私は思ったままを言ってるだけよ？」

「ハハ……。それが厳しいんじゃないって……。」

今現在、阿笠邸に居るのは博士と哀と隼人の三人だけである。

時刻は夜の七時。隼人は博士の研究に夢中になるあまり、随分と遅くなってしまった。

「さて、俺はそろそろ帰るぜ？遅くまで悪かったな。」

「おお、そうじゃ。こんな時間なんじゃから、良かったら一緒に食べていかんか？」

玄関へと足を向けていた隼人を博士が呼びとめた。

「そいつは嬉しいが、良いのか？」

「別に。一人分増えたって特に変わらないから。」

隼人の問いに素っ気無く答えて哀はキッチンへと向かった。

何か手伝おうかと隼人が尋ねたが、邪魔になるからとバツサリ断る。だがそれで良かったのかもしれない。何を隠そう隼人は料理はサツパリなのだから。

カップ麺すら作れるのか怪しい程に。

三十分程して食卓に料理が並べられる。

博士の体型を考えて、野菜中心のヘルシーなメニューだった。

「これ、お前が作ったのか？」

「そうよ。悪い？」

（コイツ料理出来たのか？見た目は良いが、味はどうなんだ……？）

哀の手料理に隼人は少しばかり警戒した。今までも昼は自分で外に食べに出ていたから哀が料理を出来る事を知らないのだ。

やがて全員で食事を開始して、隼人は恐る恐る料理を口に運んだ。

「美味しい…。」

予想以上の美味しさに、思わず口から感想が漏れてしまった。

「そうじゃろう？哀君の料理は絶品じゃからのう。」

自分の事のように喜ぶ博士。その横で隼人は二口、三口と箸を進めている。

「驚いたぜ。正直どんな味がするのかと、かなり覚悟を決めてたんだが…。」

心底驚いたといった表情で話す隼人を哀はジト目で睨みつけた。

「失礼ね。私だって料理ぐらい出来るわよ。」

しかし隼人は哀の言葉を聞いてはおらず、黙々と料理を食べ続けている。

やがて自分の分を平らげてしまった隼人は目をキラキラさせて哀を見た。

「本当に美味しいな、コレ。お代りあるか？」

その様子に哀は一つ溜息を吐く。

「…貴方、遠慮って言葉知ってる？」

「あ、悪い…。」

今度はあからさまにシュンと元気を失くしてしまう隼人を見て哀はクスツと笑った。

（こういう所は本当に子供よね。）

「良いわよ。ほら、よそってあげるから貸しなさい？」

隼人の手から空になった器を受け取って哀はキッチンへと向かう。その表情は、普段に比べて明るく、嬉しそうであった。

やがて隼人の器に料理をよそり終えた哀が食卓へと戻って来た。

「ねえ、聞きたい事が有るんだけど良いかしら？」

器を隼人に手渡ししながら哀は一つ確認を取った。

「あ？面倒な事じゃなければ良いぜ。」

隼人の返答の面倒か、そうでないかの基準は良く解らないが、取りあえず了承と受け取った哀は席に着いてから質問を試みる。

「貴方、どうして女の人だけに『さん』付けて呼ぶの？」

哀が今まで見て来た中で、隼人は女性にだけ敬称付で名を呼んでいる。名を呼ぶ時の違いだけで後の口調は男女共に同じだった。

別にそれが如何と言う訳ではないのだが、少し気になったので聞いてみたのだ。

「そう言われればそうじゃのう？隼人君は女性に対しては殆んど名字でなく名を、しかも敬称付で呼んでおったのう？」

哀のセリフを聞いた博士も同じ疑問を持って首を捻っている。

二人とも箸を止めて聞く体制をしっかりと取った。

「ああそれか。ガキの頃に『女性には敬意をもって接しろ』と教わったからな。その名残だ。」

隼人は事もなげに説明したが、聞いている哀と博士は呆氣にとられた。

中でも哀は溜息を吐いて肩を竦めている。

「…その態度で『敬意を持っている』なんて言えると思ってるの？」

「そこまでは思ってたねえ。だが、もうクセみてえに成っちゃってるから今更直すのも面倒だ。」

どうやら、話していた隼人自身も無意識だったようだ。別に困る事が無かったので気にならなかったのだろう。

「まあ、隼人君らしいと言えばらしいのう。呼び方はどうあれ、誰に対しても平等に接している事に変わりは無いからのう。」

「平等に失礼だけどね。」

「うるせえな。お前に言われたくはねえんだが？」

哀のセリフに隼人はムツとした。眼つき、性格、愛想の悪い哀だけには言われなくなかったようだ。

「あら、私は誰かさんと違って敬語くらい話せるわよ？」

「…お前が敬語？」

隼人は怪訝そうな表情を浮かべる。哀が敬語を使っているのが想像できないのだろう。

「何？ 答えによっては御飯取りあげるわよ？」

対して哀はジト目で応戦した。更に渡したばかりの器へと手を伸ばす。

「いや、やめてくれ。」

効果は抜群だったらしく、隼人は器を守るように抱え込んでしまった。

「まあまあ、二人とも。隼人君、ワシからも一つ聞きたいんじゃないか？」

博士は仲裁に入りつつも隼人に確認を取った。

「何だ博士もか？ 別に構わねえぜ？」

「前に新一の言っておった『約束』って何の事じゃ？ ほれ、君が記憶を取り戻した時に『約束を果たす』とかなんとか言っておったじやろ？」

了承を得た事で博士は質問をした。それは以前から気になっていた事だが、知っているのが隼人と新一しか居ない為、直接本人に聞くしか無い物だった。

機会を伺っている間に聞きそびれてしまっていたのだ。

「そう言えば工藤君は貴方に負けを認めた事が有るって言ってたけど、貴方達の過去に何が有ったの？」

哀も聞きそびれていたのは同じだった。

むしろ、聞くことすら忘れてしまっていた。

博士が質問した事でそれを思い出し一緒になって聞いてみる。

「ああ、そのことか。何が有ったって程じゃねえんだけどな。工藤が俺に勝つって宣言したぐらいだ。」

「もっと詳しく話さない？ 知り合った経緯から如何してそんな約束をしたのかまで全部。」

隼人の余りにも簡単な説明に納得出来なかった哀は、より具体的に話すよう催促した。

この機会を逃したら次に聞くのは何時になるか解らなかったから。

「面倒だな…。まあいい、美味しい飯の礼だ。話してやるか。」

確かに面倒だったが、隼人は哀や博士に借りを作ったままにしくなかつた。

特に哀には、早めに返しておかないと後々どうなるか分からないと言ふ恐怖心も有る。

「俺と工藤が知り合つたのは中学三年の時のサッカーの公式戦、帝丹中学対杯戸中学の時だ。試合の時はお互いに知力も体力も出し切つて勝負したが、奴のサッカーの腕前には正直感服したぜ。結局、俺の学校が負けちまつたからな。で、試合が終わつた後に奴が俺の所に来てな、色々と話してゐるうちに気が合う様になつたんだ。…初対面の時はこんな物か。」

「ここまでじゃまだ工藤君が負けを認める事はなさそうね。むしろ勝つてゐるもの。」

「そうじゃな。となると次に会つた時に何かでボロ負けしたんじやろうな。」

話を聞いていて哀と博士は感想を述べ合つた。

新一と隼人の過去を聞くのは面白かつたが、目的はあくまで新一が負けを認める所。

今のところその気配は無い。

隼人は哀達の感想が終わるのを待つてから続きを話し始めた。

「次に会つたのは殺人事件だつたな。奴もまだ探偵を始めちゃいなかったから、俺達は野次馬に混ざつて推理して、ほぼ同じタイミングで解いたんだ。それが最後だつたと思うぜ？ 奴と何か競つたのは。」

「「え？」」

予想外の所で話が終わってしまった事に哀も博士も驚いた。

てっきり、もう少し続くものだと思つていたのだ。

「ああそうだった。この事件を解き終わつた時に、奴に『オメーには負けたよ。でも次に会つた時には俺が上だと解らせてやっからな

？』って言われたんだ。あ、だが、その後も何回か会っち待っててな。『次に会った時』ってのは今じゃ殆んど意味がねえんだ。」

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ。それじゃ貴方、一度も工藤君に勝ってないじゃない？何で工藤君が負けを認めるのよ？」

思いだした様に付け加えた隼人を哀は慌てて止める。

今までの説明では、新一が隼人に勝つ事を誓った『約束』にも負けを認めた事にも繋がらなかった。

訳が解らず、如何いう事なのか聞いてみたが。

「さあな。実際俺も良く解らねえんだ。嫌味で言ってる訳でもなさそうだからな。」

返って来た答えは、疑問を深める物だった。

「変じゃのー？新一の性格からして、負けを認めるなんて余程の事が無ければせんと思うんじゃないが？」

新一が生まれた時から知っている博士は首を捻る。

良く知っているからこそ、この問題は解らない。

「工藤の言った意味は解らねえが、ただ奴の向上心は俺も認めてるぜ？何処までも上を目指す姿勢は大したもんだ。俺から話せるのは、これで全部だな。後は奴に直接聞いてみる。」

「そうね…。学校に行った時にでも聞いてみるわ。」

当事者の隼人に聞いても骨組が解っただけで、真相に辿り着くにはコナンに聞くしかないようだ。

そう結論づいた事でこの話題は一先ず終わった。

その後は中断されていた食事を再開させ、楽しい時間が過ぎていったのであった。

そして週明けの月曜日。

哀は下校時に隣を歩いているコナンに、あの質問をする為に声を掛

けた。

「ねえ、工藤君。貴方、三井君に負けを認めた事が有るって言うってたけど、実際何で負けたの？」

「…如何したんだよイキナリ？」

声を掛けられたコナンは何故そんな事を聞くんだと言わんばかりに怪訝な顔をしている。

「この間、三井君にも聞いたのよ。でも良く解らなかったわ。だから後は貴方に聞くしか無いって訳。」

この話題を出した理由を哀は大雑把に説明した。

「三井の奴、喋っちまったのかよ？ったく、あの野郎…。」

哀の説明を聞いたコナンは一つ溜息を吐いた。そして、もしかしたら哀に脅されたのかもしれないと考えた。隼人が哀に頭が上がりないのは既に知っているから。

「別に良いじゃない？今更私達が知った所で、どうこう成る物じゃないんでしょ？」

「そりゃそーだけだよ。自分が負けた事なんて話したくねーじゃないか？」

「それなんだけど彼、貴方に勝ったなんてちっとも思って無かったわよ？如何いう事か話さないよ？気になるじゃない。」

「…わーったよ。話しゃあ良いんだろ話しゃあ。」

遂に根負けしたコナンがげんなりした表情で了承の返事をした。

「アイツから話を聞いたって事は初対面の時とかの経緯は知ってたよな？」

そして説明する上で、哀がどこまで知ってるのかを確認する。

「ええ。彼と貴方が競ったのはサッカーの試合の時と殺人事件現場の時の二つだって事は聞いたわ。」

哀の返答を聞いてコナンは一つ息を吐いてから語り出した。

「んじゃまずサッカーの試合の時だけだな。俺はこの時アイツにボロ負けしたんだ。」

「ちよっと待って。彼、貴方の腕前に感服したって言ってたわよ？」



コナンが語り出して早々に哀が待ったを掛けた。  
今のコナンのセリフだと隼人の言っていた事と辻褃が合わないからだ。

「確かにボールコントロールとかのテクニックなら俺の方が上だったけど、パワー、スピード、ジャンプ力、ボディバランスとかの純粹な運動能力はアイツの方が一つ上だったんだよ。しかも試合が終わった後に話をして知ったけど、アイツは正規のサッカー部じゃなくって臨時で助っ人として参加してたんだ。」

「なるほど？それで三井君は感服したって言うてるのに、貴方はボロ負けしたって言ったのね？」

コナンから具体的な説明を聞いて哀は納得した。  
隼人も新一もお互いに負けたと思っていたのだ。

「ああ。結構ショックだったんだぜ？俺はサッカーには自信を持っていたのに、正規の部員でもねー奴に苦戦するハメになっちまってよ。」

「でもそれだけなの？貴方が負けを認める程とは思えないけど？」  
運動能力で負けたのは解ったが、哀にはそれだけには感じられなかった。

初めてコナンからこの話題を聞いた時の感覚は、もっと大きな物を指している様だったから。

「まだ、有んだよ。次の時の殺人事件は殆んど同時に解けたからな。体だけじゃなくて頭も切れるスゲー奴だと驚かされちゃった。」

当時を思い出してかコナンは苦笑を浮かべる。  
それを聞いていた哀が。

「？驚いたとしても引き分けじゃない？」  
と首を傾げるが、コナンの話はまだ続きが有るようでジト目で制された。

「最後まで聞けよ？俺が負けを認めた最大の要因は、アイツがそれだけの実力を持っていながら、過信したり自慢しなかった事なんだよ。少しくらいしても可笑しくねーのにな。」

自分の事ではないのに何処となく誇らしげにコナンは語った。

誇らしげに語れる相手だからこそ負けを認めたと言えるのだろう。

「へえ？器で負けちゃったのね？」

しかし哀からの感想はグサリと来るものだった。

加えて嘲笑まで浮かべられている。

「ほっとけ。それから、『負けを認めた事がある』ってだけで『負けを認めてる』訳じゃねーからな？」

コナンは誤解されない様に、ずっと負けている訳ではないと説明したのだが。

「はいはい。貴方も成長したのね？」

哀に簡単に流されてしまった。

「灰原テメー…。」

悔しさの余りコナンは拳を握り締めて哀を睨みつけたが、残念ながら効果は無かったようだ。

「それで？結局『約束』は果たせたの？」

一通りの説明を受けて『約束』の内容も、コナンが隼人に負けを認めた理由も解ったので、結局どうなったのか哀は尋ねてみた。

「そんな甘い相手じゃねーのは、オメーが一番知ってるだろ？」

「…何で私が一番知ってるのよ？」

コナンから返って来た答えにジト目を向ける。哀からすれば一番知っているのは自分では無くコナンなのだから。

「だってオメー、アイツの事良く見てんじゃねーか？観察してんだろ？」

「え!？」

しかしコナンからの予想もなかった返答に哀は驚きの声を上げてしまった。

そして過去の自分の行動を思い返してみた。コナンに指摘される程隼人の事を見ていただろうか。

「そう言えば前に母さんが、女が男を見る理由を言ってたけど、もしかして好きなのか？」

哀の心情などお構いなしにコナンは爆弾を投下した。

「バ、バカな事言ってるじゃないわよ!? 何であんな気まぐれな人を好きにならなきゃいけないのよ!？」

全力で否定するも哀の頬は少しばかり紅潮してしまっている。

「だよな? オメーが、っただけで信じられねえのに相手がアイツじゃな…。」

哀の答えにコナンはホッとした様な表情を浮かべた。

しかし、この表情は哀が隼人を好きじゃないと解った事に対してでは無い。

そんな超常現象が起きなかった事に対してなのだ。

それに感づいた哀はイラッとした。

(…悪かったわね! 私が誰を好きになろうと勝手にしょ?)

少し前まではコナンの事も好きだったのに、その時には気付かないで、隼人に対しての好意には気付きそうになったのが余計にイラつかせた。

「もうさっさと、勝てないって諦めちゃえば良いじゃない?」

イラついている為、セリフも棘を感じる物になってしまう。

「バーロー、今は互角なんだ。諦める必要なんかねーよ。つか、何か怒ってねーか?」

「気のせいよ。」

コナンが言葉の棘に気付いて尋ねてみたが、哀にたったの一言で切り捨てられてしまった。

「でも『約束』が果たされるのは、まだまだ先になりそうね?」

「そりゃ、しゃーねーだろ? アイツだって現状で満足する男じゃねーからな。ま、そんな所も認めてる一つなんだけだよ。」

「三井君もそんな事を言ってたわよ? 仲が良いのね? 貴方達。」

「冗談じゃねー! 誰がアイツなんかと!」

声を大きくして否定しているコナンを見て哀はクスッと笑った。

恐らく、隼人に同じ事を聞いても同じ行動を取るのだろう。それと思うと余計に可笑しくなってくる。

お互いに認め合っていると言うのに、お互いに仲は良くないと言いは張るのだから。

その後コナンと別れて家に帰った哀は、博士にコナンから聞いた一部始終を話し、コナンと隼人が同じ反応をするだろう事に二人して笑ったのであった。

## 新一との『約束』（後書き）

ここまでお読み頂きありがとうございます。

今回は、気になっていた方も居たかも知れない「本当の自分を失った者どうし」で新一が言っていた、隼人に負けを認めた事を明かしてみました。

ちょっと隼人が凄すぎないかと思われるかもしれませんが、サッカーは新一に勝てませんし、剣道は平次に敵わないという様に、運動能力が凄まじいだけで決してトップではありません。器用貧乏みたいな物だと思って下さい。

さて、それではまた次回もよろしくお願いします。

## 好物のために（前書き）

まだ前々話からの時間軸は繋がっています。

## 好物のために

とある土曜日。

阿笠邸ではいつも通りの一日が過ぎていた。

博士は発明品を作ったり、インターネットを楽しんだり。

哀はA P T X 4 8 6 9の解毒剤の研究をしたり、雑誌を読んだり。

隼人は博士の発明品を楽しんだり、昼寝したりと。

「それじゃ博士。行って来るわね？」

「ああ、気をつけるんじゃよ？」

だが、いつもと違う事が起きた。

哀が出掛けると言うのだ。

別に哀が出掛ける事自体が珍しい訳ではない。探偵団の仲間達と遊びに行く事だってしょっちゅうある。

しかし、今日はそんな約束は無いと哀自身が言っていた。

「あ？何処行くんだ？」

哀の外出先に興味を持った隼人は尋ねてみる。用も無く外出する人間ではない事を知っているから。

「買い物よ。丁度特売セールもやってるみたいだし。」

それに哀は簡単に答えた。特に重要な事でも無かったから。

「買い物？珍しくねえか？」

「別に。ただ今週は色々と立て込んで行きそびれちゃったのよ。」  
そう、今週は殺人事件に巻き込まれたり、雨が降ったりと買い物に行く事が出来なかったのだ。

その為、土曜日の今日にずれ込んだと言う訳だ。

「おお、そうじゃ。隼人君も一緒に行ってくれんか？そうすればワシも安心じゃし、哀君も何かと助かるじゃろ？」

博士が名案だと一つ手を打って提案した。

「いいわよ来なくて。気まぐれな人が一緒だと面倒だから。」  
しかし哀は即答で断ってしまった。

確かに隼人の性格を考えると買い物に行ってる途中で、そのままフラッと散歩に一人で行ってしまう可能性もある。

「そうか…。じゃあ行くか。買い物に少し興味も有るしな。」

隼人は哀の答えに対してどうやら天邪鬼が発動したらしい。

さっさと玄関へ歩いて行き、早くしろと言わんばかりに哀を待っている。

それに哀は溜息を吐きつつも隼人の下へと向かった。隼人と一緒に出掛ける事自体は悪くは無かったから。

そんな哀の気持ちを知ってるのかどうか解らないが、博士は笑顔で二人を見送るのであった。

二人が歩いて向かっているのは大型のデパートだった。

食料や日用雑貨ならばスーパーでも間に合うのだが、今日は特売セールを実施しているらしくデパートの方がお得なのだ。

「で？何を買いに行くんだ？晩飯の材料か？」

「それも有るけど、今日は洗濯用の洗剤も買わなきゃいけないわね。それと、折角荷物持ちが居るんだから洋服も一緒に買って行こうかしら？」

ニヤリと笑みを浮かべて哀は隼人を見上げた。

別に隼人の天邪鬼を期待して『来なくていい』と行った訳では無かった。そしてデパートが特売セールをやっているのも本当に偶然だ。運よく揃った好条件を最大限利用しようとしているだけなのだ。

「…おい、荷物持ちって俺か？」

「そうよ。決まってるじゃない？」

「まさかお前、それを狙って俺に来るなって言ったんじゃないやねえだろうな？」

「違うわよ。本気で来なくていいと思ったからそう言ったのよ。」



哀の答えを聞いて隼人は自分がした質問の内容に後悔した。

『そうだ』と言われても腹が立つし、『違う』と言われてもやるせなくなる。

どう答えられてもショックを受ける結果になってしまうのだから。

「嫌なら今から帰っても良いわよ？もとより私一人で来るつもりだったんだし。」

隼人の気持ちを見透かしてるがごとく、哀が追い打ちを掛ける。

（コイツ。マジで性格悪いな。）

哀はここで隼人が帰ったりしない事を知っていながら言ってるのだ。

「：解った。荷物持ちだろうと何だろうとやってやる。代わりに晩飯食わせろ。」

溜息を吐きつつも隼人は了承の返事をした。と言うよりもするしかなかった。

やはり、自分で買い物に興味があると行って出て来たのに、このまま帰るのは如何しても許せなかったから。

晩御飯の条件はせめてもの悪あがきだ。

「ええ、良いわよ。」

隼人とは対照的に哀は涼しい顔で了承した。

悪あがきだと隼人は自分で解っていながら、その哀の反応が面白くなかった。

ならば次に考えるのは、その悪あがきを自分が一番楽しめる物にするのが良いだろう。

「で？晩飯は何にするんだ？」

「特に決まって無いけど、食べたい物有る？博士にも出せる物であれば構わないわよ？」

哀の返答に今度は隼人がニヤリと笑みを浮かべた。

自分の好物にして貰おうと思ったのだ。

「なら、うどんだ。俺の一番の好物だからな。」

それならば博士も問題無く食べられるだろう。哀から出された条件もクリアしているので晩御飯がうどんに成る確率が高い。

その事に隼人は内心喜んだ。

しかし哀の反応は了承の雰囲気ではなかった。

「は？」

たった一言だけ呟いて、隼人を怪訝に見つめる。

「どうした？別に変な料理でもねえ上、博士も食える物の筈だぜ？」

哀の様子に隼人も怪訝な表情をしてしまう。別に可笑しいことは言  
って無い筈だ。自分の好物を晩御飯に作ってくれと言っただけなの  
だから。

「貴方、正気？猫舌なんでしょ？」

哀が怪訝な表情をした理由は食べ物自体には無かった。それを隼  
人が好物としている事が理由だったのだ。

猫舌の人間が熱い物を、しかも麺類を好物にするだろうか。

熱いままだと食べられず、冷めるまで待つと麺が延びてしまうとい  
う猫舌とは相性最悪の物を。

「別に良いだろ？好きな物は好きなんだから。」

「そうだけど、本当に変わった人ね？」

「うるせえ。で？晩飯はどうなるんだ？」

「ちゃんと、うどんにしてあげるわよ。だから、さっき自分が言っ  
た事忘れないでね？」

「…解ってる。」

隼人も文句を言うつもりは無い。哀が約束を破ったりしない事は良  
く知っている。その哀が晩御飯を好物にしてくれると約束してくれ  
たのだから。

やがて歩き続けている間に二人は目的のデパートへと到着したので  
あった。

「さて、何処から回るんだ？」

特売セールをやってるだけあってデパート内は人で溢れていた。あらかじめ回る順序を決めておかねば、余計に疲れてしまうのは確実だろう。

そう思った隼人は哀に尋ねた。

買物に関しては哀の方が詳しいだろうし、自分は何を買えばいいのか知らされていけないのだから。

「そうね……。折角、特売セールをやってるんだから食材や洗剤が売り切れる前に買っちゃいましょ？洋服関連は、その後でゆっくりと見て回れば良いわ。」

それに哀が的確に答えた。経験から来るものだろうか。

「解ったが、買った食材が傷むほどノンビリはしてられねえぜ？」

「大丈夫よ。お肉やお魚みたいな生ものを買う予定は無いから。」

哀は隼人の危惧に対しても問題が無い事を伝える。

しかし隼人は哀の答えで新たな疑問が浮かんた。

「ん？うどんに肉入れねえのか？」

「ええ。代わりにキノコ類や山菜を沢山入れようと思ってるわ。貴方には物足りないかもしれないけど博士の事を考えると仕方ないわね。」

「いや、そういううどんは食った事がねえから、むしろ楽しみだ。晩御飯の楽しみが隼人はまた一つ増えた。只でさえ好物を作ってくれるだけで嬉しいのに、それが自分の知らない形になるからだ。

隼人は自分の知らない物が出て来る事に何の不安も無かった。

哀が作るのだから美味いに決まっていると、哀の料理の腕に全幅の信頼を寄せているのだ。

「そう？ま、貴方が良いなら良いんだけど。それじゃ行きましょ？」話が纏まった所で二人は食料品売り場へと足を向けた。

到着した食料品売り場もやはり人で賑わっている。

その中へと二人は臆することなく入って行った。

当然のごとく隼人が買物かごを持ち、各所を回っていく間に食材

が次々と中へと入れられていく。

重さを増していく買い物かごを見て隼人は首を傾げた。

「おい。お前いつもこんな買い物で一人だしてんのか？大丈夫なのか？」

荷物の量は隼人にしてみれば大した事無いが、哀が持つとなったら厳しいだろう。

それを今まで、やって来たのだろうかと思ったのだ。

「馬鹿ね。今日は貴方が居るから特別よ。私一人の時は、ちゃんと自分で持てる分だけにしてるもの。」

どうやら、既に荷物持ちは始まっているようだ。

まだ食料品売り場、しかも途中だと言うのに荷物の重みを感じている。帰る頃にはどれだけの荷物を持つハメに成るのか考えると、隼人は乾いた笑いしか出て来なかった。

「おい、程々にしとけ。いくら俺と言っても限界は有るぜ？」

買い物かごの中が溢れそうになった所で隼人が待ったを掛ける。このままでは一向に止まりそうに無かったから。

「そうね、確かに限界は有るわね。冷蔵庫の。」

しかし、哀の返答は冷たいともとれる物だった。

「…俺の心配をしろ。」

「心配して欲しいなら、もっと辛そうな顔しなさい？かごを持ってる手を最初の時から一度も変えて無いじゃない。まだ余裕なんですよ？」

「…良く見てやがる。」

隼人は一つ溜息を吐いてから苦笑いを浮かべた。確かに現状の重さでは左腕一本で充分事足りる物だったが、まさか哀に見破られているとは思わなかったのだ。

しっかりと気遣って貰えてる事に内心嬉しくなったが。

「取りあえず食材は、あとお米五キロとお砂糖一キロで充分ね。次は洗濯用の洗剤を沢山買うからもう一つかごを持って来なさい？」

すぐにその気も失せて肩を落とすのであった。

食材と洗剤を買い終えた隼人と哀は、洋服売り場へとやって来ていた。

買った荷物は当然隼人が全て持っている。

左手に大量の食材が入った袋、右手に大量の洗濯用洗剤が入った袋を持ち、お米は左わきで抱えてる状態だ。

普通ならばこれだけの荷物が有ればカートを使うのだが、身動きがとり難くなるのが嫌なのか、はたまた馬鹿なのか、カートを使う事は無かった。

「おい。まだ決まらねえのか？」

洋服売り場に来て早三十分。それでも一向に哀の物色は終わりそうに無かった。

普段の哀は、これほど洋服を選ぶのに時間は掛らない。

ただ今回は、食材等を買う時にレジで一つ問題が起きていた。

それはレジ打ちのおばちゃんか隼人と哀を兄妹だと勘違いしてしまった事だ。

隼人は苦笑しながらも否定して事実を話したのだが、哀は完全に御立腹になってしまった。

その怒りを晴らす為に、こうして洋服を片っ端から物色しているのだ。

（何で私が、あんな天邪鬼な人の妹に成らなきゃいけないのよ！私の方が年上なのよ！？）

哀は決して口にも表情にも怒りを出さなかったが、目にはしっかりと出てしまっていた。

その為先程から催促している隼人も目だけは合わせない様に努めているのだ。

目が合ったら恐らく冷や汗が止まらなくなってしまうだろうから。しかし、隼人の努力も徒労に終わる時が来てしまった。

「ねえ、さっきから催促してるけど私の目を見ながら言えないの？」隼人が目を逸らしている事が哀にバレたのだ。

「あ？んな細けえ事は如何でも良いから早くしろ。」

「私の目を見なさいよ？」

隼人が誤魔化そうとしても哀は許さなかった。

「…見なさいって言ってるのよ。」

更に追い打ちまで掛けて来た。声の調子から不機嫌だと言うのがまざまざと伝わって来る。

進退窮まった隼人は意を決して哀と目を合わせた。

そしてその瞬間、一気に血の気が失せて行き、体に力が入らなくなった。わきに抱えていたお米の袋がドサツと床に落ちる。

案の定冷や汗が止まらなくなってしまった。

それを見た哀は一つ溜息を吐いた。怒りは、なりを潜め代わりに呆れが表情に出ている。

「何やってるのよ？袋が破れたら大変じゃない？」

隼人が落としてしまったお米の袋を心配げに見やり、注意した。幸い破けてはおらず、問題無い様だ。

「あ、ああ、悪い。」

哀の目から怒りが消えた事で、隼人は冷や汗も止まり力も入るようになってきた。

一応謝ってから、落ちている袋を再び左わきに抱える。このままなら平常時に戻るのもすぐだろう。

「ちょっと待ってなさい？今買って来ちゃうから。」

隼人の様子を見届けてから哀は洋服を二着持ってレジへと向かって行った。

その後ろ姿を見送った隼人は、漸くこの長い買い物が終わるのだと思ひホッと一息吐くのであった。

デパートを出て阿笠邸への帰り道。

結局荷物は洋服だけ哀が持ち、それ以外は全て隼人が持っていた。ビニール袋が手に食い込んで痛みを訴えているが、美味しい晩御飯を食べる為に文句を言わずに持ち続けているようだ。

「おい、そう言えば工藤から話は聞いたのか？」

歩いてる中、隼人が突然哀に疑問を投げかけた。

「話って何の？」

「『約束』の事だ。」

哀が聞き返すと、隼人は簡潔に答えた。

それだけで哀にはしっかりと伝わった様だ。

「ああ、それなら聞いたわ。気になるの？」

「気にならねえと言ったらウソになるな。」

「別に知らなくても良いじゃない？ 貴方が勝ってた事に違いは無いんだから。」

「いや、前にも言ったが俺は勝ったつもりなどねえんだ。せめて何を指してるのかは知りてえ。」

「自分で直接聞けば良いじゃない？」

「…俺に話すと思うか？」

「…思わないわね。」

「だからお前に聞くしかねえんだ。」

コナンの性格を考えると隼人の言っている事は間違っていないだろう。

哀は溜息を一つ吐いて了承した。

「解ったわ…。話してあげるわよ。」

「ああ、頼むぜ。」

「工藤君が言ってたのは貴方の運動能力の事よ。テクニック以外のほぼ全てで負けたって言ってたわ。」

「なるほど？ま、この程度に成るのですら結構苦労したからな。簡単には負けられねえ。」

哀の説明を聞いて隼人は合点がいった。確かに『サッカーの勝負』では負けたが、『運動能力』では負けてはいない。

「それから、探偵を指摘してる彼が、そうじゃない貴方と推理力も互角だったから悔しかったそうよ。」

「ふーん？それで全部か？」

「ええ、これで全部よ。」

哀は新一が負けを認めた最大の要因の部分は隠しておく事にした。別に話しても良かったが、何となく黙っていた方が良い様な気がしたのだ。

しかし隼人は、そんな哀の心情を知ってか知らずか、納得したのは半分だけだった。

（違えな。プライドの高え奴の事だ。まだ何か有る筈……。哀にも話してねえのか？それとも哀が黙ってんのか？：やめとくか。下手に疑って哀の機嫌が悪くなったら、晩飯が無くなるかもしれねえからな。）

「ありがとな。お陰でスッキリしたぜ。」

取りあえず隼人は、運動能力だけでも新一に勝っていた事が解っただけで充分だった。

いずれ新一が『約束』を果たして何かで自分に勝ったとしても、その次にまた新一を超えてやれば良いだけの事。初めから、超えられたら超え返すつもりだったから。

今は何よりも晩御飯が大事だった。

「そ、良かったわね。」

哀も今の説明だけで隼人が完全に納得しないだろう事は予想出来ていた。

それでも隼人が礼を述べて、追及してこなかったので適当に返事をして話題を終わらす事にしたようだ。



デパートから阿笠邸までの三分の二ほどを歩き過ぎた頃、サイレンを鳴らした消防車三台と擦れ違った。

「火事でも有ったのかしら？」

「みてえだな……」

哀と隼人は消防車を見送りながら感想を述べ合った。

消防車が三台という事は、結構な規模の火災だろう。

「もしかしたら工藤君が巻き込まれてるかもしれないわね？」

哀は冗談で言ってるのだろうが、冗談に聞こえない辺りがコナンだ。あの恐るべき事件吸引体質は如何にかならないのだろうか。

「……………」

一方の隼人は哀の冗談が聞こえなかったのか消防車が走り去った方向を見続けていた。

「気になるの？」

「火事か……」

その様子に気付いた哀が呼びかけても振り向く事も無く、隼人は呟いただけ。その呟きも哀の質問に対してでは無い様だ。

「ちょっと？」

「ん？ああ悪い。何だ？」

無視された事で少しムツとしながら再度哀が呼びかけると、漸く隼人は振り向いた。

「興味を惹かれて行きたいみたいだけど、ちゃんと荷物を運んでからにしないよ？」

ジト目で哀が忠告する。隼人の性格からして、興味を惹かれた物には後先考えず飛んで行ってしまいう事が解っていたから。

「心配するな。荷物は運んでやるし、行きもしねえから。」

「あら、気になるんじゃないの？」

「気にはなるが、気が乗らねえ。」

「……本当に気まぐれね、貴方。」

「うるせえ。さっさと帰るぞ。」

一人で先に歩いて行ってしまいう隼人の後ろ姿を見て哀はクスツと笑

みを浮かべる。

そして置いて行かれない様に駆け足で追いかけるのであった。

やがて阿笠邸に到着するなり隼人は荷物を置き、疲れたのかソファ  
ーで昼寝を始めてしまった。

そして晩御飯の時間になったので哀に起こされ、食卓に出て来た料理を見て目を輝かせて喜んだ。その喜びぶりは哀も呆れるほどで、  
そこまで好きなのだろうかと首を捻っていた。

荷物持ちに耐え、哀の怒りの目にも立ち向かい、待ちに待った御馳走に隼人は二回もお代りをしたのであった。

## 好物のために（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

今回は、哀が前話の結果を隼人に話すのと、隼人が好物のために頑張るのを、一緒に買い物に行くという内容で書いてみました。

日常生活では隼人は哀に絶対に頭が上がりません。

今回でも有るように眼で殺されます。

それでも哀は隼人に好意を持っているのだが、鈍感な隼人は気づかないといった具合です。

肝心の隼人の気持は「大阪上陸」を読んで下さった方なら判るかと思えます。

長々とすみませんでした。

それでは、次回もよろしく願います。

## 隼人の過去（前書き）

今回にて「哀の選択」からの時間軸の繋がりは終わりです。

## 隼人の過去

とある曇り空の土曜日。

その雲は今にでも雨を降らしそうなほどに真黒であった。

阿笠邸で普段通り研究に励んでいる哀は、珍しくも朝からイライラしていた。

理由は、彼女が作ってしまった毒薬、APTX4869の解毒剤の研究が一向に進まない事に有った。他にも研究に集中するあまり睡眠時間が短くなっている事や、殺人事件に遭遇したり等、ストレスが溜まってしまっていたのだ。

哀自身もイライラしている事に気付いて、一息つこうとリビングでコーヒーを飲む事にした。

やって来たりリビングでは博士とコナンと隼人が談笑している。

話の内容は、新しいコナンの探偵アイテムはどういう物にするかであった。

哀は会話に参加するつもりが無いので、そのままキッチンへと向かう。

そんなキッチンへと入っていく哀の姿を目敏く見つけたコナンは、ついでに自分のコーヒーも淹れる様に頼んだ。それに続いて博士と隼人も同じように頼んだ。

哀は了承したものの、パシリにされているみたいで少しイライラが増してしまった。

やがてコーヒーを淹れ終わり、各々へと配って漸く一息つけると思った時。

「あっつ!!」

隼人の大声が響いた。

猫舌の彼にはコーヒーが熱すぎたようだ。

「ハハハ、何だよ三井。オメーこん位でもダメなのかよ?」

「うるせえ。おい、哀。このコーヒー熱すぎんぞ?」

コナンに笑われてムツとした隼人は、コーヒーを淹れた哀に抗議した。

「あ、そ。」

しかし、哀は冷たく返事を返すだけ。

隼人は違和感を感じたが、普段通りに会話を続けようとする。

「お前、俺が猫舌なの知ってんだろ？まさか、わざと熱くしたんじゃないねえだろうな？」

「文句が有るなら自分でやれば良いじゃない。出来もしない癖にイチモン付けないで。」

哀の機嫌が悪い事に隼人のみならず博士もコナンも気付いた。

「おい、随分棘のある言い方するじゃねえか？どうしたんだ？」

「別に。貴方に言っても解らない事よ。」

「オメー疲れてんじゃないのか？ちゃんと休んでんのかよ？」

「疲れてなんか無いわ。貴方と違って無駄に事件を追いかけてないもの。」

「哀君。夜はちゃんと寝ておるのか？随分と遅くまで研究しているようじゃが？」

「心配いらないわ。自分の体調管理ぐらい自分で出来るから。」

各々が心配して声を掛けるが、哀は全て冷たく返してしまう。

哀としては、今は放っておいて欲しいと思っていた。このままではイライラが爆発して、此処に居る人達に八つ当たりしてしまいそうだから。

しかし、そんな哀の心情とは裏腹に、一際鋭い目をした隼人は核心に触れてしまう。

「おい、お前解毒剤の研究が上手く行かねえでイラついてんじゃないか？」

「!？」

凶星を突かれた哀は、今まで我慢していたものが一気にあふれた。

「そうよ！毎日毎日必死になってやってるのに、一向に進まないのよ！」

「お、おい灰原。落ちつけよ。」

コナンの制止の声は哀の耳には届かないようだ。

「良いわよね貴方は！一日中ブラブラしてて、好きな時に好きな事が出来て！」

「ど、どうしたんじゃ哀君？」

博士は哀の剣幕に驚いてオロオロしてしまふ。

「私だってそんな風に生活したいわよ！」

「なら、すりゃ良いじゃねえか？お前は頑張り過ぎなんだ。」

隼人は逃げる事なく正面から立ち向かった。自分が起爆剤を放った自覚も有ったから。

「いい加減な事言わないで！そんな事してたらいつまで経っても解毒剤なんて出来ないわよ！」

「何を焦ってんだ？薬のデータが手に入ってからでも充分じゃねえか？」

「どうしてそんなにお気楽で居られるの！？貴方には私が一体どんな気持ちで研究しているか解らないでしょうね！？」

「おい、落ち着いて俺の話を……」

「そうよ！帰る家が当たり前に有って、両親が当たり前に居て、何の苦労もしないで呑気にのうのうと今まで生きて来た貴方には、私の気持ちなんて解る筈無いわよ！」

「おい、哀……」

「もう二度と私の前に現われないで！貴方を見るとイライラするのよ……！」

哀はそこまで一気に吐き出すと涙を流しながら地下の研究室に駆け込んで行ってしまった。

「おい、灰原！」

「哀君！」

コナンと博士が後を追って行くが、部屋の扉に鍵を掛けており、いくら呼びかけても返事は無かった。

仕方なく二人はリビングに戻ったが、そこには隼人が茫然とした様

子でソファ―に座っていた。

やがてフツと自嘲の笑みを浮かべて隼人は話し始めた。

「博士、悪いが新作を見る事は出来ねえようだ…。」

「隼人君？何を言っておるんじゃない？」

「どうやら俺が彼女のイライラの原因みてえだからな…。」

「やめろよ。『彼女』なんて余所余所しい言い方すんなよ？」

「いや、それで十分だ…。もう、此処には来ねえ…。だが、助けが必要な時は連絡しろ。すぐに駆けつけてやる。」

そう言うと隼人はソファ―から立ち上がり、誰とも目を合わせない様にしてリビングから出ていこうとする。

「待てよ三井。灰原だって本気で言った訳じゃ…。待てって、みつ…。」

引きとめようとしたコナンは、隼人の表情を見て言葉が続かなくなってしまう。

それが怒りや悲しみをないませにした様なものだったから。

「じゃあな…。連絡が無い事を祈ってるぜ…。」

そのまま隼人は振り返らずに玄関から出ていった。

外の天気は皆の気持ちを代弁するかのようポツポツと雨を降らせ、それはやがてザーツと音がする豪雨へと変わっていったのであった。

翌日、その日は朝からコナンは阿笠邸を訪ねていた。

昨日の問題をどうするか、あれから博士と二人で相談したのだ。

そして今日はそれを実行する為にこうしてやって来ている。

「あ、工藤君…。」

寝室から出て来た哀がコナンに気付いて声を掛けたが、その表情は暗く、落ち込んでいるようだった。

博士が言うには、昨日の夕飯は用意してくれたが、自分は何も食べ



ずに部屋に戻ってしまったらしい。

「よう。大丈夫か？」

哀を元氣付けようとコナンは努めて明るく答えた。

「ええ……。昨日はごめんなさい。取りみだしてしまつて。」

「気にすんなよ。俺はただ見てただけなんだから。」

「ありがとう……。三井君は……来てないのね……？」

「ああ、まだ来てねーみてーだな。」

「私が、あんな事を言ったから……。」

「大丈夫だよ。謝ろうと思つてんだろ？呼べばすぐ来るからよ。」

「そうかしら……。」

「心配すんなつて。それより出掛けるから準備しろよ？」

「出掛けるって何処に？」

「謝る前に知つとかねーか？三井の過去。」

そう、昨日博士とコナンの二人で考えて出したのが、隼人の過去を知ることだった。

コナンは如何しても隼人が去り際に見せた表情が気になった。何故あんな顔をしたのかと。

そこで気付いた。自分達は隼人の事を何も知らない事に。

あの表情の原因は過去に何か有ったんじゃないかと推理したのだ。

それからは博士が、隼人の通っていた杯戸中学校に連絡を取り自宅の住所を調べ、その三井宅へ伺う事を伝えてくれた。

そして今日これから三井宅へと向かうのだ。

博士のビートルに乗って三井宅へと向かった博士、コナン、哀の三人。

杯戸町にある三井宅に到着した時は三人とも驚いた。  
そこは豪邸だったのだから。

取りあえず博士を先頭にして玄関へと伺うと、中から使用人が出てきて事情を話すなり、応接室へと案内された。

暫く待っていると、家主と思われる裕福の良い男性がやって来た。

「お待たせしました。私がこの家の当主である三井虎次郎です。」

虎次郎は品のある笑顔を浮かべながら一礼をする。

「初めまして。ワシは発明家の阿笠博士、それと親戚の子の江戸川コナン君と灰原哀君じゃ。」

博士の紹介に合わせてコナンと哀がペコリと頭を下げた。

「おお、貴方が隼人の記憶を戻してくれた阿笠さんですか。どうぞお掛け下さい。」

虎次郎は椅子に座るように勧めて、自分も腰かけてから話を切り出した。

「それで今日はどのようなご用件で？」

「実は、虎次郎さんの息子さんでいらっしゃる隼人君に、ワシの研究の手伝いをして貰っているのですが、過去を明かしてくれませんか。ワシやこの子達も隼人君ともっと仲良くなりたいと思ってなんじやが、何か嫌な思い出でも？」

「そうですか……。あの子が……。」

博士の話を黙って聞いていた虎次郎は、目を閉じて深く考えているようだった。

「……解りました。お話しましょう。ただ、あまり良い話ではない事だけご理解ください。」

目を開けた虎次郎の眼力が鋭くなったのを感じて、博士たちは唾を飲み込み一つ頷いた。

それを確認した虎次郎は静かに語り出した。

「初めに、あの子は私の子供では有りません。私の兄、龍太郎とその妻、恵美さんの間に生まれた子なのです。自分の兄をこういうのも変ですが、龍太郎は何でもそつ無くこなせる非常に優れた人物でした。そして妻の恵美さんも大変度量が大きく、何より優しい方でした。隼人は頭脳や運動神経等の肉体面は父譲り、度胸等の精神面

は母譲りと、しっかりと両親の良い所を受け継いで生まれてきました。また、一つ下に隼人と同じくらい優秀な弟の拓馬が生まれ、家族四人で幸せに暮らしていました。あの夏の日が来るまでは。」

虎次郎が話を区切った所で丁度お手伝いさんがお茶を運んできた。全員の下にお茶が配られ、お手伝いさんが退出したのを見届けてからコナンは続きを促す。

「それで、何が起きたんですか？」

それに対して、お茶を一口飲んでから一つ息を吐いて、虎次郎は再び語り出した。

「火事が起きたんです。」

（火事：！）

虎次郎のセリフの中の単語を聞いて、哀の脳裏に以前消防車が走り去っていくのを隼人が見つめていた光景が浮かんだ。

「かつて兄達が暮らしていた家は、此処ほど大きくは有りませんでした。それが全焼するほどの大火事が起きたんです。隼人が五歳になったばかりの頃でした。その火事で隼人と拓馬は、兄と恵美さんの手によって窓から外へ放り出され一命を取り留めましたが、逃げ遅れた兄と恵美さんは亡くなりました。」

「そんな事が……。幼い頃に辛い経験をしてたんですな……。」  
話を聞いていた博士たちは、驚いていた。普段の隼人からは、そんな事を経験した様な気配は全く感じられ無かったから。

「いえ……。隼人達の本当に辛い経験は、これからお話する所からです。火が治まった後に出火原因を調べたりする為に警察等も現場を検証していました。そこに一人の無能な探偵が来ていたのです。その日、隼人と拓馬は庭で花火をして遊んでいました。無能な探偵は、その後始末に問題が有ったのではと疑って、いや決めつけておりました。」

「それって……。」

哀は嫌な予感がして外れて欲しいと心から願った。

しかしそれは叶う事は無かった。

「そうです。その探偵は事も有ろうか、両親を失って茫然として子供達に直接こう言ったのです。『君達の所為でお父さん達は死んじゃったんだよ。』と。」

「何と!?!」

博士は驚きのあまり大声を出してしまう。コナンは苦虫を噛み潰したような顔をしており、哀は予感が当たってしまい悲しげに眼を伏せた。

話している虎次郎も当時を思い出して悔しいのか手をきつく握りしめている。

「結局、出火原因は放火だったのですが、隼人達が負った心の傷は測り知れません。生活の場は私が二人を引き取った事で、この家で暮らし問題無かったのですが、隼人は変わってしまいました。一日の中、睡眠や食事といった最低限の事以外は全て勉強と肉体の鍛錬に回すようになったのです。恐らく、夢や希望や憧れの象徴だった自分の父に一日も早く追いつこうと必死になったのでしょう。私や拓馬と一緒に遊ぶよう誘っても断られ続けました。そんな生活を中学二年の誕生日まで、実に九年間も続けたのです。現在の隼人の能力はこの為です。当然、友人は一人も出来ませんでした。それでも、中学三年になると徐々に他人と交流を取るようになり、卒業する頃には友人も沢山出来ていました。そして高校はアメリカの学校に行き、一年で卒業。帰国して一人暮らしを始め、暫く経って記憶喪失に。後は皆さんの知っての通りです。」

一同に深い沈黙が訪れた。話の内容が、余りにも重かった為誰も口を開く事が出来なかったのだ。

「…まさか、隼人君の過去にそんな事が有ったとは…。聞いてはいかんかったかも知れんのう…。」

博士が重々しい口調でなんとか感想を述べた。

「いえ、隼人の記憶を戻してくださった阿笠さんには知る権利があります。私達も本当に感謝しているのです。隼人が記憶を失ったの

は、透さんの事件が起きた直後でしたから。」

「透さんって誰なの？」

今まで出て来なかった人物の名前にコナンが反応する。

「ああ、私の妻の兄だね。隼人が記憶を失う三日ほど前に変死しているのが見つかったんだよ。」

「変死ですか？」

「ええ。なんでも、外傷は全くなく、毒を盛られた痕跡も無く、持病の類も無かったので死因が解らないそうです。」

「それは、奇妙ですね？」

博士と虎次郎が話しているのを聞いていてコナンと哀は、背筋が凍りつくようだった。

二人の脳裏に浮かんだのは、最も憎むべき毒薬、それであって最も手に入りたい毒薬のAPTX4869だった。

その性質上、体内から毒物が検出されない究極の毒薬。完全犯罪を容易に成し遂げられる恐るべき凶器だ。

しかし、今ここでそれを言う訳にはいかない。平穩に日々を過ごしている人を巻き込む訳にはいかないのだ。

「ねえ、その事は隼人兄ちゃん知ってるの？」

「え？ああ、勿論だよ。それなりに交友も有ったからね。隼人は『殺されたかもな…』って言って疑ってたけどね。」

「そう…。解ったよ、ありがとう。」

それ以降コナンと哀は一言も喋らずに固く口を閉ざしたのであった。

三井邸を出て帰りのビートルの中。

コナンと哀は早速さっきの話を始めていた。

「灰原。さっきの透さんの変死、どう思う？」

「貴方が思ってるのと一緒に。間違はなく組織の仕業だわ。」

「やっぱそうか。俺と同じで、見ちゃいけないー物を見ちゃったんだなきっと。」

「ええ。でも何で三井君はこの事を…？」

「…さあな。アイツを呼んで直接聞いてみんだな？」

「…そうね。」

コナンは何となく隼人がこの事を隠していた理由が解った。しかし、それを伝えるのは隼人自身の仕事だと思い、黙っていたのであった。

阿笠邸の門の前で隼人は立ち往生していた。

（連絡がねえのを祈ると言った筈だが、次の日にしてくるとは何考えてやる。）

隼人は一つ溜息を吐くと意を決して門を開け、玄関前まで進みチャイムのボタンを押したのであった。

暫く待っていると中からコナンが現われ、そのままりビングまで連れて来られた。

リビング内では既に博士と哀が並んでソファーに座っており、テーブルの上にはコーヒーが入れられたカップが四つ置かれていた。

『カップの有る所に座れ』と言われていたようだったので、仕方なく博士に向かい合う席に座ろうとしたが、先にコナンが座ってしまったので必然的に哀の正面に座らざるを得なくなってしまった。

全員が座っても誰も話を始めようとする気配が感じられない。

「おい、用がねえなら帰るぞ？」

哀の正面という非常に気まずい場所に長時間居たくない隼人は、そう言って帰ろうとする。

「待てよ、三井。もう少し待ってやれよ。」

コナンの隼人への制止の声は、哀の背中を押す効果も有ったようだ。

「三井君…。昨日はごめんなさい…。研究が上手くいかないのを八つ当たりして…。」

やがて哀が呟く様な小さい声で、俯きながら謝った。

「あ？何でお前が謝る？謝られる事をされた記憶はねえが？」

「いけないと思ったけど、貴方の過去に何が有ったか聞いてきたわ…。」

「…何だと？」

哀の口から出て来た単語を聞いて、隼人の目が若干鋭くなった。

「あ、それは俺と博士が勝手に進めた事だから灰原は悪くねーぜ。」  
空気が変わりそうだったのでコナンがすかさずフォローを入れる。

「…誰に、何処まで聞いた？」

「貴方の叔父の虎次郎さんから全部…。幼少の時に有った火事から、どんな生活をして今の貴方になったかまで、何もかも全部…。」

「そうか…。やれやれ、叔父さんのお喋りにも困ったもんだ。」

隼人は肩を竦めて溜息を吐いた。過去の事を人に、特に哀には知られたくなかったのだ。

「本当にごめんなさい…。貴方の事を何も知らないのに酷いことばかり言つて…。」

「だから、謝る必要はねえ。謝るのは俺の方だ。俺の行動がお前のストレスになってたんだろ？ 済まなかったな。だが安心しろ。お前の前にはもう現われねえから。」

「違うわ。本当はそんな事思つて無い。貴方には、これから此処に来てほしい。と言うより来なさい。気になるから。」

意を決した哀は顔を上げて隼人の目をしっかりと見つめた。

「良いのか？ 俺はお前をイラつかせる男だぜ？」

「別に大した事ないわ。」

「…俺は、お前を泣かせた男だぜ？」

隼人には『哀を泣かせた』という罪の意識が有った。自分自身を許せない圧倒的な罪が。

「泣かされた数なら工藤君の方が多いから安心しなさい。」

しかし哀はそれにも微笑を浮かべながら答えた。

「灰原…！」

そんな哀のセリフにコナンは素早く突っ込みを入れた。自分が随分と悪者にされている気がしたからだ。

「そうか……。ありがとな……。それなら、改めてよろしくな、志保。」  
「え？」

突然本名で呼ばれた事に驚いて哀は目を丸くする。

隼人としては、自分の罪を許してくれた人を今までと同じ様には呼べなかった。

敬意を評して本名で呼ぶべきだと思ったのだ。

「改めてよろしくと言ったんだ。やっぱダメなのか？」

「馬鹿ね。そんな事ないわよ。こちらこそよろしく三井君。」

少し不安そうな顔をした隼人にクスツと笑って哀は快く返事を返すのであった。

（本当にありがとな志保、こんな俺を許してくれて……。こんな俺だが、お前の事を好きでいて良いか……？）

隼人は心の中でもう一度深く感謝した。加えて、問いを投げかける。当然口には出していないので答えが返って来る事は無いのだが、それでも構わないようだ。

そしてあくまで心の中として気持ちを落ち着け、外見上は普段通り過ごす事にした。

「上手く行った様じゃな新一。」

「ああ。ったく、手の掛る奴等だよ。」

上手く仲直りさせる事が出来た事にコナンと博士はホッと胸を撫で下ろした。

思えば、昨日隼人が出て行ってから色々大変だったのだ。

「そうだわ、三井君。一つ聞きたい事が有るんだけど？」

仲直りした所で、哀は如何しても聞いておきたい事が有った。

「あ？何だ？」

「これも虎次郎さんから聞いたんだけど、貴方透さんの変死に疑問を持ってたんでしょ？記憶を取り戻した時に組織の犯行だって気付いた筈なのに、何でその事を言わなかったの？」

哀の質問を受けて隼人はハアーツと溜息を吐いた。

「志保……。本当にイマイチ解ってねえなお前。言える訳ねえだろ？」



俺が記憶喪失になった程度で自分の所為だって責任感じて落ち込  
じまう奴に、『お前の作った毒薬で俺の親戚が殺された』なんて言  
えると思うか？ そんな事したらシヨックのあまり自殺しちまうと思  
ったぜ。それに、俺自身言いたくなかった。そんな事を言ったら、  
あの探偵と同類になっちまうからな。」

哀は虎次郎から聞いた隼人の過去話を思い出した。そこに出て来た探偵によって心に深い傷を負った事を。

そして嬉しい事はもう一つ。

「おお、そうじゃな。新一、君も一緒に知恵を貸してくれ。」

「何を言っておる。誰の為に発明しようとしとると思っ

「良くぞ聞いてくれた。実は文房具をベースにして作ろうと思って  
いるんじゃない。」

避けた方が良いと思うぜ？ 筆箱から出す事を考えると、いざって時使えねえから。」

「所が違うのお？」

三人は仲良くワイワイと盛り上がり始めた。

「灰原俺も。アツアツで。」

「それじゃあ哀君。ワシもそれで。」

「はいはい、解ったわ。アツアツ三杯ね。」

「おい、ちょっと待て。何で最初に頼んだ俺が流されんだ？」

「面倒だからに決まってるでしょ？」

嬉しい事はもう一つ。

姉が亡くなってから呼ばれる事が無くなった自分の本当の名前。

自分自身ですら、宮野志保では無く灰原哀として生活している事で忘れそうになってしまう。

親から貰った大切な名前をこうしてもう一度、しかも好きな人に呼んで貰えるのがとても嬉しかった。

## 隼人の過去（後書き）

はい、ここまで読んで頂きありがとうございます。

今回は「もう一人の実力者」の最も深い部分である隼人の過去を書いてみました。

今回までの全ての話を読んで下さった神様のような人は、様々な伏線が回収された事にお気づきになったのではないのでしょうか？

それから、哀と隼人の距離を近づける為に哀に泣いてもらいましたが、哀好きの人ごめんなさい。如何しても哀と隼人が『お互いを傷つけた』と思わせるには、ああするしか無かったんです。

また、作中で無能な探偵というのが出てきましたが、決して毛利のおっちゃんでは有りません。十二年前はおっちゃんは刑事ですからね。探偵では有りませんから。

それに、おっちゃんはあるな酷い事を言う人じゃないと作者は思っています。

それでは、次回もよろしくお願いします。

## 高校へ行こう（前書き）

組織壊滅後です。

カップリングはまだ誰も付き合ってません。

当然ですが、組織壊滅前が前提になりますのでご注意ください。

## 高校へ行こう

黒の組織との戦いも終わりA P T X 4 8 6 9の解毒剤も無事に完成した。

コナンと哀は解毒剤を飲み、それぞれ工藤新一と宮野志保に戻った事で全てが漸く終わったのだ。

本当に近しい者達にだけ真相を話す事に決めていたので毛利一家、園子、和葉、少年探偵団の面々には全てを打ち明けた。

皆それぞれショックを受けたらしく涙を流す者、怒鳴る者等様々だったが、最後には全員とも受け入れてくれた様だ。

そして志保は蘭、園子、和葉と同性で歳も近い事から友人に成る事が出来た。

志保にとっては初めて出来た歳の近い友人だった為、嬉しさの余り涙を流していた。

蘭達も志保が一つ年上と解っても変に気を使わないようにと『ちゃん』づけで呼ぶ事にしたようだ。

ただ、志保が名を呼ぶ時は蘭だけを『蘭さん』と名前と呼んでいた。それに園子と和葉は納得出来ずに詰め寄ったが、志保は微笑を浮かべるだけで答えなかったらしい。

とある日の阿笠邸。

そこには、これからの生活をどうしていくかで新一、蘭、隼人、志保、博士が集まっていた。

「俺は当然、高校生として生活していくぜ？元に戻ったんだからよ。」

新一の事は誰も異論を唱えなかった。本人が今までずっとそれを望

んで来たのも知っているからだ。

問題は志保の方だ。

住まいは博士の家で問題無いだろうが、それ以外は特に決まっていなかった。

志保自身もこれと言ってやりたい事が決まっていなかったのが、問題に拍車を掛ける。

「あっそうだ。志保ちゃんと三井君も一緒に学校に来ない？きっと楽しいよ。」

蘭が名案とばかりに笑顔で切り出す。博士も笑顔で頷いているので、どうやら賛成の様だ。

「断る。なんで俺がもう一度高校生をやんなきゃならねえんだ。」

しかし隼人は即答で拒否してしまった。隼人としては高校に通うメリットが無いらしい。

それに蘭は少し残念そうな顔をした。

一方志保は満更でもない様だ。

「そうね。高校生をやってみるのも悪くないわね…。」

そして顎に手を当てて考えを深めてから決断した。

「決めたわ。これからは高校生として生活して行くから、よろしくね工藤君、蘭さん。」

微笑んで答えた志保に、新一も蘭も笑顔で迎え入れた。だが一番喜んでいたのは博士かもしれない。

対して隼人は心底意外だと驚いた。

「お前、一体どういう風の吹き回しだ？」

「あら、別に良いじゃない？日本の高校なんて通った事無かったんだから、一度くらい経験しても。ま、貴方は来なくても良いと思ってたから、ちょうど良かったしね。」

志保は挑発するような笑みを隼人に向けて答えた。

この言葉が癪に障ったのか、隼人は少し間を空けてからポツリと呟いた。

「…待て、俺も行く。」

「「「え？」」」

新一、蘭、博士は驚いて隼人の方を向くが、志保だけは誰にも気づかれない様にニヤリと笑みを漏らしていた。

「三井、オメーさっき行かねーって言ったじゃねーか？」

三人が思っているだろう疑問を新一が口に出した。隼人が言ってる事は先程と正反対なのだから当然の疑問だろう。

「気が変わったんだ。俺も高校は一年しか行ってねえからな。」

だが隼人は素っ気無く答える。さも、可笑しな所は何処も無いという様に。

新一達は隼人から『気が変わった』と言われたら納得するしか無かった。

気まぐれなのは良く知っているから。

「でも良かった。さっき断られた時は残念だったから。よろしくね、三井君。」

蘭は満面の笑みを浮かべた。自分の案通りになったのが嬉しいのだろう。

「ああ、よろしく。工藤と同じ学校ってのがアレだけだな。」

「だったら来るんじゃないよ。」

その後はいつも通り新一と隼人の口論になってしまう。

もはや構う必要も無いので蘭と志保と博士は三人で話し合う事にした。

「志保ちゃん良かったね。三井君と一緒に学校に行ってくれるようになって。」

「いいえ、計算よ。私が『来なくていい』って言えば天邪鬼な彼の事だから、必ず『行く』と言うと思ってね。」

そう、全ては志保の計算通りだったのだ。隼人の性格を熟知している志保ならではの策略だ。

「ハッハッハッ、志保君の方が一枚上手の様じゃな。」

「へえー？彼氏の事良く分かってるって感じね。どうしても一緒に行きたかったんだ？」

「ちょ、ちょっと、彼氏なんかじゃないわよ。それに貴女が悲しうだったから、この手を使ったのよ。」

志保が赤面しながら否定するのを、蘭と博士はニヤニヤしながら見ていた。

隼人と志保が好意を持ちあっているのは、既に周知の事なのだ。

何よりも、志保が元の身体に戻った最大の理由は隼人と一緒に居る為なのだから。

「さて、それじゃあこれからの事も決まった事じゃし、色々と準備せんといかんのお。」

博士は本当に嬉しそうだ。娘同然である志保の高校生の姿が見れるのだから当然かも知れない。

博士が会話を区切った事で、蘭と志保も今日はお開きにしようと話を中断させて新一達の方を見るが。

その新一と隼人はいつの間にか口論が終わっており、今は昨日のサッカーの試合の話で盛り上がっていた。

「いつまで話してるの？」

「！！」

怒気を含んだ声で蘭と志保が呼び掛けると、男子二人はビクツと肩を揺らした後、ゆっくりと振り向いた。

そして女子二人の顔を見て、冷や汗を滝のように流した。顔は笑顔なのだが目が全く笑っていないのだ。

（こ、怖え……。）

「新一？お喋りしててお腹空いただろうから、私レーズンパン持って来てあげるね？」

「それと、きつと喉も乾いてるでしょうから、アツアツのホットコーヒーを淹れてあげましょ？」

それぞれの弱点を的確に突かれ、いよいよ限界に達した男子二人は。

「勘弁して下さい！」

「勘弁してくれ！」

と、深々と頭を下げて謝る事になったのであった。



帝丹高校2-B。

朝のHRが始まる前の休み時間。今日はいつものに増して、教室内が落ち着かない。

新一は一足先に復学していたので、今日の主役では無かった。教室内には転校生が来ると噂になっていたのだ。それも二人も。

（俺が戻って来た時も凄かったが…。全く、転校生が二人来るぐらいで騒ぎすぎなんだよ。）

新一は自分の机で頬杖をつきながら溜息を吐いていた。

そこに蘭と園子がやって来た。クラス内で転校生の正体を知っているのはこの三人だけだ。

「皆、すごい楽しみにしてるみたい。志保ちゃんと三井君大丈夫かな？緊張したりしないと良いけど…。」

蘭が不安そうに恐らく二人が入って来るだろう教室の出入り口を見つめた。

「アイツ等が緊張するタマかよ。」

新一はどうでもいい事のように頬杖を突きながら答えた。

確かに二人が緊張するとは思えない。

「それは言ってるわね。むしろ二人がどんな自己紹介をするのかが楽しみだわ。」

それに園子も同意し、二人がやって来るのを心待ちにした。

その後暫くするとチャイムが鳴り担任の教師が入ってきた。

「よし、HRを始めるぞ。席に着けー。」

担任の登場により生徒達は自席に着く。椅子や机がガタガタと鳴るこの時が実は一番煩いかもしれない。

全員が座ったのを確認してから担任が口を開いた。

「さて、もう噂になってるみたいだが今日は転校生が居る。それも

男女一名ずつだ。おい、入ってきてくれ。」

担任が入り口の扉に呼びかけると、生徒達の視線がそこに集中する。やがて扉を開けて志保、隼人の順に教室へ入って来た。

生徒達から黄色い声や、隠せてないひそひそ話が次々と上がる。

それを担任が収め、自己紹介を促した。

「宮野志保です。よろしく。」

無表情で最低限の事しか言わなかった志保に新一は溜息を吐いた。

（ハハ…、この光景どっかで見た気がするな…。）

志保の隣に立っている隼人も呆れたように見ていた。これでは自己紹介では無く、ただ単に名前を名乗っただけではないかと。

しかしそれでも男子からの受けは良く、中には頬を染めている者までいたぐらいだ。

志保の自己紹介が、あっという間に終わってしまったのですぐに隼人の番になった。

「俺は三井隼人。口が悪いとよく言われるが、お前等と楽しくやっていけたらと思うっている。よろしくな。」

ニツと笑って終えれば、こちらは女子からの受けが良かったようだ。その様子を見て志保が隼人の事を睨んでいたのに気付いたのは新一、蘭、園子の三人だけであった。

二人とも自己紹介を済ませた後に担任が付則として説明を加える。

「この二人は編入試験で、すばらしい点数をそれぞれ挙げている。

勉強について聞いてみるのも良いかもしれないぞ。さて、二人の席なんだが、窓際が一番後ろに並んで空席が有るからそこを使ってくれ。」

担任が示した場所に隼人と志保は歩いて行き、少し相談した後隼人が窓側、志保がその隣に着席した。

その後担任が一日の予定を説明し出し、それも終わると教室の外へ出て行った。

そしてそれと同時に隼人と志保の周りに人が押し寄せる。

所謂質問攻めだ。誕生日、血液型、好きな教科、前の学校等々、質

問は尽きる事は無かった。

志保は面倒そうに適当に答えていたが、隼人は楽しそうに一つ一つ答えている。

隼人からしてみても日本の高校は初めてなので純粹に楽しいらしい。

「ねえ、二人には恋人とか居るの？」

しかし、一人の女生徒の質問を受けて二人の動きがピタリと止まった。

それは周りを囲んでいる生徒達にも解った様で、どうしたのだろうと首を傾げている。

「はいはい、それは聞くだけ無駄よ。この二人が恋人同士…っていうか夫婦なんだから。」

動きが止まった二人に変わって園子が答えた事によって、生徒達から驚きと共に悲鳴のようなものが混じった大音量が沸き上がった。

「ちよつと、鈴木さん？こんな気まぐれな人と、恋人だとか夫婦だとか言わないでくれる？迷惑だわ。」

「ああ、俺も同感だ。」

揃って園子をジト目で睨む志保と隼人。そんな二人を見て蘭はクスツと笑った。

「ほらね？すつごく仲良しでしょ？」

「どこが…？」

「どこがよ…？」

今度は蘭に対して全く同じタイミングで隼人と志保はジト目を向ける。

初めは驚いていたが、二人の息の合い様にクラス中がニヤニヤしていた。

（へえー、俺と蘭がからかわれてる時ってこんな感じだったんだな。やられてる時は、うるせーとしか思わなかったけど、こうして見ると面白えな。）

新一だけは冷静に観察していた。話に参加しないのは、あまりこういう話題が得意ではないというのも有るからだ。

「俺達なんかよりも居るじゃねえか？」

「ええ、公認の夫婦が。ねえ、工藤君？」

自分達ばかり注目されているのに疲れたのと、少しの仕返しを含めて隼人と志保は矛先を変える。

「バ、バーロー、なんじゃねーよ！」

急に話題が自分へと向けられた事で新一は声が裏返ってしまい、見る見るうちに顔が赤くなっていった。

「さっすが我がクラスが誇る公認夫婦は反応が良いわねー？」

「ちょ、ちよつと園子……」

すかさず園子が冷やかに掛った。蘭も新一と同様に顔を紅潮させている。

その後新一と蘭はクラス中から冷やかしを受ける事になった。それを横目に隼人と志保はホッと息を吐いたのであった。

「さあ、授業を始めますよ。皆さん席に着いてください。」

一限目の授業は数学だ。チャイムが鳴るなり教師が教室へと入って来た。

生徒達が席に着き礼をしてから、授業はスムーズに開始される。

やがて授業が始まって五分程経過した頃、志保は視線は黒板に向けたままそつと隼人に話しかけた。

「ねえ、さっきの事なんだけど。私達ってそんなに恋人みたいに見えるのかしら？」

志保はそれが気になっていた。悔しいが隼人に対して好意を持っているのは本当だ。だから『恋人』等と言われると、嬉しい様な恥ずかしい様な苛立たしい様な複雑な感情に悩まされる。

隼人はどう思っているのだろうと聞いてみる事にしたのだ。

「……………」

しかし、隼人からは何も返って来なかった。それに少し腹が立ち、語気をちよつとだけ強めて志保は再度話しかける。

「ちよつと、返事ぐらい…。」

話しかけながらジト目を隼人に向けたが、志保の言葉は途中で途切れてしまった。

「…寝てる。」

そう、隼人は自分の腕を枕にして気持ちよさそうに寝ていたのだ。

（…行かないって言うておきながら、来てみたらあんなに楽しそうにしてて、そうと思ったら一限目の授業が始まった途端に寝てる。本当訳分らないわ、この人。大体、私が悩んでるって言うのに寝てるなんて、いい度胸してるじゃない。その気持ち良さそうな寝顔を見てるとイラつくわ。）

志保は考えれば考えるほどイライラが増して行った。

やがて氷のように冷たい目で睨みながら、手に持ったシャーペンで隼人の無防備な脇腹をおもいきり突いた。いや、この場合刺したと言った方が正しいかもしれない。芯が出る方じゃないのがせめてもの救いだろうか。

「うぐっ!？」

くぐもった声を上げ、ガタタツと机を鳴らしながら隼人は立ちあがった。その際、手はしっかりと刺された場所を保護している。

「どうしました、三井君!？」

突然の事に驚く教師。教室中の視線が隼人へと向けられる。辺りはシンと静まり返り、何とも気まずい。

「あ…いえ、何でもありません…。すみません…。」

とりあえず、その場はやり過ごし隼人は席に座った。実際、隼人本人にも何が起きたのか殆んど分かっていなかった。ただ脇腹が何かで刺されたように痛い。誰かにやられたと考えるのが自然だが、授業中という状況でそれが実行できる人物となると。

「おい、お前か? 刺したのは?」

隼人は隣に座っている女子を不機嫌を露わにして睨みつけた。

「…貴方、何様のつもり？編入初日の一限目の授業が始まった途端に眠りだすなんて。」

しかし隣の女子は隼人以上に不機嫌のようで、正直目を合わせるだけで殺されそうだ。

だが隼人は此処で怯む訳にはいかなかった。自分は被害者なのだから。たとえ本能が『ヤバイ』と警告を発していたとしても。

「…悪かったな。だが、起こし方ってのが有ると思うんだが？」

「何？もっと尖った物が良かったのかしら？」

「そ、そうじゃねえ。もっと、揺するなり普通の方法が…。」

「寝てる貴方が悪いのよ。そうでしょ、三井君？」

「……………」

もはや隼人に反論の余地は無かった。これ以上は命に係わりそうだと直感したからだ。志保はいつもに比べて五割増しで威圧感を放っている。

とてもじゃないが耐えられないので、隼人はそそくさと目線を逸らして黒板へと向けた。

（何でコイツこんなに機嫌悪いんだ？）

チラッと志保の方を見て隼人は考えてみたが答えは出てこなかった。

午前中最後の授業の四限目。科目は体育だ。

隼人は二、三限目を必死で睡魔と闘っていた。寝たら志保に何をされるか分からないという恐怖でいっぱいだったから。

しかしそれも今は関係ない。男子はグラウンドでサッカー、女子はテニスコートでテニスと別れているからだ。そして何よりも楽しい。楽しいのだから寝るわけが無かった。

新一と隼人は中学時代の公式戦を思い出し、その続きをしているかのように全力でプレーしている。

その様子をテニスコートから志保が眺めていた。

「あんなにはしゃいじゃって。本当、子供なんだから……。」  
呆れてるように呟くも、その表情は穏やかで微笑んでいる。

「そうだね。でも、何か格好良いよね？」

いつの間にか志保の隣に並んでいた蘭もグラウンドを見つめている。  
暫く二人でボーっと立って見ていると、後ろから園子に声を掛けられた。

「二人してそんなところに立って何してんのよ？」

そして二人が見ていた先を確認した園子は顔をニヤニヤさせた。

「はっはーん。さては、ダンナの姿に見惚れてたのね？」

園子の言葉で蘭と志保は瞬時に顔を赤らめた。

「ち、違うって！ そんなんじゃないって！」

「そ、そうよ！ 別に三井君の事なんて！」

慌てて否定するのだが。

「はいはい。そんな赤くなった顔で言われても説得力ゼロよ。」

逆に墓穴を掘った様で二の句が言えなくなってしまった。

暫く一人で楽しんでいた園子だったが、これ以上は可哀想だと思い  
話題を変える。

「それにしても、あの二人って仲が良いわよねー？ 本人達は否定する  
んだろうけど。」

頭の中に全力で否定し合う新一と隼人の姿が浮かんで、蘭達は思わず  
笑ってしまった。

「私思っただけで、新一と三井君って何となく似てる気がするの。」

「そう？」

蘭の言葉に園子は首を傾げた。園子の中では、二人に共通する事は  
頭と運動神経が良いぐらいしか浮かばない。それだけでは似てると  
は言えないだろう。

だが、志保は分かる気がした。

「そうね。容姿も性格も全然違うけど、雰囲気というか言葉では上

手く表現できない物が似てるのね、きつと。」

「うん。こう、傍に居て欲しい時を察してくれたりとか。」

「氣にして無い振りをしてて実際はとても氣にしてくれてたりとかね。」

「そうそう。後は子供っぽい所が有るのも同じかな？」

「ええ。鈍感なのも同じね。」

「後は自信たっぷりな所とか。」

「お人好しな所ね。」

「それと結構自分勝手よね。」

「そして生意気だわ。」

言葉では上手く表現できないと言いつつ、蘭と志保はペラペラと共通点をあげていく。しかも初めは良い所だったのだが、数を重ねるごとに悪い所ばかりになっている。

しかし、その悪い所を挙げ合っているのも笑顔で話しているので、それら全てを含んで本当に好きなんだなと園子は思った。

「へえー？でも、どんなに似てても自分のダンナが一番なんでしょ？お熱いわねー？」

このままでは延々と惚気続けそうだったので、少し前に可哀想だと思ったのだが蘭と志保をからかう園子であった。

「「つ、疲れた……」」

午前中の授業を終えて、今は昼休み。

新一、蘭、隼人、志保、園子の五人は教室で集まって弁当を食べていた。

「おい工藤。お前少しは手加減しろ。クタクタになっちまったじゃねえか？」

「そりゃこっちのセリフだ。オメーが全力で来たんじゃないか？」



「俺は足の速さで誤魔化してるだけだろ？技術とかの純粹な上手さはお前の方が全然上じゃねえか？」

「バーロー。速さだけじゃなくてオメーの運動能力そのものが厄介なんだよ。技術でカバー出来んのも限界が有んだかな？」

新一と隼人は四限目に張り切り過ぎた為、ヘトヘトになっていた。グラウンドから教室に戻るだけでも一苦勞だったようで、完全にお互いとも自業自得なのだが、醜くも罪のなすり合いをしている。それを見て志保が大きな溜息を吐いた。

「呆れた…。そんなに成るまで続けるなんて、貴方達救いようが無いわ…。」

「しょーがねーだろ、中学の試合の時を思い出しまつて抑えが利かなくなっちゃったんだから。」

ジト目で新一が反論するが、志保には効果が無かったようだ。

「新一、疲れてるからって午後の授業寝たりしたら許さないからね？」

言いつける様に蘭が忠告する。実際、新一も午前中の授業は寝てしまっていたのだ。

志保も無言で隼人を睨むように見ていた。

「わーってるよ。だから今寝るから、時間になったら起こしてくれよ？」

「俺も寝る…。…起こし方は普通で頼むぜ？」

そう言うのと、ものの一分もしないうちに二人は寢息を立て始めた。

「早っ！随分と疲れてたのねー？」

二人の寢付きの良さに園子が驚いていると。

「ねえ、園子？真さんとは最近どうなってるのかな？」

目を細めてからかうように蘭が尋ねた。

「へ？な、何？」

何か不穏な空気を感じ取った園子に冷や汗が流れる。

「あら、私も聞きたいわね。蹴撃の貴公子に愛されてる貴女の話。」  
そこに更に志保も挑発的な笑みを浮かべて続いてきた。

「ちょ、ちよつと、二人とも？」

園子は頬を紅潮させながら慌てている。立ち上がって逃げようとするが、蘭に右腕を志保に左腕を掴まれて阻止されてしまった。

「逃がさないわよ園子？」

「ゆっくり話して貰おうかしら？」

蘭と志保は四限目の仕返しとしてたつぷりと冷やかした。だが、やはり一番の被害者は園子だろう。先程のは蘭と志保が何時までも惚気ているのに耐えかねてからかったのだ。それに対して仕返しを受けてしまうのだから何とも可哀想だ。

最早、普段のツケが回って来たと諦めるしかないだろう。

放課後。

その日の学校生活を終えて生徒達は続々と自宅へと帰っていく。

新一、蘭、隼人、志保は揃って歩いていた。園子とは既に分かれ道で別れた後だ。

「三井君、志保ちゃん。今日はどうだった？楽しめたかな？」

蘭が心配そうに聞いて来た。高校に来るように提案した身として気になっていたのだ。

「悪くなかったわ。それなりに楽しめたし。」

志保の答えを聞いて蘭の表情がパツと明るくなる。

「俺は疲れた……」

ぐったりしながら隼人が答えた。その横で新一も同じようにぐったりとしている。

新一と隼人は昼休みに寝たおかげで、午後の授業は起きたまま受けられた。それでもギリギリであったが。

「そりゃ、オメーが体育の時間で張り切り過ぎた所為だろ？」

「いや、それも有るが授業の時プレッシャーを感じるんだ。主に隣

から。」

そう答えた隼人を志保が睨みつけた。しっかりと聞こえていたようだ。

「それはきつと、志保ちゃんが三井君の事を見つめてたからよ。授業中の間、暇さえ有ればずっと見つめてたもんねー？」

だが蘭が予想もしていなかった事を言い出したので志保は赤面してしまった。

「ち、違うわよ。彼がちゃんと授業を受けているのか監視していただけよ。」

「そんなに赤くなっちゃって、志保ちゃん本当可愛い。」

平静を装って志保は否定したつもりだったが、蘭に指摘されてより一層赤面してしまいうハメになった。

志保はどうしても蘭には敵わなかった。それは亡き姉に似ているのも有ったが、純粹で真っ直ぐな意見に何時も意表を突かれてしまうからだ。

これは灰原哀だった時に吉田歩美に敵わなかったのと同じである。

「良かったな三井。随分と想われてるみてーじゃねーか？でも、オメーも宮野の事かなり見てたよな？」

一方で新一は隼人をからかい始める。隼人も恥ずかしい為赤くなっ

てしまっていた。

「お、おい工藤！からかってんじゃねえ！」

「俺は自分が見たままを言っただけだぜ？」

ニヤリと笑う新一。その笑みは推理で犯人を追いつめる時に浮かべるものとそっくりであった。

「お互いの事が気になって見つめちゃうなんて、仲が良いねー？」

「「だから、そんなんじゃない。」」

隼人と志保は必死に否定しようとしたが、声がハモってしまった事でお互い更に赤くなって見つめあい、続きが言えなくなってしまった。

「息もピツタリだしな。」

そこへ新一が追い打ちを掛ける。その表情は楽しくて仕方ないというようだ。蘭も似たような顔をしている。

その為気付かなかった。目の前の赤くなっている二人が仕返しを企んでいる事に。

（コイツ等：好き放題言いやがって…！）

（言われっぱなしってのも癪だわ…！）

「見てるこっちが恥ずかしくなっちゃうよ。」

蘭の言葉を聞いて、隼人と志保の目がギラリと光った。

「良く言うぜ。一緒に風呂に入った仲のくせしてな？」

隼人が遂に反撃の狼煙を上げる。

新一と蘭は一瞬キョトンとした後、瞬時に耳まで真っ赤になった。

「テ、テメー！何処でその事を…！」

新一が大慌てで隼人に詰め寄るもニヤリと笑われてあしらわれる。情報元は小五郎のおっちゃんだ。ある日酔っ払っている時にポツリと零したのだ。その為、今小五郎を問い詰めても覚えていないだろう。

「あら、それだけじゃ無いんじゃない？一緒に布団で寝たのだから一度や二度じゃないようだし？」

「ちょ、ちよつと志保ちゃん！」

志保が的確に追撃を繰り出した。

「バ、バーロー、あん時は『江戸川コナン』だったんだぞ！」

「そ、そうよ！コナン君が新一だったなんて知らなかったんだから…！」

新一と蘭は仕方が無かったと事故で済まそうとするが。

「確かに蘭さんは仕方ねえかもしれないが…。」

「工藤君はどうだったのかしらね？内心喜んでいたんじゃない？」

隼人と志保は連係プレーでしっかりと逃げ道を塞いだ。

完全に主導権は移ってしまった様だ。

その後隼人と志保は、散々からかわれた分をキッチリ返すまで二人を解放してあげなかったのであった。



## 高校へ行こう（後書き）

はい、ここまで読んで頂きありがとうございます。

今回は記念すべき十話目という事で組織壊滅後の話を書いてみました。

志保の登場をお待ちになっていた方、大変お待たせしました。

キーワードに志保の名前を使っておいて、登場するのが十話目とは何という体たらく振りでしょうか。

そして今回は園子が初登場でした。

実に動かしやすいのですが、口調が志保と似ている部分があるのでその辺りを気をつけていきたいと思います。

それでは、次回もよろしくお願いします。

**球技大会 (教室編) (前書き)**

組織壊滅後です。

「高校へ行こう」より後の話です。

カップリングはまだ誰も付き合ってません。

## 球技大会 (教室編)

平日の午後。

その日の帝丹高校2-Bは授業時間中だというのに騒がしかった。

「えー、それでは、来週に迫った球技大会の割り振りをする。男子はサッカーが十三人、バスケが六人。女子はテニスが七人、ソフトボールが十一人だ。交代で全員が参加する事。良く話し合って文句の出る者が居ないように。以上、開始。」

騒がしい理由は来週行われる球技大会の人員決めの為だ。

帝丹高校では毎年体育祭とは別に、全クラス対抗で球技大会が行われる。

ルールとしてはテニスを除いて、種目ごとにリーグ戦を行い上位二クラスにポイントが与えられる。

テニスだけは、一クラスからダブルス三チームを出してトーナメント戦を行う。その為、上位二チームが同クラスの可能性もありえた。そのルールでまずは学年ごとに競い、総合ポイントが一番多いクラスが学年一位となる。

そして各学年の一位三クラスで校内一位を競うのだ。

見事校内一位や学年一位に輝いたクラスには賞品が用意されている等、学校側としても力を入れているイベントだった。

「そういやー、来週は球技大会だったな。三井、オメーどっちにするんだ？」

「そうだな…？どっちにしろ俺は楽しめそうだからな…。」

新一と隼人も当然球技大会に参加する。

今日は珍しく隼人が新一の席にやって来て話し合っていた。

「お前は当然サッカーだろ？」

「当たり前ーだろ？得意な方を選らばねーでどうすんだ。」

「なら俺はバスケにするか。お前と同じチームなんて御免だからな。」



「そーかよ。俺だってオメーとなんか組みたかねーよ。」

いつも通り口論が始まるかと思われた時。

「工藤ー！助けてくれー！」

「お前しかいないんだ！」

クラスメイトであり、サッカー部の会沢と中道が大声を出しながら  
新一の席へとやってきた。

「あんだよ？どうしたってんだよ？」

面倒そうに新一がやって来た二人へと振り返る。

隼人も呼ばれた訳では無かったが同様に振り返った。

「工藤、頼む！俺達を助けてくれ！」

「あ、三井も居るじゃねえか！三井も頼むよ！」

新一が説明を求めたのだが会沢と中道は『助けて』や『頼む』と言  
うだけで全く説明にならなかった。

加えて、隼人が居る事に気付いて同じように縋りついている。

「あ？話が見えねえんだが？」

「そーだ。もっと具体的に言えよ？」

隼人と新一が首を傾げて尋ねた事で、漸く会沢が具体的な話を語り  
出した。

「あ、ああ、実はな。少し前に仲間内で賭けをしてよ。球技大会の  
サッカーで学年一位に成れなかったら何でもしてやるって大見栄切  
っちゃったんだ。」

「けど、球技大会のルールで部活に所属している人間は部活と同じ  
種目には出れねえってのをウツカリ忘れちゃっててよ。」

「だからサッカー部以外でサッカーが上手いお前等にしか頼れねえ  
んだよ。」

代わる代わる説明をする会沢と中道。その息の合い様は完璧だ。

要するに、賭けをしたが自分達は参加出来ないので何とかしてくれ  
という事らしい。

説明を聞いていた新一と隼人は揃って溜息を吐いた。

「オメー等なあ…。賭けをするのにそんな大事な事を忘れんなよ？」

「完全に自業自得じゃねえか。」

「それは解ってんだ。調子のいい頼みだとも解ってんだ。でもお前らしか居ねえんだよ。」

「頼む工藤、三井。俺達を助けてくれ。」

深々と頭を下げて懇願してくる会沢と中道を見て、新一は渋々承諾した。

「ったく、わーったよ。元々俺はサッカーに出るつもりだったから引き受けてやるよ。」

「ほ、本当か！？サンキュー工藤！」

「それで三井は？」

会沢と中道は新一が了承した事で一度笑顔を浮かべたが、すぐにまた不安な顔に戻ってしまう。

「断る、と言いてえ所だが引き受けてやる。一つ、いや二つ貸しだからな？」

隼人も此処まで頼まれては断れなかった。

新一と隼人の二人が了承した事で会沢と中道は漸く胸を撫で下ろす事が出来たようだ。

「俺達が引き受けたからって安心するんじゃないよ。勝負なんだから絶対勝てるとは言えねーぞ？」

「そうだな。負けてやるつもりはねえが、何が起こるか分からねえからな。」

浮足立っている二人に新一と隼人が釘を刺しておく。

決して自信が無い訳では無く、勝負事の厳しさを知っているからこそその忠告だ。

しかし会沢と中道は既に勝ったも同然だと浮かれきっており、忠告が届いたかは怪しい物だった。

一方で、志保は蘭とどっちに参加しようかを話し合っていた。

「志保ちゃんはどっちにするの？」

「そうね…。ソフトボールにしようかしら、小嶋君達と野球をして

た事があるから。何より楽そうだしね。」

志保は球技大会そのものに参加するのが面倒だった。  
なので、より楽な種目を選ぶ事にしたのだ。

「そっか。それじゃ私もソフトボールにしようかな？ 志保ちゃんと一緒の方が楽しいから。」

蘭は最初から志保に合わせて選ぶつもりだった。

直接対面して話をするようになってからの期間はまだ短いけど、既に胸を張って親友と呼べるまでに成っていたので、その親友と同じ種目を選ぶつもりだったのだ。

志保も蘭が同じ種目を選んでくれたのが嬉しかった。

2-Bの生徒達は全員良い人だったが、やはり蘭は別格だった。

もはや友人という枠に収まりきらなく成っており、志保にとっても親友と呼べる心強い存在のようだった。

そんなお互いを親友と思い合っている二人の下に、また別の親友がやって来た。

「らーん！ 志保ちゃん！ ビッグニュース、ビッグニュース！」

一体どこの情報屋かと思う様なセリフを言いながら園子がやって来た。

蘭と園子が親友なのは言うまでも無いが、志保と園子もお互いに蘭とは違った親友として認識しているらしい。

「どうしたのよ園子？ 大声出しちゃって。」

「ビッグニュースとか言ってたけど？」

蘭と志保が揃って首を捻って園子を見やると、待ってましたと言わんばかりに園子は語り出した。

「そーなのよ。実は今回の大会の校内一位や学年一位に配られる賞品が図書カードだけじゃ無いらしいのよ。噂では新しく駅前に出来たケーキ屋さんのケーキ引換券と選べるって話よ？」

「え！？ すごいじゃない！？ でも、どうしてケーキ引換券なの？」

蘭が驚きに目を見開いた。今までの球技大会ではそんな事は無かったのだから。

「うーん。何でも、女子達の意欲を出させる為に試験的にやるんだって。ケーキ屋さんとしても良い宣伝になるから是非にっってお願いが有ったみたいよ?」

「なるほど? 両者の利害が一致したって訳ね。」

「ま、そーいう事ね。でも、ケーキ好きな子には効果は有るんじゃない? 私もまだそのお店のは食べた事無いから、願っても無いわ。」

「あ、私もまだ食べた事無い。気になってたけど、お金がちょっと心許無かったんだ。」

「それなら余計張り切って参加して、絶対引換券をゲットしてやるのよ。」

「待ちなさい? それって、最低でもクラスが学年一位に成らないとダメなんでしょ? 貴女達だけ頑張っても無理だと思うけど?」

「フフフ…。甘い、甘いわ志保ちゃん。この園子様が何の対策も考えて無いと思っ?」

息巻く園子と蘭を志保が窺めると、園子是不気味な笑みを浮かべた。その表情に志保は勿論、蘭も何か嫌な予感がした。

「この球技大会の最大のキープポイントはテニスよ! この種目だけ一位、二位を同じクラスが取れるんだから! しかも、ダブルスなんだから上手い人が二人いるだけで優勝候補間違い無し! と言う訳で蘭頼んだわよ?」

「え! ? ちよっと園子。『と言う訳』って、もっとちゃんと説明してよ?」

「私が何とかしたいのは山々なんだけど、テニス部に入っちゃってるから出られないのよね。だから私が認める蘭に全てを託そうって訳。蘭なら優勝間違い無しだろうから。」

「調子の良い事言っちゃって。それって私に全部押しつけてるのと変わらないじゃない。」

蘭がジト目を園子に向ける。かなり他力本願だったからだ。

「まーまー、私もソフトボールで頑張るからさ。」

「それに、ダブルスなんだからパートナーが居ないと…。」

「それもダーイジョーブ。パートナーなら目の前に居るじゃない？」  
「「え？」」

園子のセリフに蘭と志保が同時に呆けてしまう。何故なら園子以外に蘭の目の前に居る人は志保なのだから。

「だから、蘭と志保ちゃんて組めば問題無いじゃない？」

「ちよっと鈴木さん？何で私までテニスに参加する事に成ってるのよ？」

「だって志保ちゃんも引換券が欲しいでしょ？」

「別に私はそこまでして欲しくないわよ。」

「へえー？でも、引換券を使ってケーキを彼にプレゼントしたら喜んでくれるんじゃない？」

「……………」

園子のセリフによって志保の脳裏にケーキを貰って喜んでいる隼人の姿が浮かんだ。

その為、ちよっと良いかもと思ってしまった。

不覚にもそれが園子にバレてしまう。

「あらー？その様子は満更でも無いみたいですわねー奥さん？」

「ち、違うわよ！誰も三井君に渡そうなんて思って無いわよ。」

バレてしまった驚きと恥ずかしさで、思わず志保は赤くなりながら本心を喋ってしまった。

「でも、その為には引換券をゲットしないとダメよねー？」

「だから私は…。」

ニヤニヤ顔の園子に完全にペースを握られてしまい、志保がいくら否定しようとする後の祭りのようだ。

「じゃ、蘭。パートナーも決まった事だから任せたわよ。よろしくー。」

強引に話を終わらせて園子はさっさと行ってしまう。残された蘭と志保は、お互いを見つめて溜息を吐いた。

「どうしよっか志保ちゃん？」

「まだ先生に言った訳じゃないから決まっては無いけど…。」

「引換券が欲しいのも本音だよね？」

「…ええ…。」

そして二人揃って再び溜息を吐いた。もうこうなったら仕方無いと諦めて、テニスに参加する事を決めたのであった。

そしてやって来た大会当日。

天気は程良く雲が有る晴れで、運動するには絶好の気温だ。

生徒達は既に体操着姿に着替え終わっており、教室内で待機している状態だった。

そんな大会開始前の教室で担任によって出欠確認が取られている中、志保は隣に座っている隼人の表情を見て溜息を吐いた。

「随分と嬉しそうね？」

志保はテニスに参加する事が少々憂鬱だった。それなのに、隼人が嬉しそうな表情を浮かべているのが憎らしくも羨ましかった。

「当然だ。久々に本気でクラスの奴等以外と勝負できるんだからな。そう考えるだけで血がたぎるぜ。」

「良いわね、貴方は単純で…。」

「あ？どういう意味だ？」

「言葉通りの意味よ。」

「…言ってくれるじゃねえか？」

隼人がそこまで言った所で出欠の順番が回って来て会話が一時中断された。

出欠確認は五十音順なので、隼人も志保も終盤になっている。

二人が出欠を終えると、すぐに出欠確認自体が終わり担任が今日の注意事項等を説明しだした。

しかし隼人はそんな物は聞いておらず、志保に気になった事を聞いてみた。

「そう言えば、お前テニスなんて出来たのか？やってるのを見た事がねえが？」

「体育の授業でやった事が有るから少しだけね。」

「それでよくテニスを選んだな？お前の事だから、ソフトボールの方が楽だとか何とか言ってそっちにすると考えたぜ。」

「私も本当はそのつもりだったんだけど、鈴木さんに押し切られたのよ。蘭さんと一緒にテニスに参加してほしいって。」

「何だ、お前もか？」

「え？」

「実は俺も、会沢と中道にサッカーに参加してくれと頼み込まれたんだ。」

「あら、そうだったの？ま、貴方の運動能力なら頼られても仕方ないわね。」

「お前だって変わらねえぜ？テニス部の園子さんに頼まれたんだから、お前の腕も中々という事じゃねえか？」

「そんな事ないわよ。蘭さんのおまけよ、きっと。」

「謙遜するな。例の引換券の為に引き受けたんだろ？」

「気付いてたの！？」

志保は普通に驚いた。まさか隼人が引換券の事を知っているとは思わなかったのと、テニスに参加するのを引き受けた理由を言い当てられたから。

「何となく。ま、俺が全力を出して、お前がその気になれば大丈夫だと思うぜ？」

「仕方ないわね……。ガラじゃないけど私も頑張ってみるわ。」

「だからって、怪我はしねえ様にな。」

「貴方も……って言うだけ無駄ね。どうせドロコに成ってるんではないから。」

「おい……。」

隼人は言い返したかったが、自分でもそうなってそうな予感がしたので言い返せなかった。

それでも、このままでは悔しいので睨みつける事にした。だが残念な事に、志保に効果は全く無かったようだ。

その一方で、新一もやはりワクワクを抑えられずにいるようだ。

隣同士では無いが比較的席が近い蘭がチラッと見るだけで、気持ち簡単に読み取れるほどだった。

やがて担任の話も終わり、休憩兼移動時間になったので蘭は早速新一の下へと向かった。

「新一、楽しみなのは解るけどニヤニヤしっぱなしだと気持ち悪いわよ?」

「しゃーねーだろ? 体育の授業以外で試合すんのも久しぶりなんだから。」

「浮かれてて怪我しても知らないから。」

「大丈夫だよ。オメーと違ってドン臭くねーから。」

「ちょっとそれどういう意味よー?」

「そういう意味だよ。オメーは、すぐスッ転ぶからな。」

「適当な事言わないでよ! そんな転んで無いでしょ!？」

「覚えてねーだけだろ? そういや、記憶力も悪いんだったな?」

「最低! もう絶対心配してあげないんだから!」

「…無理すんなよ?」

「え?」

散々馬鹿にされて怒り心頭だった蘭だが、突然新一が声の調子を変えて呟いたので不思議に思って首を傾げた。

新一はそれまでのからかう表情から一変して真剣に蘭を見つめている。

「引換券が欲しいからって無理して怪我するんじゃないぞ?」

「え!?! 何で知ってるの? 私が引換券が欲しいって。」

「バーロー。俺は探偵だぜ? オメーの考えてることぐらい解んねーでどうすんだよ?」

「新一…。」



「俺が優勝して学年一位にしてやっから、オメーは無理する必要はねーんだからな？」

「うん…。」

蘭の怒りは、あっという間に治まり今度は頬を染めて新一を見つめている。

園子に頼まれた為、気負っている物が有って少々緊張していたのだが、新一のお陰でそれも無くなった様だ。

## 球技大会 (教室編) (後書き)

お読み頂きありがとうございます。

スポーツの秋という事で急遽、球技大会の話を書いてみました。ただこれが文字数がとんでもない事になってしまいまして、分けて投稿させていただく事にしました。

今回の最後の方に新一と隼人の決定的な違いを書いてみました。作者が見るに新一は、全部俺に任せとけ、の様な『リーダー』だと思ってます。

対する隼人は、俺も頑張るからお前も頑張れ、の様な『同僚』としています。

良い悪いではなく、性格の違いを書いてみたつもりだったのですが伝わったでしょうか？

今回は、いよいよ試合開始です。

それでは、次回もよろしくお願いします。

## 球技大会 (サッカー編) (前書き)

帝丹高校のクラス数が解らなかったのも、五クラスとさせていた  
きました。

何処かに正式なクラス数が出ていて、間違っていたら申し訳あり  
ません。

対戦相手として隼人以外のオリキャラが出てきます。

## 球技大会 (サッカー編)

いよいよ大会が開始された。

新一と隼人のサッカーの試合は、いきなり最初からのようだ。

相手はE組、新一と隼人はワクワクを抑えられないままグラウンド内へと入って行った。

「頼むぞ工藤、三井。全勝だ、全勝すれば文句無しで優勝なんだ。」

「お前達なら出来るって信じてるからな。」

ギャラリーでは会沢と中道が祈るようにしてグラウンドを見ている。そこへ蘭、志保、園子がやって来た。

「あれ、会沢君と中道君も応援に来てたんだ？」

「毛利か。ああ、アイツ等には何としても勝って貰いたいからな。」  
声を掛けられた会沢が振り向くなり、簡単に此処に居る理由を話した。

「アンタ達、自分達の試合を放ってまで来てないでしょうね？」

園子が疑いの目を向けるが、中道は心外だと言わんばかりの表情をする。

「そんな訳無いだろ鈴木。俺達バスケの試合は三試合目なんだからよ。そう言うお前はどうかなんだ？」

「私は二試合目だから問題ないし。」

「私達もクジでシード権を取れたから暫く試合は無いんだ。」

「蘭さんの強運には本当に驚かされるわ。」

帝丹高校はAとE組までの五クラスなので、一クラスから三チーム参加するテニスは十五チームとなってしまう、一チームだけシード権を手に入れられるのだ。

それでも十五分の一の確率なのだから、蘭の運の良さは相当のものだろう。

「それでどうなのよ？新一君達、勝てそうなの？」

「大丈夫さ。サッカー部が出れない条件で、アイツ等二人が居れば

楽勝の筈だ。」

「いや待て中道。E組に居るアイツって町のクラブサッカーに所属している木田じゃないか？」

楽観的に話している中道を会沢が制した。

そして会沢の指差す先にいる一人の男子生徒へと全員目が向けられる。

そこには身長百八十センチを超えていそうな長身の男子生徒が居た。いかにも自信有りと言う様な余裕の笑みさえ浮かべている。

「本当だ……。ヤバいぞ。アイツ、滅茶苦茶上手いって評判だ……」

「だ、大丈夫だよ。新一だって上手なんだから。」

木田の姿を見た中道が意気消沈して行くのを蘭は懸命に励ました。しかしその効果も無く中道の不安は消えず、加えて会沢まで青い顔になってしまっていた。

一方のグラウンド内では、試合開始前に挨拶をする為に両クラスの生徒が中央へと集まっていた。

「君達が工藤新一に三井隼人かい？結構上手いらしいけど俺の相手じゃないね。まあ、精々無様な姿を見せない様に頑張るんだね。」噂の木田が新一と隼人を見つけるなり挑発をしてきた。決して大きな声では無かったのだがギャラリイにも聞こえていた様で、E組を中心とする女子達から歓声が飛んできた。この木田という男子は随分と女子から人気があるようだ。

対してB組を中心とする新一と隼人のファンの女子達から一斉にブーイングが巻き起こる。

探偵として名の売れている新一にファンが居るのは可笑しくないが、意外にも隼人のファンも居るらしい。

試合を行う選手達よりもギャラリイ間の方が殺気を飛ばし合っているという異様な状態になってしまった。

そんな中、新一と隼人は。

「へえー？」

「ふーん？」

と、いかにも気の無い返事を返すだけだった。

「クーツ！何よあの男！ちよつとイケメンで格好良いからって！新一君、三井君ガツンとやっちゃいなさいガツンと！」

園子にも木田の挑発が聞こえていた様で、熱くなってしまっている。「まあまあ園子。園子が熱くなっても仕方ないって。でも、あの人すごい自信が有るみたい。」

蘭は園子をなだめつつも、自分の正直な感想を口に出した。

それを聞いた会沢と中道は不安を大きくさせてしまう。

「ああ……。やっぱり噂は間違ってたないんだろうな……。」

「イキナリあんな奴が出て来るなんて最悪だ……。」

そんな二人を励ますように、志保は自信有りという笑みを浮かべて語り出した。

「大丈夫よ。あの木田って人、きっと挑発した事を後悔するわ。だって三井君も工藤君も目が本気に成っちゃったもの。」

蘭が新一の推理している時の顔が好きな様に、志保は隼人の本気になった時の顔が好きだった。見ているだけで、どんな事でも何とかしてくれそうな不思議な気持ちになるのだ。

加えて今は新一が居る。あの二人が本気になれば、そうそう負ける事は無いと志保は確信していた。

（にやろ……。）

（言ってくれんじゃねえか？）

志保の言った通り、新一と隼人の闘志は大きく膨れ上がっていた。そして二人揃って不敵な笑みを浮かべている。

やがて挨拶を済ませ二人とも各ポジションに着くと、試合開始のホイッスルを今か今かと待ちわびているようだ。

そして、いよいよ試合開始のホイッスルが鳴った。

コイントスの結果、B組のキックオフでスタートする事になってい

たので、FWの隼人がボールにタッチして試合が始まる。

球技大会でのサッカーの試合時間は前後半無しの十五分間だった。それで決着が着かない場合はPK戦を行って勝敗を決するルールだ。短い試合時間の為、開始時からボールを持てるのはかなり有利だろう。

一先ず隼人は、一人で攻め込む事はせずにボールを自陣まで下げる。そこにはMFの新一が居るので、新一を起点に様々な攻撃が可能だ。B組の作戦は攻守共に新一が司令塔、隼人が相手を引っ掻き回す遊撃隊という物だった。

優れた技術と判断力、そして経験が必要な司令塔には新一はうってつけだろう。

また、相手を掻き乱す為にピッチ内を縦横無尽に走り回るには、抜群の運動能力を持つ隼人にしか務まらない。

新一と隼人の二人の利点を最大限に活かす作戦だったのだ。

一方のE組は、全てを木田に任せる作戦のようだ。恐らく、木田本人からの指示だろう。

そして試合が始まって五分が過ぎた頃、その木田へとボールが渡った。

「さて、止められるものなら止めてみるんだね。」

木田は余裕の笑みを浮かべると、B組のゴールへ向かってドリブルで攻め込んできた。

その自信は、やはり嘘では無かった様で次々とB組の生徒達をかわしていく。

新一は、最初に木田にボールが渡った時の位置関係が悪かった為、追いかける形になってしまっていた。

「ヤバい！誰か止めろー！止めてくれー！」

「クソッ！このままじゃ一点取られちゃう！」

会沢と中道が頭を抱えて懸命に懇願するが、その願いは届かずボールを持った木田はドンドンとゴールへと近づいて行く。

木田がB組の生徒をかわす度に木田ファンから歓声が上がっていた。「あの人、本当に上手なんだね？一人で皆抜いちゃってる。」

「そうね。自慢するだけは有るみたいね。」

蘭と志保は素直に木田の実力を褒めている中。

「コラー！新一君何やってんのよ！さっさと取り返しなさいよ！」園子からは激しい檄が飛んでいた。

（コイツ、言うだけあって中々速えな。追いつけねー程じゃねーけど、ゴールまでの距離がもう無え。）

新一が懸命に追いかけているので木田との距離は見る見る詰まっているのだが、このままでは木田が先にシュートを決めてしまいそうだ。

やがて木田の前にはB組のGKを残すのみとなってしまった。

キーパーはここぞとばかりに飛び出して木田からボールを奪おうとしたのだが。

「読んでるよ。」

木田はキーパーが飛び出して来るのを読んでいたらしく、キーパーの頭上を越えて行く様なループシュートを放った。

（ヤベエ！？）

新一の計算では木田がキーパーをかわしている間に追いつく予定だったのだが、これではボールに追いつけそうも無い。

木田が放ったシュートはキーパーの頭上高くを越えてゴールへと吸い込まれて行くように飛んで行った。

誰もがボールがゴールに入ると思った瞬間。

ズドンッ

ボールは何かにぶつかりゴールとは別方向へと飛んで行ってしまった。

その理由は、隼人が前線から全速力で木田を追いかけていた為何とかボールに追いつき蹴り飛ばしたからだ。

もし、木田のシュートがゴールネットへと突き刺さるような鋭い物



だったら、流石の隼人も追いつけなかった。

ループシュートというゆっくりと放物線を描くシュートだったからこそ追いつけたのだ。

木田からしてみればキーパーへは最適だったが、隼人へは大失敗となってしまったという訳だ。

「どうした！？この程度か！？それじゃ点は取れねえぜ！？」

ゴールを守った隼人は不敵な笑みを浮かべて挑発する。

「三井隼人……！」

対する木田は悔しそうに顔を歪めて隼人を睨みつけた。

「うおー！！三井ー！お前って奴はー！！！」

「挑発までしやがって！全く何て奴だ！！！」

会沢と中道は隼人の好プレーに狂喜乱舞している。まるで優勝でもしたかのような勢いだ。

隼人ファンも歓声を上げており、木田ファンへ『どうだ！』と言わんばかりの視線を向けて挑発している。

「すごいじゃない三井君？ねえ、志保ちゃん。」

「一回活躍しただけよ。それにしても、活き活きした顔しちゃって。」

「おやー？志保ちゃん、惚れ直しちゃったのかなー？」

「……そんな訳無いでしょ？あんな子供、惚れ直す所なんて無いわよ。」

園子が冷やかすと志保はジト目を向けて否定する。しかし志保のセリフに蘭はニヤリと笑みを浮かべた。

「あれー？今の言い方だと、『もう三井君の全てに惚れてる』って言うてるのと同じじゃない？」

「ち、違うわよ！今のは言葉のあやで、あんな気まぐれで、天邪鬼で、いい加減で、自分勝手に、子供なバカ猫の事なんか何とも思っていないわよ！」

蘭が突然思いもしない事を言い出したので、志保は頬を紅潮させて

必死に否定するハメになってしまった。

「へえー？」

だが志保の必死の抵抗も蘭と園子には通じず、ニヤニヤ顔で見られている。

「…何よ？その顔。」

「べっつにー？ねー？」

「ねー？ほらほら、サッカーの試合終わっちゃうよ？」

志保が不機嫌を露わにしてジト目で睨みつけたが、園子と蘭に軽く流されてしまうのであった。

B組のゴール近くでは、まだ木田が隼人の事を睨んでいた。

余程シュートを止められたのが悔しかったのか、それとも挑発に腹が立ったのか、はたまた両方か。

木田に睨まれているのが飽きて来た隼人は話しかけた。

「おい、何ボサツと突っ立ってやがる？ゲームはまだ続いてんだぜ？」

隼人に話しかけられてハツとした木田が自陣を振り返ると、そこには新一が味方二人と一緒に攻め上がってる姿があった。

「工藤新一！」

木田が居ないE組の防御陣は統制も全く取れておらず、正に烏合の衆と化してしまっている。

新一一人でも問題無く攻め込む事は出来たが、無理をしない様にしたようだ。

味方の二人はパスを受けたり、出したり程度は出来るので新一は二人と協力して攻め込んでいく。

この際、味方のパスが多少ずれてしまっても、新一がしっかりとフォローするので問題ない。

木田が慌てて守りに戻ったが、もはや追いつける距離では無かった。やがて新一がE組の最後のDFをかわしてゴールへと鋭いシュートを放つ。

E組のキーパーはこれを止める事が出来ず、見事にB組に先制点が入ったのだった。

ギャラリーからは歓声上がり、中でも新一ファンは木田ファンへ『見たか!』といった視線を向けている。

ピッチ内の新一もチームメイトに揉みくちにされる様にして喜びあっていた。

そのまま皆揃って自陣へと下がって行くと、隼人がニッと笑みを浮かべてピッチ中央に立っていた。

「流石と言った所か。」

「オメーな? クリアに成功したならさっさと前線に戻って来いよ?」

「相手のエース級を足止めしてやったんだから文句言うんじゃないやねえ。」

「絡まれてただけじゃねーか。」

口では言い合っているが新一も隼人も木田に一泡吹かす事が出来たので、その表情から笑みを隠す事は出来ないでいた。

「工藤ー! お前ならやってくれると信じてたぜー!!」

「やっぱお前の実力は大了もんだぜ!!」

会沢と中道は再び狂喜乱舞している。このままだと大会が終わるまでに何回優勝気分を味わう事に成るのだろうか。

「蘭! 新一君がシュート決めたよ! ちゃんと見てた?」

「うん……。」

園子が興奮気味に蘭へ話しかけたが、当の蘭は何処か上の空のようだ。

それに首を傾げて、再度園子は話しかけた。

「らーん? 聞いているー?」

「うん……。」

しかし蘭は、やはり上の空でボーっと新一の事を見つめている。蘭の事を良く見てみれば頬が僅かに色づいていた。

「ダメね。完全に工藤君に見惚れちゃってるわ。」

その様子に気付いた志保が溜息交じりに話すと。

「だね。こりゃ完全に自分の世界に行っちゃってるわ。」

園子も同感を示し、二人して蘭の事をニヤニヤと見つめるのだった。やがてハッと二人の視線に気付いた蘭は、頬が赤くなっているのを必死に隠しながら問い掛けた。

「な、何で二人ともニヤニヤして私を見てるのよ!？」

「別に。ねえ鈴木さん？」

「ねー？さ、応援応援っと。」

蘭の問いには志保も園子も答えず、軽く流すだけだった。中でも志保は先程の仕返しも含んでいるようだ。

その後の試合は、木田が事有るごとに新一と隼人に勝負を挑んできた。た。

だが木田は勝負を挑む相手と内容を間違えており、例えば新一に技術力を、隼人に運動力を挑んでいたのだ。

当然勝てる訳が無く木田のプライドはズタズタになってしまい、木田ファンも意気消沈して何とも暗いムードになってしまっていた。結局試合終了まで両クラスとも新たに点は取れず、新一の決めたゴールが決勝点となってB組対E組の勝負はB組の勝利で幕を引いたのであった。

「やっぱり十五分じゃ物足りねえな。あっと言う間に終わっちゃったぜ。」

「まあ、良いじゃねーか？少なくとも後三試合は出来るんだからよ。」

試合を終えた新一と隼人は感想を述べ合いながらグラウンドから出て、ゆっくりと休憩する事にした様だ。

そこへギャラリーで応援していた蘭達が笑顔で駆けつけた。

「はい新一、お疲れ様。」

「お、サンキュー。」

蘭が手に持ってたスポーツドリンクを新一に手渡すと、新一は受け

取るなりすぐに飲み始めた。十五分と言えども喉は渴いていても不思議じゃない。

「はい。貴方も頑張った方じゃない？」

「なんだ、見てたのか？」

志保も隼人にスポーツドリンクを手渡した。やはり隼人もすぐに飲み始める。

「やったぜ、お前等ー！良くやったぜー！」

「やっぱお前等に頼んで正解だった！」

会沢と中道がハイテンションで労った。頭の中はまだ優勝気分のようにうだ。

「バーロー。まだ初戦を勝っただけじゃねーか？浮かれてんじゃねーよ。」

そんな二人を新一は呆れ顔で見つめた。蘭達、周囲の人も苦笑を浮かべてる。

「ま、浮かれんには早えが、俺達はB組全体の中でも初戦だったからな。良い景気付けには成ったんじゃねえか？」

「そーね。この勢いに乗って一気に優勝して引換券をゲットするのよー！」

隼人のセリフに同調した園子が闘志を漲らせた。園子の後ろに炎が燃え上がっている様に見えるほどだ。

「園子が燃えてる…。」

「すごい気迫ね…。」

蘭と志保は呆気にとられたものの、園子が頼もしくも見えた。

「園子。そろそろ時間じゃない？皆で応援するから頑張って。」

「怪我しない様に気を付けるのよ？」

時計を見た蘭が園子の出番が近づいている事に気付き、笑顔で激励を送る。

志保も続いて親友の安全を気遣った。

「見ててよ蘭、志保ちゃん。私のホームランでB組を優勝へと導いてやるんだから。」

ヤル気満々で園子は試合へと向かい、残りのメンバーも応援の為試合が良く見える良い場所で園子の活躍を見守った。

今大会のソフトボールのルールは五回までのスリーアウトチェンジ制だった。これならば、確実に全員へと打順が回ってくるだろう。対戦相手はA組で、B組の先攻で試合は開始された。

園子の打順は気迫が味方に伝わったのか三番だったのだが、注目の第一打席ではその気迫が空回りしてしまい三振に終わってしまう。続く第二打席ではレフト前に見事にヒットを放ち、三塁ランナーを帰還させる大活躍だった。

応援していた蘭達も大はしゃぎで園子の活躍を讃えたのだが、当の園子は調子に乗ってしまい塁で止まる事を忘れ、走り続けた挙句アウトになってしまうという醜態を晒してしまった。

これには盛り上がっていた蘭達も呆れて苦笑を浮かべるしか無かったようだ。

試合結果は何とかB組の勝利で終わった。

途中で会沢と中道がバスケの試合に向かったのだが、蘭達は誰も応援に行かなかったらしい。

## 球技大会 (サッカー編) (後書き)

お読み頂きありがとうございます。

前回に引き続き球技大会の話を投稿させていただきました。

クラス数やルールなどは作者が通っていた学校の物を参考にしてありますが、可笑しいところが有るかもしれません。すみません。

球技大会はまだ続きます。もう少しお付き合いください。

それでは、次回もよろしく願います。

## 球技大会 (テニス編) (前書き)

球技大会三話目です。

またしても隼人以外のオリキャラが対戦相手として出てきます。



## 球技大会 (テニス編)

「おい、そろそろお前達の試合になるんじゃないか？」

園子の試合も終わり、その話題で皆で談笑してる中、隼人が思い出した様に口に出した。

テニスの試合は試合数が多い事から、コートを三面使って進められている。その為、回転率がとても早いのだ。

ちなみに他の種目は全て二面で進められている。

「あ、そうだね。志保ちゃん、行こう？」

「ええ。」

蘭と志保は準備を整えて立ち上がった。

「蘭。教室でも言ったけど無理すんじゃないぞ？」

「大丈夫、解ってるから。だから新一はちゃんと応援してて。」

蘭を心配する新一が声を掛けたが、それに蘭は笑顔で答えた。

新一のお陰で妙なプレッシャーも無くなっている。何よりも新一が応援してくれるだけで蘭は頑張れるのだから。

「お前も怪我しねえ程度にな。応援してやるから。」

「良いわよ、応援しなくて。」

志保は本音では隼人に応援して貰いたかったのだが、つい素直になれず逆の事を言ってしまった。だが隼人は志保を応援するだろう。天邪鬼なのだから。

「蘭も志保ちゃんもダイジョーブよ。二人を選んだこの園子様の目に狂いは無いわ。」

蘭と志保の実力を知っている園子が自信満々に胸を反らす。

園子に太鼓判を貰った事で蘭と志保は微笑を浮かべてテニスコートへと向かうのであった。

大会でのテニスのルールは先に七ポイント取った方が勝ちという物だった。

サーブ権は最初にコイントスで決め、その後は一ポイント決まるごとに順番で行う。

不公平は無いが、最初にサーブ権を取った方が有利ではあった。

「それで園子。蘭がテニス出来るのは知ってけど、宮野はどうなんだ？アイツがテニスしてる所なんか見た事ねーぞ？」

試合が始まる前に、新一は気に掛ってる事を園子に尋ねた。

志保の運動神経が悪くない事は解っているが、テニスが出来るかどうかは別問題だ。

園子は随分と志保を買ってる様なので聞いてみたのだ。

「心配無いわよ。体育の時間の時に一緒にやっただけど、上手だったから。」

新一の疑問に園子はハッキリと答えた。それは誤魔化す必要も無い程に志保を信頼していたからだ。

「だが、ダブルスってのはパートナーと息が合わねえと勝てねえって聞いてるぜ？アイツ等みてえにイキナリ組んだので大丈夫なのか？」

今度は隼人が園子に尋ねた。

テニスのダブルスは、プロの世界でもパートナーと息が合わないで勝利を逃すなんて事が日常茶飯事だ。

それなのに、コンビネーションの練習も出来ていない蘭と志保で大丈夫なのか気になったのだ。

「それも問題無いわ。あの二人ならね…。」

園子はハッキリとは無いが妙に自信のある様な笑みを浮かべて答えた。

新一と隼人は、その笑みが何を意味しているのかが解らず首を傾げるのであった。

やがて試合開始時間が近づいて来た。

蘭達はテニスコートの中央に集まって挨拶をしている。

対戦相手はA組の平田と井上だった。

「よろしくね。お互い頑張ろうね。」

「お手柔らかにお願いしますね。」

平田と井上は笑顔で挨拶をして来た。それに対して蘭と志保も笑顔で応える。

「うん、こちらこそ。」

「よろしく。」

蘭達はシード選手の為初戦だが、平田達は既に一回戦を勝ち抜いてきたチームだ。油断は出来ない。

コイントスの結果、サーブ権は蘭達から始まる事になった。

コート内で各々が構えを取り、志保と一回領きあってから蘭はサーブを上から放った。

テニスをやった事が有る人なら解ると思うが、サーブを上から行うのは中々難しい。

テニス部以外で出来る人は少ないのではないだろうか。

蘭の放ったサーブは見事にサービスエリアを捉えた。

しかし、一回戦を勝ち抜いて来ただけあって井上がしっかりと打ち返してくる。

返って来たボールを今度は志保が打ち返す。まだ狙った通りの場所へ撃てるほど上手くは無いが、コート内には確実に入りそうだ。

予想通り志保の撃ったボールはコート内に入ったが、それも井上は返して来た。

井上も狙った場所へは撃てない様で、決め手が無いままラリー戦が始まる。

暫くラリーが続くかと思ったが、平田が空振りした事で蘭達に一ポイントが入った。

「驚いたな。宮野の奴、ちゃんと出来てんじゃねーか？」

新一が感心したように呟いた。先程園子から説明を受けても、完全には信じられなかったのだ。

「だーから心配無いつて言ったでしょ？あの二人なら楽勝よ楽勝。」

「まだ一ポイント取っただけだ。浮かれるには早えんじゃねえか？」  
今にも高笑いを始めそうだった園子を隼人が窘めた。

志保が活躍出来てる事は隼人も嬉しかったが、何か嫌な予感がしたのだ。

それは、平田達が点を取られたというのに全く悔しそうにしていな  
いからだ。

「おい工藤。この試合、一波乱有るかもしれねえぜ？」

「ああ、オメーも気付いたか。相手チームのあの余裕そうな顔。油  
断出来ねーな。」

隼人と新一は自分達の考えが杞憂であってくれと願うのであった。

その後の試合は平田達のミスが続き、5－0の一方的な物に成って  
いた。

しかし蘭と志保の表情は何処か浮かない様だ。

「蘭さん、気付いてる？あの人達の様子に。」

「うん。なんか、わざと点をくれてるみたい。」

そう、蘭達は余りにも簡単に点が取れた事に疑問を持っているのだ。  
ここまでの得点は全て平田達のミスのお陰だった。

逆を言えば蘭達の実力で取った点は無いという事である。

それがどうしても気になって、素直にリードを喜ぶ事が出来ないで  
いたのだ。

「平田さん、そろそろ行きましようか？」

「そうだね。きつともう勝った気に成っちゃってるだろうしね。」

A組の平田と井上はニヤリと笑みを浮かべた。

そして井上のサーブの順番だったのだが、サーブを上から放って来  
た。今までは下からだったのだが、上からして来たのだ。

「！！」

レシーブを受けようとした志保は驚いてボールを見送ってしまった。  
やはり下からと上からではボールの球威がまるで違う。油断したつ  
もりは無かったが、志保はイキナリの事に対応できなかった。

蘭も同様に驚きに目を見張っている。

「フフッ、驚いてるねー。」

「無理も無いでしょう？勝ったつもりでいたんでしょから。」

蘭と志保の驚きようを見て平田と井上は笑みを深めた。

どうやら初めは手を抜き相手を油断させてから、本気を出して一気に決着を着ける作戦だったようだ。

実は平田達は一回戦も同じ作戦で勝利を収めていた。この時の相手チームは、急激に強さが変わった事に混乱してしまい自滅してしまっていた。

一先ず気を取り直して、志保がサーブを放つ。まだ上からは出来ないの下からだ。

志保のサーブはサービスエリアにしっかりと入ったが、平田によって蘭と志保の間を狙い澄ました様に返されてしまい点を取られてしまった。

続く平田のサーブも今までと違い上から撃たれ、蘭が返したものの井上によって簡単に点を取られてしまう。

連続三ポイント取られた事で、スコアは5―3に成ってしまった。

「ちょっと、ちょっとどうなってるのよ！？あの子達、まるっきりテニス部の動きじゃない！？」

プレーしている蘭と志保以上に応援していた園子は驚いていた。

蘭達ならば楽勝だろうと試合開始前から確信していて、実際ここまでその通りに進んできたのだ。

それが突然あつと言う間に三ポイント取られてしまい、スコア上では有利と言っても窮地に立たされたのだから仕方ないだろう。

「嫌な予感が当たっちゃったみてえだな。」

隼人も平田達の動きの変わり様には驚いた。それほどまでに実力の隠し方が上手かったのだ。

「ああ。こりゃ簡単には勝てそーにねーな。」

新一も苦い顔をしている。初戦からとんでもない相手にぶつかって

しまったものだ。

「反則じゃないあの子達！？なんでテニス部が出てるのよ！？見た事無いけど！」

「おい、落ち着け。恐らく中学でやってたが高校じゃやってねえって奴だろ。」

「それか俺達が戦った木田って奴みてーに町のクラブに所属してるかだな。」

興奮して今にも審判へと抗議しそうな勢いの園子を隼人と新一は必死でなだめた。

ルールでは帝丹高校の部活に所属している者は、部と同じ種目には出てはならないという物だ。

二人の言う通りならばルール違反には成っていない。

「でも、このままじゃ蘭達が不利よ。あの子達上手すぎるもの。」あまり納得は行かなかったが園子は取りあえず落ち着く事にした。

その上でテニス部員の目から見て、的確に戦力差を分析する。結果は悔しいがやはり平田達の方が上だった。

「推薦したオメーが信じてやらねーでどうすんだよ？まだ負けが決まった訳じゃねーだろ？」

「そうだな。最後まで応援してやれ。」

落ち着いたと思ったら、今度は気落ちしそうな園子を新一と隼人は励ました。

こっちはこっちで何かと大変だ。

「そ、そうよね。私が二人を信じてあげなきゃ誰が信じるって言うのよ！らーん、志保ちゃん！そんな奴等ブッ倒しちゃいなさーい！」

再び元気を取り戻した園子は大声で蘭達に声援を送った。推薦した人間として、親友として最後まで信じると決意したようだ。

その隣で新一と隼人も心の中で声援を送っていた。頑張っている姿を見たら勝って欲しいと思うのは当然だろう。

（まだポイントで有利なのは変わってねーんだ。諦めんじゃねーぞ、

蘭。」

（実力は相手の方が上だ。普通にやったら勝てねえぜ、志保。）

「なるほど？油断させてから逆転する作戦だったみたいね。」

「だからわざとミスして点をくれてたって訳ね？」

「そう言う事ね。余程自信が有るのね、あの人達。」

「でも確かに上手だよあの二人。園子と同じくらい。」

平田達の予想と反して、蘭と志保は落ち着いて現状を把握していた。初めから簡単に点が取れる事に疑問を持っていた為、原因が解ってスッキリしたほどだ。

現状を把握して尚、蘭も志保も諦めるつもりは全く無い。

どうやれば勝てるかと思惑はフル回転していた。

「蘭さん。こんなのはどうかしら？」

「え？」

何か妙案を思い付いた志保が不敵な笑みを浮かべて蘭へ耳打ちする。聞いていた蘭の表情は見る見る笑顔に成って行った。

「良いかも。一か八かやってみようか？」

「ええ。やってみましょ。」

作戦が決まった蘭と志保は一つ頷きあって、自分達の場合へと着いた。そして蘭がサーブを放った事で試合は再開される。

蘭の放ったボールは見事にサービスエリアに決まり、球威もそこそこ井上へと迫った。

「何か作戦を立てた様ですが、もう遅いですよ。」

返球態勢に入った井上が狙うのは蘭と志保の間。そこが隙だらけだったからだ。

撃ち返したボールは狙った所に寸分狂わず飛んでいく。

井上はポイントが入る事を確信して笑みを浮かべた。

しかし。

バコン

ボールは井上の前に跳ね返って来た。油断していた井上は対応に遅

れてしまい、撃ち返したもののボールはネットに引っ掛かってしま  
う。

「ど、どうして…?」

予想と違う事が起きて井上は戸惑った。

ボールが跳ね返って来たのは志保がラケットで撃ってきたからだ。  
だが、撃ち返せる訳が無い。なぜなら、隙だらけの場所へと自分が  
撃ちこんだのだから。

しかし現実にはボールは返って来て相手チームにポイントが入って  
いる。

考えれば考えるほど井上は混乱していった。

「驚いてるみたいね?」

「志保ちゃんの作戦、大成功ね。」

蘭と志保は手を取り合って喜んだ。先程立てた作戦が見事に決まっ  
たからだ。

その作戦とは、相手にわざと隙が有る場所を見せ、そこへ撃たせる  
という物だった。

撃たれる場所が解っており、そこへボールが飛んで来ればそれは隙  
では無く絶好球へと変わる。

平田と井上が正確に隙を突いて来るのを逆手に取った作戦だったの  
だ。

「でも同じ手は通用しないと考えた方が良いわ。次の手を考えない  
と…。」

「あ、それなら私に考えが有るんだけど…。」

いよいよマッチポイントに成った蘭と志保だが、油断する事無く次  
の作戦を話し合い始めた。

「やったー!見た?見た!?!蘭達マッチポイントよ!?!これなら勝  
てるわ!」

園子が両手を上げて人一倍二人の活躍を喜んだ。新一と隼人の表情  
にも笑みが浮かんでいる。



「ああ。マッチポイントに成った事で相手チームはプレッシャーがスゲーだろうからな。もう一回もミス出来ねーんだから。」

「それと今のポイントの取り方が響く筈だ。相手チームは何で撃ち返されたか解ってねえみてえだから攻撃の手は鈍るぜ。」

蘭と志保の活躍に笑みを浮かべながら見守っている新一と隼人を見て、園子は少しからかってみたくなった。

蘭達がマッチポイントを取った事で応援している園子にも余裕が出来たみたいだ。

「もしかしてアンタ達、自分の彼女が活躍してて嬉しいとか思っちゃったりしてるのかしらー？」

園子がニヤケ顔でどんな反応をするだろうかと期待していると、新一と隼人は同時に期待通りの反応を示した。

「バ、バーロー。彼女なんかじゃねーよ、あんな面倒臭え女。」

「うるせえ。彼女なんかじゃねえ。あんな恐え女。」

頬を赤らめてソッポを向きながら否定する二人に、園子は笑いを堪えながらも一つ追撃してみた。

「それでも嬉しいのは確かなんでしょー？」

「そりゃ、まあ…。」

「否定はしねえが…。」

頬を赤らめたまま口籠る二人に園子は最早笑いを堪える事が出来ないのであった。

ギャラリィで新一達がからかわれてるとは露知らず、作戦を練っていた蘭と志保だったが。

「ちょっと難しそうだけど、やってみる価値は有りそうね？」

「でしょ？ どうせ普通にやっても勝てないんだから試してみよう？」  
新たな作戦が決まった様だ。

あと一ポイント取れば勝利が確定する。だが実力は相手の方が上だ。勝つ為には作戦によって出し抜かなければならないのだ。

コート内の全員が場に着いた事で、相手チームの平田がサーブを放

って来た。

上から撃たれはしたがやはりミスを恐れてか、狙いも球威も甘い。志保はしっかりとラケットでボールを捉えて相手コートへと撃ち返した。

それを今度は井上が撃ち返してくる。

またそれを蘭が撃ち返す。

サーブから数えてボールが五往復した所で平田がプレッシャーに負けたのか、明らかにミスショットと解るような中途半端な位置へボールを撃ちあげた。落下地点に志保が入り込みタイミングを合わせる様にラケットを振りかぶる。

これをスマッシュで相手コートに叩きこめば、恐らく平田達と言えども撃ち返せないだろう。

そうなれば蘭達の勝利だ。

だが平田と井上は余裕の笑みを浮かべて志保のスマッシュに備えて構えている。

（さあ、撃って来てー。撃ち返してあげるから。）

（ここで私達にポイントが入れば流れは完全に傾きます。）

二人とも撃ち返せる自信が相当有るようだ。

やがてボールの落下に合わせて志保がラケットを振り下ろした。ブンッ

しかし志保は空振りしてしまい、ボールは地面に落ちてワンバウンドする。

その瞬間、志保の後ろに隠れていた蘭が強烈なショットを放った。

そう、志保は蘭に撃たせる為にわざと空振りしたのだ。

平田達は志保が空振りした事でタイミングを崩され蘭のショットへは対応出来なかった。

結果、蘭達にポイントが入り7-3で決着が着いたのであった。

「ハァー…、負けちゃった。勝てると思ったんだけどなー？」

「最後の一球ですが、私達の作戦を見破っていたのですか？」

試合後にテニスコートの中央で礼をする際、井上が首を傾げて尋ね

て来た。

どうやら平田が撃ちあげたのは作戦だったようだ。

「見破ったって程じゃないけど、平田さんが撃ちあげたのに失敗した様な顔をして無かったから変だなんて思ってた。」

「それで警戒した私達は一か八かの作戦に賭けたのよ。」

蘭と志保はボールを撃ちあげた後の平田の表情を見逃していなかったのだ。

「作戦ってわざと空振りしたアレ？」

「うん、そう。上手く行くか自信無かったんだけどね。」

首を傾げた平田に蘭が一つ頷いて苦笑を浮かべながら答えた。

「そう言えば、お二人はどうやって意思を伝えあったのですか？ 試合中はサインを送る様な動きは見えませんでしたか？」

「サインなんか送って無いよ。私はただ、志保ちゃんがわざと空振りするんじゃないかなって思っただけだから。」

「私も、蘭さんが撃ってくれるんじゃないかと思っただけだよ。」

蘭と志保の答えに平田と井上は揃って目を丸くした。

サインを送る事も無く意思を疎通し合っただけなのだから。

「参ったねー？ こんな息ピッタリじゃ私達だって勝てないよ。」

「そうですね。やはり工藤さんや三井さんの様な人を彼氏に持つ方達は違いますね。」

「「ち、違うわよ！ 彼氏なんかじゃないわよ！」」

井上のセリフに蘭と志保は、全く同じタイミングで赤くなり、全く同じセリフを口に出し、全く同じ様に詰め寄った。

この息の合い様こそが園子の妙な自信の理由だったのだ。

「ホント、息ピッタリだもんねー？」

平田も井上も、そんな蘭と志保の息の合い様に苦笑を浮かべるのであった。

午前中の大会が終わり、新一達は昼休憩を満喫していた。

学年ごとの試合は全て午前中に終わったので、学年一位のクラスは既に決まっている。

気になるB組は見事に一位へと輝いた。

内容としてはサッカーが一位、テニスが一位と二位、ソフトボールが惜しくも三位、バスケットが目も当てられない最下位だった。会沢達だけ活躍出来なかったのは、誰も応援に行かなかったからだろうか。

そんな会沢達も新一達がサッカーで一位になった時は泣きそうなほど喜んだ。

その様子に新一と隼人は呆れて対応に困ってしまっていたらしい。

「何とか学年一位には成れたみてーだな。良かったじゃねーかオメー等？」

「ホント！これも新一君達と蘭達が頑張ってくれたお陰よ！」

「そんな事無いって。皆で頑張ったからだよ。」

各々の健闘を讃えあって、楽しく昼食を取っている。

学年一位は決まっているので、図書カードかケーキ引換券を貰えるのは約束されたのだ。

「それで、やっぱり貴方はドロコンコに成ってるのね…。」

志保は隼人の姿を見るなり溜息を吐いた。

試合の時間が重なってしまった為、サッカーの三試合目と四試合目は応援に行けなかったのだが、二試合目が終わった時はまだ綺麗だった。しかしこうして昼食で集まってみると服は土でドロドロ、おまけに擦り傷だらけに成っていたのだから呆れるしかない。

「うるせえ。仕方ねえだろ、三試合目と四試合目はラフプレーが多かったんだから。足掛けられたり、突き飛ばされたり、しまいにはタックルまでして来やがったんだぜ？」

隼人が弁明をするが、イマイチ志保達には伝わらなかった。その理由は。

「でも新一は余り汚れて無いよね？どうして？」

そう、新一の服は隼人に比べて格段に綺麗だったからだ。

「それは俺と三井の役割が違いからだよ。三井は相手を引っ掻き回す為に自分から激戦地に入って行くからな。」

「なるほど？要するにバカなのね？」

「おい：！」

志保のあんまりな解釈に隼人は文句を言いたくなかった。自分は本気でサッカーをしているだけなのに、何故酷い事を言われなければならないのかと。

しかし、文句を言った後の事を冷静に予想して思いとどまった。志保に口で挑んだらロクな事に成らないと解りきっているから。

「でも驚いたぜ？まさか蘭達が優勝しちまうとは思わなかったからよー。」

「それは私達が一番驚いているわよ。優勝は目指してたけど出来るとは思ってたから。」

新一が感心したように話出すと、蘭は笑みを浮かべながら謙遜した。「そうね。対戦相手が良かったのかもしれないわね。決勝は同じB組の子達だったし。」

志保も同意見の様で、笑みを浮かべている。

「謙遜しちゃってー。私は二人なら優勝出来るって信じてたんだから。」

「良く言うぜ？初戦の時なんか不安そうだったじゃねえか？」

「あの時の園子は傑作だったよな？」

胸を張って園子が堂々と言ったが、一緒に応援していた隼人と新一が園子の醜態を暴露してしまった。試合中に抗議しようとしてコート内に入って行きそうになったのを思いとどまらせたり、気落ちしているのを励ましたりした拳句にからかわれた事への仕返しだ。

「うっさいわねー！あの時は、あの時よ。」

腕を振り上げて怒る園子の姿を見て新一達は声に出して笑った。

笑われている園子も、やがて一緒になって笑いだし何とも明るい空

気が流れる。

「さ、ここまで来たら校内一位よ！私達が一番だって見せつけてやろうじゃないのよ！」

そして園子が午後の大会への意気込みを新たにした。

それに皆も頷いて午後の試合へと臨むのであった。

## 球技大会 (テニス編) (後書き)

お読み頂きありがとうございます。

今回は蘭と志保の試合を中心に書かせて頂きました。

ただ作者はテニスをした事がないので、可笑しなところが有るかもしれません。

もし有りましたらご指摘お願いします。

それでは、次回もよろしく願います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8182w/>

---

もう一人の実力者

2011年10月26日10時00分発行